
秋花火を君と・・・。（完全版）

紅崎 夏妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋花火を君と・・・。（完全版）

【Nコード】

N5401M

【作者名】

紅崎 夏妃

【あらすじ】

秋花火を君と・・・の完全版です。あちこち手直ししました。二人の出会いの詳細をご覧ください。

君との出逢いは・・・。

僕が、莉音を、初めて見たのは、大学を卒業して、入社してすぐの、転勤で新しい職場に案内された時だった。

「はじめまして、英莉音です。」

パソコンに向かっていた莉音は、僕の挨拶に、手をとめ、こちらに向かつて頭を下げた。数週間後に結婚を、控えてる莉音は、他の女性達とは、違って、僕には、目もくれず、データの入力に、忙しうだった。横目で、僕の顔をみる事すら、なかった。

「七藤嶺です。」

僕も、上司に、突かれる形で、頭を下げた。

・・・結婚するのか・・・。

彼女は、気にする様子なく、打ち込みを続けている。ほっそりとした横顔が

印象的だった。その時、僕は、何も気にとめなかった。彼女が、僕より、8歳年上、とか、結婚するとか。その時の僕には、地元に残してきた彼女がいたし、誰よりも、彼女は、僕に関心がなさそうだった。でも、その頃、僕は、気付けば良かったんだね。こんなに、君に、魅かれてしまうなんて・・・。君が、まだ、誰の物にも、ならないうちに・・・。もっと、君に、近づけるよう努力すれば、良かったんだよね。この時、ひきとめれば、良かったのかもしれない。だって、君は、僕にも、誰の手も届かない所にいつてしまうんだから。

・・・今の生活を、捨てる事は、できない。・・・

莉音は、僕に言った。

「そうだよ」

僕は、冷静を装った。何度も、頭の中で、繰り返したんだ。この別れの会話は・・・。もっと、僕に勇気があれば、莉音を、奪う事ができたのに。この時に、戻る事は、できない。余りにも、僕達の

恋は、周りを傷つけた。

「へえ……。夫婦別姓なんだ」

同じ職場の、加奈子が、ハシャギながら、新婚旅行土産を配りにきた莉音を、ひやかした。あれから、数週間が、過ぎていて、僕が莉音を目にしたのは、結婚式を終え、新妻になったばかりの初々しい姿だった。

僕自身はというと、学生時代から、付き合っていた彼女、美央とは、遠距離恋愛だったせいもあり、長いつきあいと、互いの時間のすれ違いが原因で、別れる別れないで、もめていた嫌な時期であった。

・・・別れようか・・・

呆然と、考えていた。若いという事もあり、そんなに、美央を失いたくないと思うまで、好きでは、なくなっていた。10代からの恋なんて、こんなものだろうか……。美央と一緒にいるだけで、いろいろ楽しかった。今も、そうだと思い込んでいた。最近は、新しく変わった環境になれるのに、必死で、寂しいという、メールを送る、美央をわずらわしくさえ、思っていた。別れて、新しく、やり直すのに、いい機会かもしれない。そう思っていた。

「七藤君、どうぞ」

莉音は、嶺にお土産の、チョコを差し出した。

「あつ、すいません。俺、甘いのが好きなんです。」

恐縮しながら、手を出した。

「初めて、ですよね？」

莉音は、笑った。初めて、僕を正面から、見つめていた。穏やかそうなその顔。笑う口元には、笑窪が、浮かんでいた。

「何が始めてですか？」

包み紙を、開きながら、声をかけた。

「こうやって、話すの。七藤君って、結構、後輩達に、人気あるんだから」

莉音は、後ろから、覗き込もうとする外野の、視線を気にしたのか、

後ろを、振り返った。

「初めて話したのが、今日じゃないですよ！。俺、赴任してきたばかりの時、挨拶したじゃないですか？」

もう、忘れてるのか・・・？そおいえば、そんなに、関心なかったよな・・・。嶺は、少し、がっかりした。

「そうだった？あつ！ごめん」

莉音は、両手を合わせ、謝るポーズをとった。

「ごめん。ごめん。あの時は、締めに遅れてて、あせってたの。」
彼女は、続けた。

「七藤君の職場の完成検査とあたしの購入課は、ライバル同士だから、今後共、よろしくね。」

莉音は、嶺をみつめ、にっこりと微笑んだ。

そう、その表情だね。その忘れられない笑顔を、曇らせるのは、いつも、僕になってしまふ。思い出しても、辛くなるよ。

莉音の笑顔が好き。

僕は、よく莉音にそう、メールで告げていた。大好きな人の笑顔。何度、そう、告げていたか・・・。

新婚旅行から、帰った莉音に、後輩の美沙が泣きついてた。美沙とは、同じ職場の、まだ、20代の女性で、他の女子社員同様、嶺に関心を持つ子であった。年頃の女性が、人目をひく男性に魅かれる事は、そう珍しい事では、ない。いろいろ接触を試したものの、うまくいかず、比較的、仕事で、やりとりのある莉音に、相談する事にしたらしい。結婚したばかりなのだから、横取りされる事も、心配ないだろう。

「七藤君が好きなの。お願い先輩、仕事でよく話しますよね？協力してくださいーい！」

午後の、湯沸し室で、コーヒ一片手に、莉音に、ねだった。人なつっこい子で、莉音も、彼女の事が、好きだった。しかし、橋渡し役となると、話は、別だった。

・・・今、みたいに、話しかければいけるかもしれないのに・・・。

莉音は、面倒臭かった。あまり、人の面倒を見るのは、得意ではない。取りあえず、職場の女子で、結婚してることで、信用できる女性という事で相談されたいらしい。まあ、嶺は、なかなか、もてるよ。うなので、1番安心できる所で選ばれたという処か。

「ふえー。面倒なんですけど・・・」

莉音は、本音を出した。今は、落ち着いた穏やかな、生活を夫と、したいのだ。人の恋愛に巻き込またくないし、もう、散々である。莉音は、派手な顔立ちのせいで、よく遊んでいると、勘違いされやすかった。ちよつと、男性と話しているものなら、おばさん達の格好な話のネタにされていた。ようやく、知り合えた穏やかな人。この人となら、一緒にくらしていける。31歳になって、ようやく掴んだ穏やかな生活。

莉音は、嶺と関わる事で、穏やかな生活が、崩れてしまうような嫌な予感がした。

「自分の力だけで、いけるよ・・・。十分、魅力的だと思うし・・・。」
なんとか、話をはぐらかしたかった。

「そんな事言わないで下さいよー。先輩は、自分ばかり、幸せでいいんですか？」

「はー？」

美沙は、根拠のない言いがかりをつけた。

「先輩は、いいですよ。みんなに、お祝いしてもらって。」

・・・やれやれだ・・・

美沙は、続けた。

「飲み会を設けるとかー。なんなら、仕事。ほら、報告書とか言つて、メアド聞くとか？」

自分が、聞けば、いいではないか？

「はー？ますます、ますますない？あたし、人妻なんですけど？」

莉音は、断りたかった。

「まあ、まあ！先輩なら、大丈夫。」

てな、訳で、莉音は、嶺のメアドを聞くはめになった。

「ちえ！」

莉音は、小さく舌打ちした。確かに、嶺とは、2人きりで、検査報告書を出すために、実験室にこもる時がある。だからと、いつて、突然、メアドを聞いたら、嶺になんて、思われるか・・。莉音は、納得いかない様子で、データー入力作業に、戻った。

莉音の職場は、広く、そこには、最新のコピー機が置いてある。

そこを、嶺は、よく利用していた。コピー機から、真っ直ぐ、突き当たりに、莉音の席があつた。嶺は、コピーをしながら、いつの間にか、莉音の姿を追いかけるのがクセになっていた。

・・・・いるの？・・・・

目で、追いかける。後ろに、下がって、莉音を探す。10時と3時は、休憩に行っているので、コピーの時間は、ずらす。

・・・・まるで、ストーカーだな。・・・・

嶺は、笑った。特別、莉音に感情がある訳では、なかった。仕事を一緒にしている内に面白い奴くらいにしか、思っていない。しっかりとしているようで、意外と、ボーツとし、嶺に、注意される事が、よくあつた。字もあまり上手では、ない。

「いいの。手書きのない時代なんだから」

嶺にからかわれると、真っ赤になつて、怒った。面白い。最近、すっかり冷めてしまった美央というより、莉音をかまっているほうが楽しい。しぐさも、見ているのも、面白い。だから、ついつい、莉音の、階に、用事があるときは、つい、目で追ってしまう。

あまりにも、莉音の背中を見ているものだから、何かを、感じたのか、急にふりかえった。

「ちよつと！その人」

莉音が、つかつかと歩いてきた。周りの、視線なんか、全然、気にしていない。

「メアド教えなさいよ！ぜんぜん、報告書なつてない。今日中に、

提出できないでしょ！」

「は？」

報告書は、社のパソコンで、十分のはずである。

「だーからー。メアドってんの」

莉音は、制服の、ポケットから、自分の、携帯を、出していた。紅いフレームを、開くと、赤外通信の、画面を出していた。

「早く」

「はい？」

嶺は、驚いた。周りに、コピー待ちの人が、並んでいるのだ。やましい事は、ないのか？本当に仕事の用件だけなのか？余計な詮索が、頭を巡る。

「何、赤くなってるのよ。メアド何に、使つか、わかるでしょ？」

莉音に、言われて、また、顔が、紅くなるのを、感じた。

「早くしろよ！七藤。お前、何考えているんだよー」

コピー待ちの、同僚が冷やかした。

あわてて、携帯を探したが、すぐには、みつからなかった。あせるあまりに、いつもとは、違う胸ポケットに、入れているのを、忘れていた。

「ありました！」

莉音の、剣幕に、圧倒されて、嶺は、携帯を出し、赤外線をしてしまった。

「ゲット！」

莉音は、につこり微笑んだ。嶺の好きな顔だった。

美沙が、どうしても、嶺と飲みたいと無理やり飲み会をセッティングした。共通の、友人を介して、顔ぶれも、接点が、不明なメンバーばかりが、集まった。その中に、やはり、巻き込まれてしまった莉音の姿があった。

「どうして、あたしまで・・・」

ばやいた。今日は、旦那が出張でいない。それをいい事に、実家でのんびり親に甘えるつもりでいたのに、美沙の策略の餌食になり、

今、こうして、美沙の隣、嶺の隣の隣に、ちょこんと座らされている。2人の間におかれて、橋渡しでもしろと、いうのか？すごく、莉音は、不機嫌になっていた。確かに、美沙は、可愛いと思う。周りのアホな男共は、美沙に夢中という子が多い。いつも、ミニをはいているし、リボングッズは、当たり前、ゆるくまいた巻き髪は、背中まであり、足は細く、胸は、大きかった。何よりも、若い。

「別に、あたしなんか、いなくなつて」

莉音は、いつも、美沙が羨ましいと思っていた。黙っていたって、美沙は、誰かが、気にかけてくれる。それに比べて、自分は、声をかけないとお店のオーダーさえきやしない。だいたい……。男なんて……。

「ちよつと、先輩。ピッチ早すぎますよ！」

美沙が、あわてて声をかけてきた。残業が続いたあとのビールである。そおいえば、冷酒も飲んだような……。気付かないうちに、咽の渴いていた事もあり、何杯もお代わりをしていたのだ。

「大丈夫！大丈夫！ちよつと、トイレ」

莉音は、立とうとしたが、上手く立てなかった。そんなに、飲んだつもりは、ないのだが、どうも、冷酒とカクテルを、混ぜたのが、いけなかった。腰が、ぬけたように、なり、慌てて、美沙に抱えられた。

「もう、先輩！しっかりしてくださいよ。」

「だから……。美沙ちゃんが、つきあわせるからだって！」

「もう……。」

美沙は、ふてくされたまま、洗面所の前で、待っていた。

「大丈夫ですか？」

「だめみたい。」

莉音は、洗面所に、突っ伏しそうになった。

「ごめん。あたし、無理みたい。」

大きなため息がでた。

「タクシー呼んでくれる？」

莉音は、自分の体が自分の物でない感じがした。

「帰れます?」

「多分」

莉音は、愛想笑した。

美沙は、莉音と、店内に戻ると、すぐ、タクシーをよんだ。

「もう、帰るの?」

周りの、同僚達が、目をまるくした。

「今日は、仕事も、終わったから、飲むって、張り切ってたって聞いたのに・・・」

「誰が、言ったの?」

「美沙が・・・」

周りが、指さすと、美沙が、うつむいた。

「ごめん」

「言ってないし・・・」

そのうち、タクシーが、来ると、美沙は、お詫びとばかり、乗り込みを、手伝った。

「先輩。今日は、ありがとうございます。」

「何とか、なりそうだった?」

意地悪っぽく、莉音は、聞いた。

「七藤君って、あまり、あたしに、関心なさそうです。」

「そうかな?」

嶺も、同僚達と、一緒に、莉音の、見送りに出ていた。

「七藤!見送れよ!」

誰かに、押されて、嶺は、前に来ていた。

「英さん。お疲れ」

嶺は、軽く見送るつもりだった。美沙と、くっつけようとしていた莉音の、たくらみは、なんとなく、気付いていた。突然、メアドを、聞いたり、飲み会を設定したと思えば、美沙の、隣に座らせたり、みえみえだった。それでも、嶺は、莉音と、少しでも、時間を、共有したいという思いから、飲み会には、出ていた。

「じゃ！また」

美沙の間に、滑り込んで、莉音を、覗き込んだ。

「おやすみなさい」

莉音は、微笑みかけた。

「大丈夫ですか？」

「ちよつと、飲みすぎたみたいよね」

「そうですよ。」

一瞬、嶺と莉音が、みつめあった気が、美沙には、した。

「じゃ！」

莉音が、ドアを閉めようとしたその時、嶺は、ドアを、押えた。

「おやすみなさい。」

周りの、同僚達が、呆気に、とられるのを、後に、嶺は、挨拶すると、車は、走り出していた。

「自宅つて、何処？」

「今日は、実家に帰る予定なの」

莉音は、乗り込んで来た嶺に、ちよつと、冷たい態度をとった。どうして、タクシーに、乗り込んできたか、判らなかった。せつかく、美沙に、頼まれて、お膳立て、したのに、これでは、台無しではないか。莉音は、実家までの、道順を、説明すると、黙り込んでしまった。

「あのさ・・・。」

なんとなく、莉音の、怒っている気配を、嶺は、察して、口を、開いた。

「もしかして・・・怒ってる？」

「どうして、そう、思うの？」

横目で、睨んだ。

「なんかさ・・・。たくらんできた？」

「たくらむなんて、人聞きの悪い・・・。」

「もしかしたら、そうかな・・・？って、思ってた」

しばらく、莉音は、黙っていた。

「まずいと、思うと、黙っちゃう人？」

嶺は、笑った。

「あなたは、判りやすいんだから・・・。」

「そうかな」

「そうだよ」

「何に気付いていたの？」

「美沙さんの事。」

「やっぱり・・・。」

莉音は、口を、尖らせた。

「本当。判りやすい・・・。くっつけようとしてたでしょう？」

「ちよつとだけ」

莉音は、指で、少しだけと、合図した。

「ダメ？」

可愛く言ったつもりである。

「あのさ・・・。俺の気持ちは、関係ないんですか？」

「いや・・・。一応、頼まれたからには、一肌、脱がなきゃかな？
って」

「まったく、姉御肌というか・・・。」

嶺は、呆れた。

「あれから・・・。メールが、凄くてさ・・・。すぐ、わかったよ。どうして、メアド聞いたのかって事。」

「ごめんね」

「簡単に、教えて欲しくなかったな。あなただから、教えたのに・・・。」

車は、街を離れ、一路、莉音の実家を目指していた。

「もう、少し、飲みなおそうか？」

下心が、あつた訳でなく、嶺は、莉音と少し飲んでみたいと思っただけだと思う。

「十分、飲んだけど・・・。」

あまり気乗りしない態度を、あからさまに、莉音は、だした。

「確かに、飲みすぎたから、帰るんだよね？」

「そうだけど・・・」

腰が、ぬける程、飲みすぎたのだ。よりによって、嶺と、飲みに行くなんて、ありえないと思う。

「帰ります！」

「帰るの。」

「そう・・・」

「メアド勝手に、教えたお詫びに、付き合つとか？」

嶺は、にやつと、笑った。

「無理矢理？」

「そう!。」

車の行く先は、もう一度、街中へと、向かっていった。もうすぐ、日付が、变ろうとしていた。何と、長い一日だったろう・・・。仕事を、ようやく、終え、美沙の我儘に、付き合う。いつもなら、お風呂に入って、寛ぎながら、テレビを、見ている時間である。幾度となく、欠伸が、出ていた。

「眠いの？」

嶺が、聞いた。

「はい。」

「意外と、子供なんだ・・・」

「はい。」

むつと、しながら、返事を返した。車は、嶺の知っているという、店の前で、とまった。地下に、降りていく階段には、いくつもの、青いイルミネーションが、飾られており、所々には、アジアンチックな、花が、咲いていた。どうしても、欠伸のたえない莉音は、嶺の後ろについて、しぶしぶ階段を、降りていった。

「ここです。」

嶺は自慢げに、振向き、ドアをあけた。

「へえ・・・」

一瞬、居空間が、広がったのかと、思うような、闇が、目の前に広がった。だが、それは、一瞬の事で、次第に、目が、馴れてくると、ほの暗いホールの、中央に、ピアノの置かれたバーになっていた。所、所に、LEDだろうか……。ランプの、蒼い光あが、灯っていた。

「きれい……。」

莉音が、呟くと、嶺は、満足そうに、頷いた。

「こつち……。」

促されて、莉音は、中へと、入っていった。

「こないいい所、知ってるんだ……。」

「来てよかった？」

「一瞬、そう思ったかな。」

立つてるのは、まだ少し、辛いので、近くにあった席に、そのまま、腰かけた。

「大丈夫？」

嶺は、覗き込んだ。

「大分、落ち着いたかな？誘つといて、聞くの？早く、帰りたかったのに……。」

莉音は、ふくれた。

「すぐ、帰るから……。」

テーブルに、そつと、顎をのせた。

「疲れた……。」

「新婚だから？」

「また、そんな……。」

少し、顔を赤らめた。その顔を、見て、嶺は、少しだけ、見た事も無い莉音への、夫への、嫉妬心が、首をもたげた。

「ねえ……。聞かせて欲しいんだけど。」

「何を？」

莉音は、面倒臭そうにいった。

「旦那さんとの、出逢い。聞かせて。」

突然、自分の口から、そんな言葉が出て、嶺自身が、驚いた。
「恋愛？」

ついで出る言葉に、莉音も、驚いた。

「聞いて、どうするの？」

「どうするんだろうね……。でも、気になるんだ。」

嶺は、傍にいたウェ이터を呼び、飲み物を頼んだ。

「英さんは、ウーロン茶で、いいよね？」

「お酒、飲もうかな……。変な話でたし。」

「飲まないと、話せない事？」

嶺は、かまった。

「どうして……。聞くのになって、思っで。」

「話したくないの？」

一番、最初、出逢った頃は、普通に、これから、結婚する事、そして、旦那もち、である事も、普通に話せた。だが、最近、嶺の前では、あまり、家庭の事は、はなしたくなかった。嶺も、同じく、あまり、莉音の家庭の話は、聞きたくないと思っでいたが、お酒の席という事もあり、いろいろ聞きたくなっでいた。一番は、恋愛なのかっで、事。

「たいした話でも、ないの……。」

莉音は、目を伏せた。

「友達の紹介なの……。静かで、優しい人。一緒に居て楽かな……。っで、思えた頃、プロポーズされて……。」

「……。」

嶺は、聞っでいた。

「すっごく、盛り上がっで、盛り上がっで、結婚するのかっで、おもてっただけ……。意外と違っかった……。」

遠くを、見る目だ。

「結婚っで、意外なところで、決まっちゃうのね。」

莉音は、くすっで、笑った。

「俺がさ……。」

何を言おうとしているんだ？と、嶺は、自分で思った。

「もつと、早く、傍に居たら、付き合ってた？」

「はあ？」

莉音は、目を丸くした。

「どうしたの？酔ったの？」

「うん・・・。」

カタンと、椅子が、前に傾く音がした。暗い店内が、更に暗くなつたと、思った。嶺が立ち上がったのだ。莉音に、立ちはだかるように、その顔があつた。

「七藤君？」

あれつと、思つた瞬間、嶺の唇が、触れていた。優しくほんの一瞬、莉音に、触れていた。

「みた時から・・・。」

莉音は、拒否しなかった。嶺の、右手を鳥、自分の胸にあてていた。

「すごい・・・。ドキドキしているよ。」

「お酒のせいじゃない？」

顔をくつつけたまま、嶺は、言った。

「美沙に、怒られるね。」

莉音は、忘れていた。今、一人の女性として、嶺の前にいた。英莉音として・・・。そのまま、テーブルに手をつき、つま先たちになった。嶺に、届くように・・・。そして、あらためて、嶺の顔に、自分の顔を近づけていった。ほんのりと、ランプの、明りに照らされて、優しい眼差し、嶺の顔があつた。

「お酒のせいかな」

莉音は、そう言って、嶺に、唇を重ねていた。ほんの、軽いキスだった。

「ごめん。」

あわてて、嶺は、言った。

「どうして？謝るの？」

「出よう。」

問いには、答えず、嶺は、莉音の背を押して、出口に行くように、促した。自分は、会計へと、進み、やや、遅れて、階段を上がってきた。

「どうして、謝るの？」

階段に、腰かけた、莉音は、少し、怒っていた。

「ああいう事の後、怒るのは、傷つく・・・。」

「ごめん・・・。つい。」

「間違ったって事？」

嶺は、考え込んでいた。座っている莉音の、手を引き、無理やり立たせると、階段を、ひきずるように、上がっていく。

「間違っってなんか・・・。ないよ。」

ちいさく、呟いた。

「押えるのが、大変なんだ・・・。」

声が、ちいさくて、莉音の耳には、届かない。

「聞えないよ！」

「いいよ。聞えなくて。」

感情的になっていた。

「ごめん。とにかく、今日の事は、忘れて。」

「大人でしょ。このくらい・・・。」

莉音が、言いかけた時、嶺は、振り返っていた。怒ったような、泣きそうな顔をしていた。

「このくらい？」

「う・・・。ううん」

あまりにも、すごい剣幕に、莉音は、ひるんだ。

「じゃあ・・・。どのくらいなら？」

嶺は、強引に、莉音を引き寄せた。両手で、莉音の、顔を抑え、今度は、先ほどの、優しさとは別に、莉音の、唇を、貪った。階段の上り口は、誰も通る者は、おらず、2人きりだった。

「このくらい。」

嶺は、言った。先ほどの、泣き顔とは、全く、別の顔になっていた。

「このくらいだったら、謝ればいい？」

「そう・・・。」

恥ずかしさで、嶺の顔を直視できなかった。

「帰ろう」

嶺が、莉音の手をひいた。

「うん・・・。」

何も、言えなかった。自分は、嶺に、魅かれ始めている。それを、感じていた。

どうして。そう、思わずに、いられない。今頃になって、好きな人が、現れるなんて。この感情を、認める訳には、いかない。このまま、夫と静かに、暮らしていく予定なのだ。嶺の、自分に向けられた感情が、熱く深い事を知ってしまった。いや・・・。本当は、気付いていたはず。美沙との仲立ちを頼まれた時に、心の中に、小波が、たつたではないか・・・。嶺が、好き。手を引かれながら、莉音は、隠さずにいられた。

「タクシーないか・・・。」

通りに出た所で、嶺がつぶやいた。もう、時計は、2時を指していた。

「歩こうか？」

莉音は、言った。

「歩けるの？」

驚いた顔で嶺は、言った。もう、あんな事もあったりで、莉音の酔いは、すっかり醒めていた。

「それなら」

駅から、莉音の実家までは、決して、歩けない距離では、ないが、かなりある。それでも、2人は、ふざけあいながら、歩き出す事にした。会社では、決して、出来ない2人だけの時間。

「あのさ・・・。」

嶺が、先になって歩きながら、声をかけた。

「本当に、美沙ちゃんと、くつつけたかったわけ？」

「ああ・・・」

莉音は、愛想笑いをした。

「頼まれたから・・・」

「頼まれたから？俺の気持ちは？」

真面目な顔で、聞いた。

「橋渡しを頼まれただけなの。」

「傷つくな・・・」

ぼそっと、言った。

「英さんは・・・。莉音は、平気なの？」

苗字で、呼んだのを、訂正した。

「う・・・ん。答えないとダメ？」

「答えたくない？」

「今は・・・」

大好き。そう言いたかった。答えは、決まっている。それでも、莉音は、嶺に言えなかった。美沙と嶺の、仲立ちをしている間に、自分が、嶺に魅かれていたことを。冷静に考えなければ・・・ここでやめれば、誰も、傷つかない。でも、ここで、引き返すな。と心の奥で、もう一人の自分が、叫んだ。嶺の莉音への思いがあったのか、再び、嶺は、莉音の、体を抱きしめていた。もう、夜明けが、近づいていた。

どんな事が、あっても、時間は、流れていく。仕事をしていても、莉音は、身が入らなかった。自分は、何をしたのか？判っていた。唇が、覚える。

・・・これは、いけない事だ・・・

莉音は、判っているつもりだ。嶺が好き。自分が、美沙との橋渡しをしている時、嶺と話す事が、どんなに、楽しかったか。でも、自分には、待っている人がいるし、嶺にだって、可愛い彼女がいる事は、知っている。

・・・自分達は、大人だ・・・キスぐらいで、こんなに、揺らぐなんて・・・。

莉音は、かぶりを振った。出張から、帰って来た時の夫の顔を思い出そうとしていた。優しい笑顔で、莉音を、みつめていたでは、ないか？自分だって、疲れているのに、夕食を作って待って、いてくれたり、洗濯だって、一緒に干して。これ以上の幸せは、ない筈なのに、どうして、自分は、嶺に魅かれてしまうのだろう。莉音は、苦しくなっていた。

・・・お酒の席の事。はずみよ。はずみ・・・

莉音は、無理に思い込む事にした。

「莉音さん？」

誰かが、パソコンに夢中になっている莉音に、話しかけてきた。

「？」

莉音が、顔をあげると、そこには、嶺の顔があった。莉音は、目を合せられなかった。

「まったく。」

嶺は、かがんだ。

「罪作りですよね。」

莉音の耳元で囁いた。

「届いてます？」

「何が？」

莉音は、赤面していた。

「だから」

嶺は、笑った。

「報告書ですよ。英さんが、できないから、残業になって、帰れないって、女の子達泣いてますよ」

「！」

嶺は、笑いながら立ち去った。そうだ、嶺との事に気をとられ、すっかり、仕事に遅れがでていた。ちよっと、時間があると、すぐ、嶺との事を考えてしまう。そう・・・あの夜から。でも。こともあるうか、それを、原因である嶺に指摘されるなんて。

「もう！誰のせいよ」

・・・ばからしい・・・

莉音は、悩むのをやめた。あれは、お酒のせいだ。そう、思う事にした。誰にも、言えない。このまま、忘れよう。このまま、そっとしておこう。胸にしまい、忘れてしまおう。あの後、美沙が、2人で何処行つたの？とか、いろいろ五月蠅かった。そりゃそうだ。気になる男性が、2人で、どこかに行ってしまったのだから。でも、あえて、言い訳もせず、

「秘密」

と言って、わざと、謎めいて、ごまかしておいた。美沙は、面白くなかった。

「メールが、こないの」

美沙は、言った。

「誰から？」

莉音は、判っていて、聞いてみた。

「嶺君」

「ふーん。仕方ないんじゃない？だって、彼女いるって、知ってて、狙っていたんでしょ？」

関心のないフリをした。ちよつと、きついかнаと思つたが、わざと、言ってみた。

メールを送らない原因は、わかつていたが、その原因を、嶺の彼女に転換する。

「それは、知ってますけど。」

美沙は、少し、シヨゲた。

「好きになるのは、自由でしょ。」

「確かにそうね・・・。」

そついいながら、自分にも、あてはまると思つた。

「先輩は、一緒に、車なんか、乗っちゃって、何か下心あつたんじゃないんですか？」

「そうね。あつたかもね？」

「やっぱり？」

美沙は、キツと、きつい表情をした。

「冗談よ……。まったく……。」

「だって、七藤君つてば、先輩に気がありそうなんだもん。」
ドキッとした。

「まさか……。彼女いるって、聞いたわよ」

いかにも、関心ありませんって、感じで話をそらした。莉音には、メールが届いていた。内容は、特別なものでは、なく。今日の夕日が、綺麗だから、観てください。とか、煮物の作り方とか、些細な事で、メールは、続いていた。このあいだは、カレーの美味しい作り方を聞いてきたが、後から、きたメールには、

・・・結局、友達がきて、ラーメンを食べに行きました・・・と、あった。

「友達？彼女でしょ」

メールをみた、莉音は、携帯を、ベットに放り出した。メアドを聞いてから、メールのやり取りは、ずーっと、続いていた。あの、飲み会のあった日も、莉音が、行くのかどうかも、聞きにきていた。

「私服見るの、楽しみにしています」

気を持たせるメールが、多かった。そんな内容のメールだったりするから、実際、嶺への気持ち、育っていったのかもしれない。少しの時間の合間を、縫うようにして、嶺とのメールのやり取りが、続いていたのだ。あの後、帰って、すぐからも、メールが着ていた。「一緒にいれるだけで、楽しい。」

そのメールを見ると、莉音の、思いは、乱れるだけだった。

不倫は、周りを不幸にする。

誰かが、言っていた。嶺は、そのとおりだと思っていた。でも、そんなのは、自分は、関係ない、自分には、美央という恋人がいるし。美央から、頻繁に来るメールを煩わしいと思う事は、あるが、取りあえず、上手くいつている。そう、思っていた、最近までは。メー

ルを知らせる音が鳴る。つい、あわてて、送信元を見ると、美央だったりして、がっかりする。そんな事が続いている。

・・・何故、がっかりする？・・・

嶺も、わかっていた。誰に魅かれ始めているか。でも、それは、気づいては、いけない。彼女には、家庭がある。ここから先には、踏み込んで、いけない。まだ、新婚では、ないか、メールが、少しでも、遅れると落ち着かなくなる。付き合っている美央とは、長い付き合いで、親同士も、互いが、結婚すると思っていたし、自分もそのつもりでいた。もう少し、仕事、落ち着いたら、クリスマスには、プロポーズするつもりで、お金も貯めていた。

・・・それなのに、どうして・・・

自分でも、わからない。たぶん、自分は、年上の莉音に魅かれ始めている・・・抑えようとすれば、抑えるほど、莉音への、思いは、大きくなっていく。

美沙との飲み会にでた時、莉音に逢えると思うと嬉しかった。ほんの少しのチャンスがあれば、話したいいつも思っていただけに、車に、乗れた時は、もっと、もっと、話したいと思っていた。莉音に、思わず触れる事が、出来た時は、嬉しかった。莉音が、背後に抱えてる事や、自分の立場など、ほんの少しも考えて無かった。でも、これは、不倫だ。嶺は、苦悩した。

「どうしたの？最近、あまり、返事くれないけど」

あまりにも、嶺のメールの様子が、おかしいと感じたのか、ついに、美央が、携帯をかけてきた。

「何か、あったの？」

「仕事で・・・疲れてるだけだよ」

まさか・・・好きな人が、出来たかもしれない。なんて、言えなかった。

「疲れてるの？」

「たぶん・・・」

「ちゃんと、食べてるの？」

美央は、時々、母親のような口ぶりになる。それが、心地良い時もあったが、小うるさくもあった。年上なのに、子供っぽい莉音とは、全く、性格が、ちがかった。

「食べてるよ……。まあ、どうしても、コンビニになっちゃうけど。」

「心配。最近、顔みてないから、逢いたいな。」

「ここまで、来るの。たいへんだろ？」

何故か、美央が、逢いに来るのを、拒否してしまった。

「平気よ。行っちゃまずい？」

「そんな事ないけど。」

「週末にでも、行くわ。ママも、心配してるの。上手く、いつてるのかって」

公認の仲なのだ。美央とは、いづれ、結婚する事になるだろう。

「判ったよ。待ってる」

「うん」

嬉しそうに、美央は、電話を切った。前は、美央が、来るのが嬉しかった。久しぶりに、あちこちスーパーに買出しに出掛けたり、一緒に料理をする。少しでも、一緒に居れる時間が、愛おしかった。

でも、今、あの日を境に、嶺の心が、変っていった。来るのが、大変な距離でも、いつでも、待ってると言っていた。今回は、無理するなど、言ってしまった。それを、長年、付き合っていた美央が、感じない訳が、なかった。

「ママ。週末。嶺の所に行つて来る。少し、帰るのが、遅くなるかも。」

美央は、家族に、そう告げていた。

嶺に、何かあったのかもしれない。女の勘が、告げていた。

後日、嶺のマンションにたずねて来たのは、長身の人目をひく、美人だった。

嶺の彼女を、誰もが想像したと思う。おそらく、それを裏切らない

細くて、背の高いモデルのような娘だった。2人居ると、人の目をひいた。ファッションセンスも、いい2人と、言われるのが、美央の自慢だった。自分の、身長とも、つりあいがとれ、センスのいい嶺が、大好きだった。

「結婚する。」

周りの友達には、宣言していた。と、言うより、誰もが、結婚すると思っていた。だから、大学を、卒業して、地方に、勤める事になった時、誰もが心配した。

「美央。田舎に行くの？」

「行かないよ。」

美央は、答えた。

「だって、結婚するんでしょ？」

「また、こつちに、戻ってくるって。その時かな。」

美央は、微笑みかけた。

「だよね。美央ちゃん、田舎には、住めないもんね。」

「そんな事ないよ！」

嶺と、一緒なら田舎にだって住める。

「ママが、心配するから」

美央は、一人っ子だ。

「じゃあ、あと少ししたら、結婚ね」

「うん」

周りから、結婚と言われ、嬉しそうな顔をする美央だった。

「何か、作るうか？」

週末、マンションにやってきた美央に、嶺が、声をかけた。あまり、美央は、料が上手ではない。一応、何か作るうかと、言う美央では、あるが大抵は、1人暮らしの長い嶺が、料理をする事が、しばしばだ。

「うん。嶺のカレーが、食べたいな。久しぶりに」

美央は、甘えた。

「カレー？随分、見くびられたな。」

嶺は、笑った。

「それしか、出来ないみたいだろ。」

「でも、美味しいの。嶺のカレーは。」

「はいはい。材料あつたっけ？」

2人で、買出しに行くのも、気がひけたので、嶺は、在る物で、カレーを作るうかと、キッチンに立った。

「疲れなかった？」

美央に、話しかけるが、心は、ここになかった。今頃、莉音も食事を作っているのだろうか。旦那さんのために……。

「そうだよな。」

自然と、ため息が、もれた。

「嶺、最近、変だよ。」

後で、ため息を聞いていた、美央が、嶺を抱きしめた。

「何か、あつたの？美央、寂しいんですけど」

「何もないよ」

肩に触れる美央の手に重ねた。

「何もない顔じゃないよ。」

「気のせいだよ」

どうしても、美央には、分かってしまふ。嶺の心が、少しずつ、変ってきているのを……。

「心が、ないみたい……」

「そうかな……」

莉音は、手が届かない人。一緒には、なれない。考えるのは、よそう。自分は、美央と生きるのだから。

月も、末になり、忙しい日が、何日か過ぎた。莉音も、あの夜の事を、忘れようとしていた。当の本人も、いたって変らぬ様子だし、気にしている自分が、多少、馬鹿らしく感じてきた。

……ここは、大人の女として、びしっとしなくては……。

などと、考えて、異常な程の、テンションの高さで、月末処理をこ

なしていた。仕事をしていた方が、何も、余計な事を考えないで済む。嶺の事や、家の事を考えると、ミスが増えた。

・・・あれは、事故。事故なの・・・

残業も自ら、名乗りでた。・・・と、ここまで、何事もなく、過ぎていった。

「研修にいつてほしい」

「はいい？」

「以前から、申し込んだのが、ようやく、順番がまわってきたよ
うだよ。」

課長が、喜べとばかり、莉音に話した。

「前から、行きたいって、言ってたよな。」

「確かに・・・。」

莉音は、隣の県で行われる、研修に、1泊で行く事になった。今度、新しく導入するソフトの勉強会になる。

「何名か、他の部署から、出席するかもしれんが」

課長が、人選したパンフレットを、渡した。莉音が、出席者名簿に、目を通すと、今は、あまり見たくない名前が・・・。

・・・七藤嶺・・・

「業務命令だからな」

隣で、部長が、笑った。別に、嶺との、関係を知って、笑ったのではなく、あくまでも、莉音が、新婚なのに、1泊を渋っているように、見えたのであろう。

・・・困った・・・

たしかに、他に、何名かは、いる。でも、本当に知らない人ばかりだ。

・・・しかつりすれば、大丈夫・・・

莉音は、命令書を、強く握りしめた。何かが、崩れていく。そんな気がする。同じ頃、職場で、莉音の名を見つけた僕は、その時、何を考えていたのだろう・・・。

英 莉音。

その3文字に、心が、震えた。美央と逢い、改めて、美央と、生きていこうと思つたばかりなのに、莉音の姿を追いかけていた。諦めよう。

そう思い、努めて普通に接する事にしていたのに……。2日日間も、莉音と、一緒に居たら、また、心が、揺れてしまうではないか……。僕の幸せは、親を泣かせ、兄弟を泣かせ、友達を裏切り、職を失い、そして、莉音に全てのものを、捨てさせてまで、手に入れたいものなのか。冷静に考え、それは、違つてたのが、答えでは、ないか……。でも、僕の心は、感情の赴くまま、莉音の側にいたい。そう、叫んでいた。純粹に、最初は、ただ、それだけだつたと思う。もうすこし、もうすこし……。と、思いながら、それを願う。莉音は、手が届きそうになると、また、遠くへ、いつてしまう。僕は、届きそうで、届かない莉音を追いかけてしまつていた。美央の事も忘れ、この日から、僕は、莉音に触れたいと思いはじめていた。恐ろしい事に……。

そんな2人の、思いを別に、日にちは、流れて行き、研修の、日が、やってきた。社の中の何人かと、新幹線での、移動の時も、互いに、目を合わせる事も、話しかける事もなく、互いの存在を無視していた。話しかけると、心に決めた事が、全て、崩れてしまいそうな気がした。研修会場に入り、互いの指定席が、離れていると知って、莉音は、ほっとするのだつた。

「良かった……。」

思わず、呟いた莉音に、前の席の子が、振り返つた。

「どうかしました？」

「いえ……。終了時間が、3時なら、少し、街見れるかなと、思つて」

「でも、良く、見ました？レポートできないと、終了出来ないみたいですよ！」

「ええ！」

莉音は、苦笑いした。

「そうみたいね・・・」

シヨッピングは、おあずけか・・・。莉音は、ため息をついた。

「どうした？レポート出来た？」

嶺が、端の方から、話しかけてきた。研修も、後、レポートさえできれば、今日は、終わりなのだが、数ある資料の中から、回答を探すのに、手間取っていた。

「うーん。いまいち、答えが、まとまらなくて・・・。」

莉音は、頭痛がしていた。ここんところ、公私共々、忙しかったせいか、気の休まる時がなかった。

・・・あんたのせいよ・・・

嶺を恨めしく思った。嶺は、とうに、終らせる事が、出来たらしく、時間を気にしていた。

「何処か、行くの？」

莉音は、プリントを見ながら、声をかけた。

「あたしの事は、気にしないでいいから・・・。出掛けたら？」

「言われなくても、そうするけどね。」

憎ったらしい程、明るい顔だ。

「地域毎の、懇親会をするそうだけど。英さん。どうする？ってか、無理か・・・。」

「ちよっと！人、馬鹿に、しない」

上目づかいに、睨んだ。

「もう！いいわ。部屋で、まとめてくる！」

机の上の資料を片付け始めた。

「そんなに、行きたきゃ、行けばいいでしょ！」

莉音は、嶺にあつた。どうして、嶺が、先に、懇親会に出るという事に、こんなに、反応するのか、自分でも、嫌だった。自分は、嶺と、一緒にいたくて、あせってるのか？

「何、怒ってるの？」

莉音の、イライラする様子に、嶺は、呆氣にとられた。

「もしかして？更年期？」

「うるさい！」

莉音は、落ちたペンケースを、嶺に投げつけて、その場から、去っていった。

「まったく！判ってないんだから！」

こんなに、自分が、切ない思いでいる事に、嶺が、鈍感でいる事が、悲しかった。誰も、いないエレベーターの中で、鏡に、映る自分は、今にも、泣き出しそうな顔をしていた。

「何て、顔しているの？」

思えば、嶺の彼女は、自分より、幾つも、年下である。きっと、肌もツヤツヤだろうし、中から、輝くばかりの、若さで、満ち溢れているだろう。それに、比べて、自分は、どうだ……。鏡に、映っているのは、疲れ果てた30代の、女性だ。

「はぁ……。惨めだ。」

更に、落ちこんだ気分になった。丁度、莉音の、泊まるフロアーについたので、エレベーターから、降りた。代わりに、おしゃべりしながら、20代の、女性が、

乗り込んでいった。気分が、もの凄く、落ち込んでいた。部屋に入ると、ベッドの上に、今日、配られた資料を、放り投げた。

「はぁ……。疲れた」

横になり、メールのチェックをし始めた。

「お疲れ様。お仕事、がんばってね！」

夫からの、メールが、入っていた。

「はい。」

夫は、優しいと思う。限りなく、きっと、夫の腕の中で、静かに暮らしていく事が、一番幸せであろうと、思われる。

愛する事と愛される事……。どちらが、幸せ？莉音、前者だった。

そう、思うと、今の夫は、莉音の理想からは、程遠い。

「だめだ・・・」

枕に顔を沈めた。今なら、引き返せる？どちらに？嶺と生きる事を選ぶ？それとも、全てをあきらめて、夫と生きる？

「七藤嶺さん・・・どうしたら、あたしは、いいんですかね？」

思わず、呟かずには、いられなかった。と、その時、ドアをノックする音が、聞えた。

「誰？」

ドアに、向かう間もなく、携帯がなった。嶺だった。

「外にいるよ。」

「どうしたの？」

「誰かさんが、ヒステリー起しているから。まあ、ドア開けてみないよ」

言われて、莉音が、ドアを開けると、嶺が、立っていた。

「ほら！」

顔の、前に、何か、白い箱を突き出した。

「ケーキ！」

「どうしたの？」

嶺は、真っ直ぐに、莉音の部屋に、入っていった。

「イライラしてる時は、甘いものでも、食べないとね。」

中から、いくつもの、ケーキを、テーブルの上に並べていった。

「懇親会行かなかったの？」

「いいんだよ。」

嶺は、コーヒーを、入れ始めた。

「お砂糖は？」

「入れない。ブラックなの。インスタントなら、ミルク入れるけど。」

「

テーブルの前に、腰かけた。

「何処から、買ってきたの？」

「下。」

嶺は、指で、下を差した。

「どれから、食べる？」

「チーズケーキから。」

莉音は、指さした。

「あたしが、好きなの。知ってた？」

「知らない。」

「知ってて、買ってきたのかと思ってた。」

莉音は、コーヒーを、口に、含んだ。

「でも、チーズケーキなら、紅茶が、いいんだけど。」

「まだ、我儘、言わないの。」

「はい。」

2人ケーキを挟んで、急に、無言になった。改めて、部屋に、2人きりである事を、意識し始めていた。

「あのさ……。レポートなんだけど。」

ふと、ベッドの上に、レポートが、散らかっているのが、気になった。

「どう？まとめたの？」

あわてて、かき集め、片付け始めた。何となく、気まずい。

「ああ……。えっと。」

嶺も、そうらしく、莉音の手から、資料を、めくり始めた。

「どのへん、苦労してるの？」

莉音の手に、思わず触ってしまった嶺は、あわてて、手を、ひいてしまった。あいにく、手に、資料を持っていたので、テーブル上のコーヒーに、当たってしまった。

「うあ？」

テーブルは、勿論、ベージュのカーペットや、ベッドの、端にまで、コーヒーを、ぶちまけて、しまった。

出逢いから。。。別れ。

「ああ。。。意外とドジなんだからあ。。。」

莉音は、バスルームに行つて、タオルを持ち出してきた。テーブルやジュータンを拭いていく。

「かからなかった？」

嶺は、呆然と、莉音のする事を、見ていた。自分が、コーヒーを溢してしまつた事より、莉音との事を、考えているかのようだった。

「ねえ。。。」

嶺は、テーブルを、拭く莉音の、肩に、手を置いた。

「俺達。。。どうなるの？」

「ええ？」

莉音は、驚いて、顔をあげた。真剣な眼差しの嶺の顔が、そこにあった。

「あなたの痕跡が、強くて。。。」

莉音は、ドキつとした。真剣な顔の嶺が、怖いと、思った。

「嶺。。。」

「諦めようと思った。。。何回も。あなたは、一人では、ないから。。。」

「そうだよ。。。」

タオルを置いて、嶺を見上げた。

「知らない間に、どうしても、姿を探してしまう。。。どうしたら、いいと思う？」

「ねえ。。。」

莉音は、落ち着いて言った。

「きつと、今だけの感情だと思う。嶺。あなたが生まれた時、きつと、あなたのご両親は、夢みたと思うの。あなたの結婚の事とか。。。」

莉音は、続けた。

「こんな年上とかでなくて、普通の恋愛をして、結婚する。それが、いいと思う・・・。」

「普通じゃないの?」

嶺は、怒った。

「あなたとの事は、普通じゃないの?」

「一人じゃないでしょ!」

莉音は、大きな声をたててしまった。哀しい感情が、どっと、込み上げてきた。

「あたしは、一人じゃないの。嶺。自由じゃないの」
今まで、抑えてきた感情が、爆発した。

「どんなに、ひかれたって、あなたには、行けない。行っちゃダメなの」

「莉音!」

嶺は、思わず、莉音を抱きしめていた。

「どうしようもないんだ・・・俺って、最低だよ」

嶺の、両手が、莉音の、細い肩を包んでいた。力を入れてしまえば、簡単に、折れてしまいそうな細い肩。このまま、自分の、胸の中で、莉音を、押しつぶしてしまいたかった。

「たぶん。こうなりたかったんだと思う。」

莉音は、嶺の背中に触れていた。意外と細い腰から、真っ直ぐに、背中の、くぼみを、なぞっていた。あごの先に、小さなホクロがある。肩幅に、比べ、腕先は、細く指は、長かった。

「俺も・・・」

莉音の髪に顔をうずめ、小さく笑った。

「ずーと、こうしていたい。」

「あたしも。」

「・・・でも・・・」

嶺との恋は、自分を、跡形残らず、焦がす恋になるかもしれない。自分は、恐ろしい道に、一歩踏み出したしまった。莉音は、感じて

いた。嶺との恋を、成就する事は、これから、苦しみを味わう事になるという事を……。これは、世間でいう不倫。倫理に非ず。それとも、ひと時の恋でおわるのか……。

……これは、ひと時では、ない……

嶺も莉音も、わかつていた。2人共、引き返せない道を歩き始めてしまった事を……。

……もう、引き返せない……

嶺も、ボンヤリ考えていた。こう、なれたらいいと思った事は、あった。莉音と、そうなりたい。

……莉音と一緒にいたい……

それだけで、満足だ。最初は、誰でも、ささやかな、願いから始まる、それは、1つの目標を達成すると、次へと向かっていく。

最初は、莉音の側にいたかった。その次は、唇をもとめ、そして、今は。

「莉音」

嶺は、莉音の唇を再び求めていた。もう、逢えないのかもしれないと、何かに、畏れながら、後、少しだけと、思いながら、幾度と無く……。

時間は、そのまま、過ぎていき、秘密を抱えたままの2日は、過ぎていった。くる時と、同じ、互いに、特別に、接近するわけではなく、普通に、同僚として、接していた。駅で、皆と別れる時も、挨拶をし、軽く手をふってみせた。そして、いま、家の前にいた。

……只今、到着しました。……

帰宅したよ。メールを嶺にいれた。あれから、懇親会は、嶺だけが出席した。莉音は、ぼーっとしながら、ベットの上で横たわっていた。

……自分達は、これから、何処へ向かって行くのだろう……その時には、感じていなかった。不倫の重圧感が、今のしかかっている。嶺と一緒にいる時は、夢中で嶺を求め、嶺の事しか考えてなかった。自分は、二重人格者じゃないかと思える程、全てを忘れ、嶺だ

けのものになっていた。・・・が。今、帰宅し、家の前にたっている。小さなマンションの玄関口。このドアの向こうには、何も、知らない夫が、待っている。莉音は、嶺へのメールを終えると、携帯のメール着信音を消去して、バッグに放り込んだ。

「帰ったよ」

ドアを開けると、いつもの通り、中で待っている夫に声をかけた。

「お帰り」

何も、知らない夫が、優しい笑顔で、莉音を迎えた。

「ご飯、作っていたけど。シチューでよかった？」

莉音の、カバンを、夫は、いつものとおり運ぼうとしたが、莉音は、拒んでしまった。瞬間、嶺からのメールが入った携帯を見られるかも・・・。と、思ったのだ。別に携帯を見ただけで、疑われるわけがないのだが・・・。

「あつ・・・。大丈夫だから」

あわてる莉音に、夫は、何も、疑いしなかった。

・・・でもね・・・

莉音には、不安があつた。

・・・嶺に抱かれてしまつて・・・

自分は、夫を欺く事が、出来るのだろうか？このまま、夫に抱かれれば、嶺を裏切る気持ちになっていた。そう思う事自体が、もう、嶺と関係を持ってしまった莉音は、夫より、嶺を思っている事になつてしまふのだが・・・。やはり、夫を受け付けられない。莉音は、夫を拒んでしまった。気持ちも体も嶺を受け入れたがつていた。嶺には、大学からの友人と、定期的に飲みに行く事が、しばしばあった。何人か、こちらから、大学に行つて、向こうで知り合った友人だ。結構、集まつて、気のあつた同士、悪ふざけをしたり、今の若者らしく、真剣に恋の話等するのだ。結局、集まつて、散々、飲んだ後には、互いの恋人の話になり、最後には、嶺の話になった。大学時代から、美央との事は、皆、知っている。

「結局、どうなつてるの？」

一番親友の慶介が、聞いてきた。

「誰の事？」

思わず嶺の口からでた。

「誰？つて？美央の他に、誰かいるの？」

その場にいた4人が、顔を見合わせたが、すぐ、にやけた表情になった。

「だから、俺がよく言っていただろう？」

慶介は、それ見たことかと言わんばかりに、嶺の背中を叩いた。

「お前には、いろいろ経験してほしいんだよ」

「いや。それが・・・。」

嶺は、ためらった。

「何、つかえてるんだよ。」

「うん・・・。」

「話せない事でもあるのか？」

「ん」

莉音との事を話すか否か。迷っていた。

「言えない事かよ。まさか、不倫とか？」

慶介がひやかした。兎に角、学生時代から、人目をひく嶺は、女難が多く、よく、冷やかして、飲むのが、慶介の恒例となっていたのだ。不倫と言われ、嶺の顔色が、変ってしまった。

「・・・」

何も言えない嶺。

「あー。まさか」

慶介は、察し、他の2人は、身を乗り出した。

「話にくいんだけど」

嶺は、ポツリと言った。職場にいる莉音という女性の事。この何日か、莉音の事で悩んだ事。そもそも、2人の間に、起こった事、自分を抑えられなかった事。そして、莉音への気持ちを、このざわめいた居酒屋で語りだした。

慶介は、嶺の理解者である。2人で、よく遠くまで、旅行しては、

おふざけ写真を撮っていた。たぶん、嶺が、不倫に手を染めたとしても、彼は、理解しようとしてくれた。・・・が、1人、妻帯者がいた。彼の意見こそが、世間の一般意見だろう。

「嶺。お前さ、」

拓斗が、真剣な顔で、嶺に向かった。

「相手の家をグチャグチャにしてまで、一緒に居たい相手な訳？」

そう、拓斗は、美央の事が、昔、好きだった。いまは、家庭を持ち、子供にも、恵まれている。

「親を泣かし、兄弟を泣かし、周りを不幸にしてまで、一緒にいたい相手なのか？」

興奮していた。嶺は、そこまで、考えた事は、無かった。莉音への思いで一杯で、ようやく、手に入れた喜びと、莉音の夫への申し訳ない思いでは、いた。

「仕事だつて、お前・・・。どうなるか・・・。ようやく、馴れてきた所だつて、言つてたろう？」

真剣に拓斗は、嶺の事を心配していたが、もしかすると、妻を寝取られた夫の気持ちになっているのかもしれない。

「・・・」

嶺は、何も応えられなかった。拓斗のいうとおりだと思った。

「別れる！つて、いうか、もう、逢うな！連絡も。そうメールも辞めろ！」

熱弁だった。

嶺は、黙つて、うなだれていた。

「まあまあ、な！」

慶介が、嶺の肩を叩いた。

「いいから、お前ら、行き着く所まで、いっちゃえよ！」

嶺の迷いを打ち消すかの様に、慶介は、言った。嶺が、莉音への思いが深い事を誰よりも、理解したつもりでいたのだ。

「考へて行き着いた答えなんだろう？きつと、今のお前に、にいろ言つても、届かないよな・・・。きつと、判るときが、くる。」

慶介が、静かに言った。

「本当に、好きなんだろう。」

嶺は、頷いた。

「うまく、いくといいな。みんなに、祝福されるように。」

周りは、黙って、飲んでいた。しばらくすると、気をつかってか、全く、別の話題にと、なっていた。

もうすぐ、バレンタインがせまってきた。2月13日は、嶺の誕生日。できれば、誕生日と一緒に祝いたい莉音だったが、嶺の都合で、2月14日を、一緒に過ごす事になった。

・・・本当は、誕生日は、あの人と一緒に难道でしょうか？・・・

莉音は、言いたかったが、責める権利は、ないので、我慢した。本当は、独占したい。自分の物だと言いたい。それが、言えないのが、不倫なのか・・・お互い信じあう。それだけしか、結びつきを確認する方法はない。

・・・自分だって、言えないではないか・・・

莉音は、自分の立場を考えなくなかった。冷静に考えれば、自分の罪がわかる。心の淵を見ないように、嶺には、無邪気に聞いた。心の闇を見透かされない様に。

「バレンタインは、ケーキでも焼く？」

「え・・・？できるの？」

美央は、できない。

「失礼しちゃうわね！」

莉音は、お菓子作りに自身があつた。

「材料買って、行くから。キッチン借りるね！」

プレゼントは、何にしよう。莉音の頭は、嶺と過ごす1日で一杯になっていた。

「わかった！楽しみにしてる。」

嶺は、笑った。会社のコピー機の側で、会話をすると、2人は、すぐ、離れた。自販機の前で、コピー機の側で、よく言葉を交わした

が、嶺が女性と一緒にの会話をしている姿は、珍しい事では、なかった。特別、噂には、ならなかった。莉音は、嬉しそうだった。嶺は、じつと、莉音の後ろ姿を見送った。

「別れる」

あの日、拓斗が、言った言葉が、頭をよぎった。

・・・判ってる・・・

「相手の家庭や周りを壊す気か？」

そんなつもりはない。純粹に、莉音の傍にいたいだけだ。

「行くところまで、行けよ。」

それが、出来たら、どんなに、樂か。

「一緒にいたいだけなんだ。」

嶺は、呟いた。莉音の側に居たいと心から願っている。でも、それは、何も知らない人を不幸に陥れる事。

「別れる」

か・・・。不倫は、先のみえている恋愛。それなら、この日。普通に過ごしてから、別れを言おうか。自分から、不倫に手を染めていて、何で、勝手な言い草だろう。嶺は、失笑した。莉音が、望んできた訳でない。自分から、莉音に手を伸ばしたのだ。

・・・高値の花だったんだ・・・

嶺は、再び笑った。

「どうしてなの？」

後日、美央は、激怒して、携帯の向こうで、怒鳴った。

「あえない？って、どういう事？」

美央が、イラついていた。

「無理だったんだと思う」

嶺は、莉音と、別れるつもりでいた。・・・が、その前に美央とも、別れようと思っていた。

「毎年、嶺の誕生日は、一緒に過ごす予定だったでしょ？」

「ごめん。一緒に居られなくなった。」

美央に嘘は、つけない。

「好きな人が、できた」

ぽっそつと、言った。その後、小さく

「ごめん」

と、言った。

「そんな！」

美央が、絶句した。

「その人と、出来るだけ、一緒にいたいんだ。だから・・・」

「ちよつと」

興奮した美央にさえぎられた。

「この間、逢ったよね？逢ったばかりなのに・・・。どうして？」

強気的美央が、泣き始めていた。

「無理だよ。別れられない。」

そう言うと思っていた。何年も、結婚を前提に付き合ってきた。自分も、美央と、結婚するつもりでいた。でも、今は、気持ちが変わってしまった。

「ごめん」

また、謝った。

「別れられない。」

美央は、くいさがった。

「だめだよ」

嶺は、首を振った。

「今から、嶺の所に、行く」

携帯で話しながら、走り出した様子だ。

「だめだ。逢わない。」

毅然と嶺は、言った。

「どうしてなの。逢いたい！」

「ごめん」

何度も、言った。もう、逢うわけにはいかない。逢って、美央に期待を持たせる事はできない。莉音とも、別れるのだから。

「ずるいよ・・・」

泣きながら、引き止めようとする美央の携帯を嶺は、きつた。誰かへの思いを貫こうとする時、人は、何て、残酷になれるんだろう。

美央にだって、気持ちがあつて、付き合っていた。それが、今、別れようとしている。莉音とも、別れなければならない。美央との事も上手く、やれば、別れなくても、済むかもしれない。だが、嶺には、上手くできなかった。別れてしまふかもしれない莉音に、少しの間だけでも、気持ちを全て捧げたい。嶺の今の気持ちだった。

2月13日は、1人で過ごそう。それは、美央とでもなく、莉音とでもなく、自分一人の誕生日。新しくやりなおす為に。

あの後、美央から、何回も電話があつた。嶺は、出なかった。

・・・終わつたんだ・・・

嶺は、思っている。自分は、これから、残りの時間を莉音と一緒にいたい。それなのに、美央と一緒にいたら、2人に申し訳ないと思つていた。中途半端に期待を持たせては、いけない。美央に冷たくしないではいけない。電話にも、でない。メールも、受けなかった。何度も、何度も、メールは、届いた。着信拒否する事は、出来る。

それでも、万が一のため、それは、しないでいた。

・・・あいたい・・・

美央は、嶺を愛している。それは、ずっと変わらないものだと思つていた。この間だって、嶺は、自分を抱いたでは、ないか。いつもと変らなかつた。それなのに、急に、好きな人が出来たというのか？好きな人がいるのに、自分を嶺は、抱いたのか？いつものように？

・・・許せないよ・・・

美央の心の中で、悪意が育つていった。いままで、一緒にいた。突然、自分の納得もしないまま、別れるという嶺が許せない。自分を裏切つた嶺が許せない。あの時、自分を好きだと言ってくれたではないか。これは、未練では、ない。まだ、自分達は、終わってない。美央は、そう思っている。

2月13日。莉音がくる嶺の誕生日の前日。

この日、嶺は、1人で過ごしたかった。正確にいうと実家で、家族とゆつくり過ごすつもりだった。昼過ぎまで、寝て、午後から実家に行く予定でいた。・・・が。インターホンが、朝早くから、来客を知らせた。モニターは、見慣れた姿を映し出した。

「美央！」

嶺は、目をこらした。

「嶺！あけて」

インターホン越しに、美央が叫んでいた。

「早く、あけて」

「どうして？」

嶺は、あつせた。こんな朝早くに、周りに迷惑を掛け兼ねない。

「まって」

下に降りていって、階下で話そうか？思ったが、言い争いになりかねない。嶺はセキュリティを解除した。

「どうしたの？こんな、早くに」

嶺は、ドアを開けると冷静さを装った。美央は、中に誰か居るのかと疑っているらしく、乱暴に部屋に入った来た。

「どういう事？」

ヒステリックに怒鳴った。

「どうしたの？」

嶺は、お茶を用意しながら、背中から声を掛けた。

「別れるって、話」

「うん。座って」

嶺は、美央にお茶を渡した。

「気持ちに嘘はつけない。悪いと思ってる。」

「嶺。どうしてなの？この間まで、一緒に居るって、言ってたじゃない」

「美央」

嶺は、美央を抱き寄せた。

「傷つけたくないんだ。これ以上」

「嫌だよ」

美央はすがりついた。

「こままだと、みんな傷つくんだ。俺が悪い。美央。今まで、本当にありがとう。」

「ちがう！」

美央は、嶺を突き飛ばした。

「傷つくのは、嶺。あなた自身でしょう！新しい女の所へ行きたいんでしょう」

激しい怒りの顔。

「そうだよ」

嶺は、哀しそうに言った。

「傍に行きたいんだ。気持ちが変わってしまった。美央、心のない俺がそばにいても辛くないの？」

「辛くない！」

美央は、両手で、嶺の手を握り締めた。

「側にいて。お願い。いままで、一緒にいたじゃない？急には、無理なの。時間がほしい。もう少しだけで、いいの。そばに、いて」

「美央。無理だよ」

「離れない。そうでないと、あたし、何するか、わからない」

美央は、激しく、嶺を睨んだ。

「美央・・・」

「嶺！キスして！」

美央は、嶺の首に手をまわしていった。

結局、嶺は、美央に負けてしまい、きちんと、した別れ話は、出来なかった。

「別れない！」

の、一点ばりで、何度話しをしても、無駄だった。終いには、

「逢えなくてもいい。別れるなんて、言わないでほしい」

つと、言って、泣いた。そのまま、いつものように、嶺と過ごし、帰っていった。結局、どちらにも、別れの話をする事は、出来ない

でいた。

嶺には、シルバーのチョコカーが似合うと思う。駅で、シルバーのチョコカーを買った。堂々とお揃いにするのは、恥ずかしいから、こっそり自分にも、同じデザインのチョコカーを買った。2人で出掛ける時くらい一緒に、かけたい。プレゼント用に、1つは、リボンをかけてもらって、自分ののは、そのまま、かけた。材料を買い、嶺の部屋で使えるようカップを2つ買った。たぶん、男の1人暮らしなのだから、ケーキ用の皿もないかもしれない。

・・・雰囲気も大切よね・・・

莉音は、花屋で、花と食器も買い揃え、嶺のマンションへ向かった。嶺のマンションは、街の傍にある。ショッピングセンターのすぐ傍。莉音は、そこに車を停めると、嶺のセキュリティマンションにむかった。部屋番号は、502号室。

「もしもーし！」

ふざけながら、呼び出しを押す。

「どちらさまですか？」

無愛想な嶺の声。

「お届けものです。」

「いりません。」

嶺は、莉音と、知ってて、ふざけた。

「返品できませんが。」

「しょうがないな。」

と、ロックは、解除された。エレベーターを降りると、前で、嶺が待っていた。

「やー！」

嶺は、おどけて見せた。

「おはよう」

莉音も照れくさそうに笑った。

「いろいろ買ったきたの。きゅうり嫌いだった？」

「そう！小学校の時、吐いたから」

「えー！」

莉音は、無意識にサラダっていうと、きゅうりを買ってしまった。

「ごめん。つい買っちゃった・・・」

「いいよ。よけて食べるから」

嶺は、莉音の荷物を持つと、自分の部屋に向かっていった。

2人が、過ごした日から、職場であう嶺と莉音は、なるべく、自然を装っていたが、なんとなく不自然な感じが周りは、感じとっていた。鈍い人達は、気付かなかったが、特に女性は、なんとではなく、莉音が、嶺を意識しているのを感じとっていた。

「もう、英さん！人妻なんですからね。」

意地悪なお局達は、からかい、ランチのネタにしていた。

「まずいよな・・・。」

嶺は、気にしていた。

「俺は、ともかく、莉音は、気をつけないと」

「そう？」

「だって、莉音は、わかりやすいから・・・。変な噂たてられたら、逢えなくなるだろう？」

嶺は、続けた。

「それに・・・、旅行、。行きたいだろう？」

嶺からの、メールだった。もう、少し、暖かくなったら、温泉に行こう。嶺からの、提案だった。温泉は、北関東に行く。莉音の好きな美術館巡りをし、ショッピングモールで、買い物をして、嶺のお勧めのお店で、ラーメンを食べる。旅行好きの嶺が、ネットでいろいろ調べて、計画をたてていた。

「いい所、あったんだ」

嶺が、はしゃいでいた。

「白い温泉なんだ。とろっとしてるんだって」

いろいろ温泉の特徴を調べてるようだ。

「温泉に泊まるんだよね？」

莉音は、確認した。

「そうだよ。」

なんとなく、莉音は、照れ笑いした。

「部屋は、2つ？」

「2つとつても、最終的には、1つになっちゃうから、1つにしておく。」

「布団は、放してね？」

「1つにする？」

嶺は、うれしそうだった。2日間、この街を離れ、ずっと、一緒にいる事が出来る。時間を気にして、あわてて、莉音が帰って行く後ろ姿を見送る時、嶺は、切なかった。夫の待つ家に帰る現実の莉音がそこにいた。

「莉音の夫が羨ましいよ……。」

遅くなった莉音を、車でおくる時、嶺の口から、思わずでた言葉。

莉音は、何て、言ったらいいか、解らなかった。何の弁明も出来ない。このまま、何も考えず、嶺と一緒に、生きて行きたい。

……嶺が、一言言ってくれたら……

莉音は、考え始めていた。

……もし。嶺が、言ってくれたら……

覚悟は、出来てる。思い切って、嶺の元へ、行く。何もかも、棄ててしまおう。

「なんか、嬉しそうね？」

嶺と同じ気持ちを隠すように、嶺に言った。本当に、嶺は、自分と一緒にいるのが、嬉しいんだ。

「そりゃあね。」

いろんな所へ行こう！嶺は、提案していた。温泉に行く。そして、花見。嶺のフットサルの試合を応援して、コンサートも行く。東京にシヨップングに行つて、海にも行く。年間の計画が、限りなく広がっていった。そして、花火大会。嶺は、花火大会が好きだった。

「花火？」

莉音が言った。

「花火って、夏だけじゃないのよ？知ってる？」

最近、仕事で、知った情報を披露した。

「そうなんだ。本当に？」

「9月にも、花火があるの。寒いけどね。秋花火って、言うんだって」

「秋花火？」

「そう、あまり、聞かないでしょう？」

取引先の営業から、聞いた。嶺の花火好きを知って、これは、教えなきゃと思っていた。

「見に行きたいな。」

莉音は、聞いた時から、嶺と行くつもりだった。

「でしょう？見に行きましょう」

「だね。」

返事しながら、嶺は、ふっと、寂しい目をした。秋には、2人は、どうしているんだろう。できれば、その頃も、2人で、居たい。

「花火行つて。そして、コンサート行つて。また、温泉行つて」

「京都もね」

「京都？京都じゃあ、1泊は、きびしいな。」

「じゃ、軽井沢。」

次から、次へと、行きたい所が、浮かんでくる。

「軽井沢は、5月に行こう」

ずーと、2人でいれる。莉音は、そう思っていた。そして、北関東への旅行の計画に思いをめぐらせた。2日間一緒にいれる。それだけで、幸せだった。

「早く、旅行に行きたい」

「体調、整えてな。」

「うん」

莉音は、幸せいっぱいだった。いつも、心の中が温かく、寂しさに、飢える事は、なかった。当日、嶺と莉音は、駅のターミナルで待ち

合わせをした。案の定、朝に弱い嶺は、少し、遅れて現れた。車の助手席を開け、莉音は、滑り込むと、頭から、コートを被り、顔を隠した。

「いつまで、そうしてるの？」

サンガラスの嶺が、笑いかけた。

「高速乗るまで・・・。」

「どうして？」

「見られたら、困るから・・・。」

「へえ・・・。見られたら、困るんだ！」

嶺は、意地悪を言った。

「いじわる。覚えといて」

「俺、頭悪いから、覚えてられないかも」

コートの隙間から、莉音は、キツとにらんだ。

「まあ、まあ、怒らない。怒らない」

嶺は、莉音に何かを放り投げた。

「なあに？」

莉音の好きなチョコだった。それもビター。

「わかってるじゃん。」

「だろう」

「それじゃあ。はい」

莉音が、差し出したのは、小さいお弁当箱。

「食べて、ないでしょう？」

「やった！俺、今朝は、ヨーグルトだけなんだ」

莉音は、小さなお弁当に、おかずとおにぎりを用意していた。いつも、莉音は、晩御飯のお裾分けを嶺に用意し、こっそり会社のロッカーにいれといた。室温の高い日等は、保冷剤を入れて、ロッカーに用意していた。

2人は、北関東を目指した。初日は、莉音の好きな美術館をめぐる。

「美術館にいくような人だった？」

「知らなかった？」

「意外」

「ふん。」

着いたら、生憎の雨だった。早咲きの桜が、雨に濡れている。

「だーれかさんの行いが悪いから。」

嶺は、おどけた。

「俺は、晴れ男なの。」

「はいはい。」

静かな美術館を巡り、最後に、小さなお土産屋さんに入った。

「たくさんあるね。」

一つ一つ、手にとって、莉音は、眺めていった。可愛いこ半茶碗である。

「これ！」

「ご飯茶碗だな。」

「お揃いで買う？」

嶺のマンションに、置きたい。そう思っているうちに、突然、お腹がなった。

「ごめん」

莉音のお腹の虫だった。

「茶碗見ているからって。」

嶺は、笑った。いつも、すましている莉音には、意外な行動だったから、恥ずかしがる莉音の様子が、むしろようにおかしかった。

「らーめんでも食べるか？」

「うん」

すぐ、2人は、車に戻ると、らーめんを食べにむかった。事前に嶺が調べて、おいたらーめん屋へ。

「よく、調べておくのね。」

「楽しみにしてたから。」

心の底から、2人の時間を楽しんだ。その後、名物のじゃが揚げを食べ、ショッピングセンターで、莉音の買い物に付き合った。森の中にあるアウトレットモールだ。

「嶺は、何も買わないの？」

嶺は、疲れたとか、文句も言わず、莉音の買い物に付き合った。あちこち、動き回る莉音に、一言も、疲れたとも、言わず、常に笑顔だった。

莉音と一緒にいるのが、楽しい。その顔だった。

「疲れない？」

休憩に嶺の好きなアイスを食べながら、莉音は、聞いた。

「疲れないよ。」

「本当？」

「本当」

時間が、すぎるのが、早かった。その後、温泉宿に向かった。濁り湯の、こじんまりとした上品な旅館だった。

「ここに泊まるの？」

「そうだよ」

嶺が、フロントで受付をすませた。小さな旅館。2階の奥の部屋に着くと、嶺は、ガイドを莉音に放り投げて来た。

「俺、温泉に行ってくるから。明日、どこまわるか、調べておいて」
持ってきた荷物を広げると、嶺は、タオルを片手に温泉に向かっていった。

「はいはい。そうしますよ。」

莉音が、嶺の出て行った後、ガイドを広げようとすると、携帯がなっていた。

「？」

みると、嶺の携帯である。開こうか……。莉音は、迷った。どうしようか……。迷いながら、莉音は、嶺の携帯を手にとっていた。……が、開かなかった。ロックされていたのだ。

「なんだろう」

ロックしておかなければ、ならないなんて……。すっきりしないまま、時間だけが過ぎていき、しばらくすると、嶺が戻ってきた。

「あー。気持ちよかった。莉音も行ってくれば？」

「うん。」

莉音は、嶺の携帯をとった。

「携帯鳴っていたみたいだけど」

「そう？」

嶺は、莉音から、携帯を受け取ると、画面をみた。

「大丈夫なの？」

嶺の表情が、硬かったのを見逃さず、莉音は、言ったが。

「うん」

と、言っただけで、嶺は、携帯を閉じた。

「じゃあ、あたし。行ってくるね。」

自分が、温泉につかっている間に電話するのも。そう思いながら、

莉音は、部屋を出た。女の勘だった。

・・・なんか、嫌な予感がする。・・・

莉音は、何かを感じていた。

部屋に戻ってくると、いつもの嶺になっていた。

「どうだった？」

「露天風呂もあったね？」

「恋愛成就の露天風呂だって」

「お帰り」

嶺は、莉音を抱き寄せた。

「いい匂い。」

「シャンプーかな。」

莉音が、顔を上げようとすると、また、携帯がなった。

「いいよ。出てよ」

「ううん。こっちが大事」

「気になるから、出て！」

促されて、嶺は、しぶしぶ携帯にでた。

「はい。どうしたの。」

嶺は、ちらっと、莉音の様子をみると

「ごめん」

と、いって、部屋から、出て行ってしまった。

・・・気になる・・・

この、古い温泉宿は、音が、よく響きわたる。莉音は、テレビの音をひくくして、思わず、聞き耳をたててしまった。嶺の声が聞こえてくる。

「今・・・。ちょっと。そう。ごめん。」

要所は、うまく聞こえない。そのうち、嶺は、部屋に戻ってきた。

「うん。大学の友達」

聞いていないのに、嶺は、言い訳をした。

「聞いてないけど」

莉音は、不機嫌に応えた。

しばらく、沈黙が続き、食事の時間になった。なんとなく、気まずい雰囲気のまま、移動して、2人は、食事をし、再び、部屋に戻る頃には、莉音は、気を取り戻していた。

「親父からのなんだ」

嶺が、とりだしたのは、高級そうなワイン。今日は、時間を気にしないで、飲もうとばかり、嶺は、莉音のグラスにワインをついだ。

「だめだよ。飲みすぎちゃうよ」

「まあ。」

嶺は、莉音にグラスを渡した。

「帰る心配もないからね」

「送る心配もね」

そして、時間は、すぎ、嶺は、莉音を腕に抱き眠りについていった。

一度、眠ると、なかなか、起きない。気持ちよさそうに、深い寝息をたて、横に眠る嶺をみていた。思い出したように、頭を掻き、口をならす。面白いクセがあるものだ。トイレに立とうとして、ふと、嶺の携帯が、目にはいった。

「誰からだっただろう・・・。」

なんとなく、莉音は、わかっていた。判っていた。別れの日が近い

事を……。大学時代からの、彼女がいるのである。

「この旅行が最後になるかもしれない。」

無邪気な嶺の寝顔。彼の寝顔をみれるのも、もう、ないかもしれない……。

「嶺。大好き」

莉音は、嶺の寝顔を、みつめていた。

「別れたとしても、大好きだよ」

きつと、大学からの彼女に戻っていくのだろう。

そして、その美央も、嶺との別れは、身にしみて、わかっていた。慌てて、嶺のマンションに押しかけてきたのも、それを、訂正させるつもりだった。大学時代から、長いのである。嶺が、今、何を感じ行動しようかとしているかは、美央にだって、十分過ぎるほど、わかっていた。嶺との出会いは、大学の説明会だった。たまたま鳴った携帯を取り出そうとした時、美央は、誤って、水没させてしまった。親とも、連絡もとれず、困っていたのを、声をかけ、助けてくれたのが、七藤嶺だった。美央の好みの男性だった。入学し、同じゼミになったが、なかなか、声もかけれずいたのを、周りの友人達の、後押しで付き合うようになったのだ。子供みたいに、無邪気な嶺は、一緒にいて、飽きる事は、なかった。いつも、情熱的に、美央に語りかける。

……。間違いなく、自分は、愛されている。……

美央は、そう感じていた。だから、大学を卒業し、別の地方に行くと言っていた時も、何の不安もなかった。自分達は、繋がっている。そう信じていたのだが、最近の嶺は、メールの返信すら、遅く、なかなか、逢おうとは、してくれなかった。

……。私達、だめかもしれない……

職場の、飲み会で、先輩達に、泣き崩れたことも、あった。でも、このまま、嶺と、別れたくない。美央は、もう、自分には、嶺しかないと思っていた。自分は、嶺に愛されている。きつと、誰かに誘惑されたに、違いない。美央は、思い嶺を取り戻すべく、嶺のマ

ンションをたずねたのが、2月13日だった。

・・・嶺に、愛されたい・・・

こうなった時、女は、強いもので、優柔不断で、友人達から、莉音との関係を否定されていた嶺は、美央との、関係を再び、持ってしまった。

・・・離れないで・・・

美央は、そういい残して、帰っていった。自分から、こんな事を言いにきた訳では、ない。嶺に否定してもらいたかったのに、嶺は、自分とずーっと一緒にいたいとは、言ってくれなかった。帰りの終電で、美央は、涙が、とまらなかった。こんな事は、自分からしたくなかった。だけど、嶺を失うのは、もっと、嫌だ。嶺と過ごした時間が、切なかった。自分と、一緒にいると、何度も、メールしてくれた夜が、なつかしかった。もう、嶺は、自分だけを、愛しては、いない。自分に思いがないのに、傍にるのは、辛いと心が叫んでいた。それでも、嶺に、心が、なくなったのなら、それでもいい。傍にいたい。美央は、終電の中で、周りの目もはばからず、声をあげて、泣き出していた。

それから、1ヶ月半は、過ぎただろうか。美央は、その間、嶺に連絡をしていなかった。

全く、何事もなく、静かに時間が流れて言った。ある時期を待つかのように、美央は、静かだった。嶺もすっかり、美央は、落ち着いたものだ、と思い、莉音と、思い出作りとして、旅行に出ていた。少しでも、たくさんの思い出が、欲しい。それが、自分を苦しめるとしても・・・。そう思い、莉音と温泉に行っていた。その時、嶺に電話がはいった。美央からだった。

「嶺？」

最初は、嶺は、出なかった。何回か、かけても、でない。でなければ、出ないほど、苛ついて来る。諦めかけた時、ようやく、嶺がでた。

「どうしたの？」

落ち着いていたいつもの、嶺の優しい声だった。

「久しぶり。」

もう、美央との事は、終わっていると、思っていた。

「話があるの」

美央は、静かだった。そして、何かを秘めているかのようにだった。
「まって。」

嶺は、周りを気にしているようだった。傍に誰かが、居るのか。ド
アのしまる音がして、嶺が、はなしかけてきた。

「何か、あったの？」

「あったわ。大事な話なの」

今、話そうかと、タイミングを見ているようだった。

「今？話したいこと？」

嶺は、誰かに、気をつかっているようだった。

「ゆつくり、話したいの。時間をつくって。」

「わかった。今は、俺も、無理だから」

「誰か、いるの？」

「うん。温泉に来ている。」

嶺は、それだけをいった。美央が、察して、自分を諦めてくれるか
と、思ったが、予想以下に美央は、冷静だった。

「じゃ。戻ったら、連絡して」

「わかった」

意外と、冷静な、美央の態度に、驚いたが、部屋の中の、莉音が、
気にかかったので、すぐ、携帯を切り、部屋に戻っていった。

「ごめん」

「別に」

やはり、莉音は、不機嫌になっていた。美央との事を、感じたのだ
ろう。かといって、変に弁明しても、可笑しいので、嶺は、普通に
待つ事にした。そのうち、莉音は、機嫌が治り、いつもの、笑顔を
取り戻していた。せつかくの2人の時間を、こんな気まずいまま、
過ごすのは、もったいない。

「よかった。姫の機嫌が直って」

「誰が機嫌を悪くしたの？」

「俺って事？」

「少しは、判ってるのかな？」

「反省しまーす」

1泊だけでは、もの足りない。本当に別れなければならない日が、来るまで、少しでも、一緒の時間を作りたかった。2日間は、あつと、いう間に、過ぎていった。

「どうしたの？電話じゃだめだった？」

莉音と旅行から、帰った嶺は、すぐ、美央にメールした。なるべくメールの方が、都合が良かった。第一、感情を抑える事が出来る。美央の話は、だいたい検討がついたので、電話で揉めるのは、どうしても避けたかった。・・・が、美央は、どうしても、嶺と直接、逢いたかった。わざわざこちらまで、出てくるのは、大変だからと、嶺が言っても、美央は、きかなかった。嶺のマンションまで、美央は、やってきた。

「嶺。私の話聞いてくれる？」

美央は、バッグを開けると、中から、1枚の写真を取り出した。

「見てほしいんだけど」

粗い映像写真だった。何かをエコーで撮ったような・・・。

「これは？」

嶺は、美央の顔を見た。美央が、ひきつった顔で嶺の顔を見ていたのだ。

「胎児の写真よ」

「・・・」

嶺は、驚いて、美央の顔を見た。

「私の。」

無表情の恐ろしい顔だった。

「正確には、あなたと私の」

「ちょっと、まって」

嶺は、パニックになった。

「冗談だよな？だって、美央。あの時は・・・」

震えながら、美央の肩を掴んだ。

「そう。大丈夫だって、言っただわ。でも、そんなの、嘘。どうしても、あなたの子が、欲しかったの」

「な・・・。待ってくれよ」

嶺は、首を振った。

「やっぱり、嬉しくは、ないのね。喜んでくれると思ったんだけど」
美央は、表情ひとつ変えない。

「いいわ。私、一人でも育てるから」

嶺の手から、写真を奪い取ると、バッグに、投げ込んだ。

「美央。俺は、君をもう、思っていない。」

嶺は、哀しそうに呟いた。

「俺の気持ちがないのに、一緒にいて、幸せになれるの？」

「なれるわ！」

美央は、嶺を押し倒した。

「私は、あなたを愛している。傍にいたい。嶺が、傍に居てくれるだけで、幸せなの。どうしても、どんな手を使っても、嶺の傍にいたい。」

嶺の胸に、すがりついた。美央は、結婚している訳でもないのに、病院に通い、子供の出来やすい環境を整えていた。なんとしても、嶺の子供を授かりたい。計画的に、嶺を誘った。

「俺が・・・。悪い」

確かに、誘いに乗った。嶺が悪い。でも、それは、恋人同士だった時には、ごく、普通にあつた事。

「嶺。私、産むから・・・。」

「でも。そんな事、君の両親だって、許さないだろう？」

「おろせなくなるまで、黙ってる。あとは、親も諦めるわ」
「美央」

嶺の唇を、美央は、ふさいだ。

「だめだよ。美央」

「いいの。返事は、しなくても。私は、あなたの子供ができた。それだけを、言いたかったただけだから」

美央は、立ち上がると、ドアに向かい。最後に、振り向いた。

「嶺。あたし。待つてるから」

哀しい眼を見ると、美央は、ドアから、出て行った。動けない嶺を残して……。

「嘘だろう……」

嶺は、膝をついていた。まだ、莉音と、旅行から、帰ってきたばかりである。目を閉じると、助手席の莉音の顔が、浮かんできた。

「もうすぐ、お花見の時期よね。」

帰り道、莉音は、助手席で呟いた。

「だよなー。花粉アレルギーの時期だから、俺には、辛くもあるけどね。」

運転しながら、話した。

「春になるんだね。買い物行きたいな？」

「また、買い物ですか？今日、行っただじゃん」

「だって。」

莉音は、甘えた。

「欲しい春用のリップがあるの。気に入ったお店でないと売ってないんだ」

「今回で、有給。使ったしなー！」

「お願い。一緒に行きたいんだ。」

「どうすっかな？」

「えー」

「はいはい。時間は、作るもんだからね。何とか、しましょう」

「一緒にいたいんだもん」

「俺も……。」

ほんの、2、3日前に、嶺と莉音の交わした会話だった。帰宅して

からも、いつもの、お帰りコールで、嶺から、メールが届いた。

・・・一緒にいるだけで、満足・・・

・・・あたしも・・・

莉音が、送ったのも、同じ内容だった。もう、離れなければならぬのか。嶺の胸に熱いものが、込み上げてきた。

「莉音・・・お別れだね。」

莉音かたのメールを知らせる音楽が、鳴っていた。いつもなら、すぐ、携帯を見にいくであろう嶺だったが、今は、動けずにいた。そう、莉音に、メールの返信を送る日が、ここから、減って、いつてしまう。少しずつ、別れの空気が、莉音に伝わっていつてしまう。

「嶺。最近、どうしたの？」

一日に、何度も、携帯のチェックをする。メールを送ると、すぐ、返信してくれただ嶺からは、何度も、メールしても、返信のない日が、続いていた。

「お願いだから、返事して！」

メールに入れても、返信がない。まだ、旅行から、帰ってきて、一週間も、経ってないのだ。滅多に、莉音から、かけない携帯を、何度かかけて、ようやく、嶺から、メールが届いた。

「何が。あつたの？」

「何も無いよ。」

「逢いたいんだけど。明日、逢える？」

「明日は、仕事だから、逢えない。」

「じゃあ、その次は？」

「仕事だよ。」

「一緒に行きたいから、待ってる」

莉音は、嶺と一緒にに行けると思っていた。

「ごめん」

メールの、文字数が、減っていた。

「どうして、謝るの？」

すぐ、携帯が、鳴った。嶺だった。

「待つてるから。買い物を、嶺に、見てほしいの。」

「莉音……。」

辛そうな、搾り出すような嶺の声。

「一緒に行けなくなった。」

「待つてるよ。あたし」

莉音は、単純に都合が合わなくて、行けただけだと思っていた。

「莉音。もう、一緒にいれないんだ。」

「どうして？」

「それは……。」

嶺が、困っている。莉音の携帯を持つ手が、震えた。

「好きな人が出来た。その人と一緒にいたいから……。莉音。ごめん。終わりにしよう。」

か細く消え入るような声。

「嶺。」

莉音は、言葉をなくした。判って、いたけど、お互い、少しでも、一緒にいようと、約束したばかりでは、ないか。

「あたしは、一緒にいたい。出来るだけ、一緒にいたい。」

思っている事を伝えた。切実に、嶺を愛している。でも、これから先、何も約束できる事は、出来ない。形がない分お互いの強い心がなければ、結びついているのは、不可能な恋なのに。

「莉音。だって。俺達……。永遠じゃないよね？」

そう言いながら、自分は、判っていて、莉音を愛したのだと、思っていた。でも、今、ここで、莉音の気持ちを確認したい。

「嶺。あたしは、嶺と生きたいの。」

嶺を離したくない。約束できない将来であろうと、今、嶺を失ったら、生きては、いけないと思うほど、嶺の存在は、誰よりも、大きかった。

「莉音。」

感じていたけど、言葉で聞くと嬉しかった。別れなければ、ならないと、思っていたが、心の中は、莉音への、思いで、一杯だった。

自分も同じだ。今、失いたくない程、大切な存在になっている。

「俺もだよ。莉音。大切だよ。」

優しい落ち着いた声。この声が好きだ。嶺は、続けた。

「でも……。莉音。無理になっただ……。終るんだよ。俺達は。」
嶺が、携帯をきろうとしていた。

「待って！」

莉音の、声は、嶺に届かなかった。すぐ、携帯は、莉音を待たずに、切れてしまった。もう、一度携帯をかける。発信音が、5回鳴るが、意図的に切られてしまった。

「嶺！」

もう、立って、いらなかった。夕方、食事の準備をしていた莉音だったが、その場に座り込んでしまった。

「どうして？」

ほんの、一週間前は、一緒にいたいと言っていたでは、ないか……。

「どうして？」

莉音の、思考回路は、同じ所を回っていた。聞きなれた携帯が鳴り、嶺からの、メールを知らせた。

「……。莉音。いままで、ありがとう。おれは、莉音の事。ずっと、忘れない……」

いつかは、別れなければ、いけないと思っていた。が、逢うたびに、愛し合う度に、もうすこし、もうすこしと、別れを延ばし続けていた。もしかしたら、自分が、勇気をだしたら、嶺と一緒に生きていけるかもしれない。と、莉音は、考え始めていた。その一番、幸せな時に、嶺から、別れを突きつけられた。

「……。好きな人が出来た……」

本当だろうか？大学時代の彼女の所に、戻るのではないのか。

「……。その人と一緒にいたい……」

本当だろうか？自分と一緒に居たいと言ったばかりではないか。人の気持ちは、そんな急に変れるものなのだろうか？

莉音は、混乱していた。長い夜が、始まろうとしていた……。

「これでいいんだ。」

嶺は、莉音からの携帯の着信を拒否した。自分達の恋愛は、祝福されない。判っている。が、こんな莉音を傷つける方法でしか、別れない自分が、許せなかった。でも、ここまで、しなければ、また、莉音の所に、自分は、行ってしまう。かといって、本当の事は、更に、莉音を傷つけ、追い込むであろう。本当の事。いつかは、知れてしまっただろう。でも、今は、言えない。莉音が、早く、自分を忘れ、優しい夫の元へ戻る事を望んでやまなかった。

「早く、忘れるんだ。」

時間だけが、解決してくれる。

悲しみは、突然、現れる。嶺からの別れは、莉音の生きる力をたつたも同然だった。何も、出来なくなっていた。遅く帰宅した夫には、風邪をひいたと答えそのまま、ベッドに入った。体の力が、抜けていた。とにかく、哀しい。つい、最近まで、一緒にいられるだけで、幸せと、運転席で答えていたではないか。情熱的に、莉音に口づけていたではないか。考えが、まとまらない。ほんの、何日か、離れていただけなのに、そんなに、簡単に気持ちは、変わるものなのか……。そんなものなのか……。嶺の気持ちは、自分に対する気持ちは、そんなものだったのか。答えは、でない。何かが、違っていると叫んでいた。確かに、莉音を嶺は、愛していた。それは、間違いなかったと、思う。嶺に、何かが、起きた？のではないか。が、莉音と離れようとする気持ちに変わりはないのでは、ないか。眼を閉じて、でも、全く、眠れない。夜の時間だけが、流れていく。どうして、嶺は、自分といれなくなっただのか。その切ない思いだけが、時間と共に、流れていく。

……嶺……

莉音の目尻を、涙が流れていた。将来のある嶺には、いつか、未来

を築く相手が現れる。女に相手にされない男でない限り。いつかは、別れる日が、くるかもしれない。それが、こんなに、急に、来るなんて。

・・・眠れない・・・

眠れる筈が、ない。立ち上がる気力さえ失った、莉音の周りだけ、時間は、流れていった。

・・・莉音が、恋しい・・・

できれば、一緒にいたい気持ちに変わりは、なかった。いつかは、別れるかも？しれない？いいや、もしかしたら、自分に勇気があったら、莉音と一緒に生きる事は、出来た。もうすこし、時間が、欲しかった。

・・・莉音に逢いたい・・・

切ない。美央と逢わなければ・・・。たった一度あっただけで、自分は、結論を出さなければ、ならない。莉音と過ごした時間は、余りにも、短すぎた。莉音と過ごした思い出だけが、恋しかった。これから、自分は、疎ましいと思ってしまった美央に、今までの、責任を取らなければならぬのだろうか？

「美央？」

嶺は、美央に携帯をかけた。

「嶺。待ってた」

美央は、すぐでた。

「考えた。」

低く、抑揚のない声。嶺の押し出す声。

「子供は、産んでいい。認知は、する。・・・でも」

「でも？」

「結婚は、出来ない。」

嶺の声は、はつきりしていた。その声は、美央に君は、もう愛してないと、いうように、聞こえた。

「子供は、両親が、揃わない環境で、育つのね。」

「美央。できれば。俺としては・・・。」

言いかけたが。

「出来ない。おろせというんでしょう？」

興奮して、美央の声は、震えていた。

「できないわ。無理よ。あなたの子なのよ」

「判っている。」

「あなたの子だから、産みたいの。嶺。わかって。あなたと一緒にいたい。」

「美央。できない」

莉音とは、別れた。裏切ってしまった事をしたから。だからといって、美央と、結婚する気には、なれなかった。莉音に、美央の方が、大切だと、思われなくなかった。

「お願い。嶺。私には、あなたが、必要なの。一緒に、この子を育てて生きたいの。嶺」

嶺は、沈黙した。何て、答えたらいいのか、わからない。自分の莉音だけへの、愛情を貫けばいいのか。それとも、これから、生まれてくる子供の事を考える事が、大切なのか……。一番、判っているのは、莉音とは、もう一緒にいられない事。美央と、深くかわって、行かなければいけない事。

「美央。すまない。少し、考える時間が、ほしい」

莉音とは、もう、終わった。もう、逢う事は、ないだろう。だが、すぐ、美央と、何かしら、進歩があったら、莉音は、どんなに、傷つくだろう。まして、子供が、出来たなんて、彼女が知ったら。

「これ以上、傷つけたくないんだ。」

自分の、莉音への思いに嘘はない。・・・この、気持ち。もう、彼女に届ける事は、出来ない。

「もう少しだけ、待つから、嶺。一緒に暮ら日を、待ってる。」

携帯は、切れた。嶺は、携帯を持ったまま、遠く、莉音への思いを、はせていた。

今まで、愛していた人と突然別れた後、人は、普通に生活できるのに、何日かかるのだろう。莉音の気持ちは、虚ろだった。何をして

いても、意識がなかった。もはや、生きている状態では、ない。魂が抜けていた。嶺と過ごした時間が、本当に一緒にいた時間だったのか、わからなくなっていた。心が、嶺を忘れると言っているのか、記憶が、磨り減っていった。ただ、ひたすら、嶺が恋しい。あの、体から、たちのぼる香りも、髪の匂いも、唇の感触も忘れてなかった。莉音の心も、すべて、嶺をもとめ、さまよっていた。そして、嶺も、同じ気持ちだった。莉音に逢いたい。いますぐ、この階段を駆け下り、莉音に駆け寄り、後ろから、抱き寄せたい。でも、それは、違う。冷静になり、自分は、どうしたらいいのか。このまま、莉音と、一緒になる事は、難しいと思い始めていた。もう少し、早ければ、それは、可能だったかもしれない。でも、今となつては、このまま、莉音のもとへ、行くのは、無理だった。

・・・やっぱり、無理だったんだ・・・

これは、言い訳か・・・。嶺は、決めた。必ず、一緒にいれなくても、幸せを願う方法は、いくらでもあるじゃないか。自分だけが、莉音を幸せに出来るなんて、思いあがりなんだ。彼女の、幸せを、願うのが、一番なのではないか。

少し、時間が、ほしい。その言葉の通り、嶺は、普通に会社に行き、業務をこなした。莉音の姿を、いつもなら、探してしまうのだが、我慢した。

彼女の姿を追いかけては、いけない。忘れるんだ。何度も言い聞かせた。莉音を、追いかけては、いけない。彼女を、幸せに、する人は、別にいる。出張で、他県に行った帰り道、嶺は、美央に電話した。

「美央？」

嶺は、昔の、付き合い始めた時のように、電話で話していた。

「決めたよ。」

「決めた？」

「君の事」

遠くで、親子だろうか、会話が、聞えてきた。夜更かししている子

供をたしなめる父親の声。いつか、自分達も、そうなるのだろうか。
「あたしの事？」

「子供の事だよ。」

生まれてくる子供に、罪はなく。両親は、必要だ。

「結婚を考えてみた。」

嶺は結婚と言った。

「考える事ができるの？」

美央は、笑った。

「結婚はできないって、断言していた癖に。」

「少しずつね。それでいい？」

力なく嶺は、笑った。

「週末にも、そちらへ、行く。その時で、いいかな」

携帯をきると、すぐ、メールの着信を知らせるサインをしめしていた。たぶん、莉音からだ。嶺は、軽く内容を見ると、削除した。

・・・もう、逢えない・・・

莉音と連絡をとるのは、やめようと思ったが、最後に一度だけと、心に決め、嶺は、携帯を開いた。

・・・俺、結婚するんだ。もう、連絡をとるのは、やめよう・・・
短い内容だった。莉音の、どうしても、逢いたいという、メールに
対しての、返事だった。

本当は、逢いに行きたいのに。莉音に冷たくする、切なく、辛い日
が、始まっていく。

嶺に、メールを送ったのは、就寝前の切ない時間だった。どうしても、嶺に逢いたい。思い切って、嶺にメールしてみた。もしかしたら、嶺の気持ちが変わっているかもしれない。そう、期待して・・・
だが、嶺から、返ってきたメールの内容は、莉音を打ちのめし、悲しみに、震わせるものだった。何度も、携帯をみる莉音の、顔が青ざめていた。携帯を持つ手は、震え、立っていられなくなっていた。
「嘘」

思わず、座り込んだ。信じられない。つい、この間まで、一緒にいるって、言っていたじゃないか。

「結婚するなんて」

莉音の両目から、涙があふれた。一番、辛い事。それは、何だろう・。心の中が、からっぽで、考えられない。人によって、それは、違うと思うけど、皆、同じなのは、愛する人と一緒に生きられない事じゃないだろうか・。お互い、好きでも一緒に生きられない。そんな人は、この世の中にたくさんいると思う。そして、この悲劇は、永遠にある。

嶺にとっても、同じである。でも、もう、忘れよう。心の奥底にある莉音への思い。押し込めて。忘れてしまえ・。自分の記憶の彼方へ、押しやれば、楽になれる。きっと、そうに、違いない。自分は、これから、この人を愛する。ずっと、昔から、知っている人。学食で、いつまでも、ふざけあい、夜は、ゼミのみんなで、朝まで語り明かしたでは、ないか。そう、今、隣にいるこの人。

別れる意味は・・・

「似合う？」

試着室から、出てきたのは、白いドレスに身を包んだ美央だった。美央たつての、願いで、

嶺が、帰郷すると、すぐ、学生時代に旅行に来てた軽井沢に向かっていた。

「ここで、式を挙げるのが、夢だったの・・・」

美央は、嬉しそうだ。

「って、いうか・・・約束したわよね。」

遠い日に、ここに、来たその日に、美央と、約束したかもしれない。ここで、結婚する。」

到着すると、美央は、下見を兼ねて、ドレスの試着を、していた。何枚も、ドレスを、選んでは、着替えていた。

「これは？」

最後に、選んだのは、クリーム色がかった。小花のレースを、しきつめたドレスだった。裾が、ふわりと、膨らんでいる。

「うん。美央は、スタイルがいいから、何を着ても、似合うよ」

嶺は、微笑んだ。心のない笑みだった。

「少し、可愛らしすぎるかな？」

きつと、こういうドレスは、莉音が、似合うだろう。太陽のように、笑う人。彼女との、出会いは、嶺の生活に明かりをともしてくれた。

「あたしのドレス姿は、何の関心も、ないのかな？」

美央は、見抜いた。

「どこか、別の事、考えているでしょう？」

「そんな事ないよ。」

慌てる嶺の態度が、不自然だった。その、下見の帰り道、美央は、ずーっと、不機嫌だった。不機嫌になっても、仕方のない事だらけだったが、嶺も特別、美央の機嫌を伺う事は、しなかった。ただ、

結婚式を挙げればいい。嶺の責任の取り方だった。きっと、莉音に、出逢わなければ、美央と普通に結婚していただろう……。自分の中の記憶から、莉音の全てを消してしまえば、楽になれる。あれから、莉音に関する全ての物は、処分した。莉音と一緒に買ったティークップ。そして、彼女から、もらったあの、チャーカーまで、嶺は、捨ててしまった。自分の中から、莉音の全てを消す。それは、メールさえも。一件ずつ、読みながら、消していくと、胸が痛んだ。何度も、繰り返し、読み。そこには、あの日の莉音がいた。もう一度、逢えるような気がする。でも、それは、もう、繰り返しでは、いけない。ワスレルンダ。

「ねえ。携帯。鳴ってるけど。」

助手席から、美央が、話しかけた。会社からだった。

「ああ……。」

車を、すぐ、道路の端に止め、嶺は、携帯を掛けなおした。

「はい。」

仕事の事かと、嶺は、思った。

「えっ！」

嶺は、何やら、向こうに言われた後、声をあげると、沈黙した。というより、言葉を失った。血の気をひいた嶺の顔を心配した美央が、嶺の肩を叩いた。

「嶺！どうしたの？顔色悪いけど？」

「いや……。ああ……。どうして」

嶺は、ハンドルを握んだまま、顔を伏せた。

「嘘。だ。」

嶺は、ハンドルを叩いた。

「そんな事、ありえない。」

握った拳が、白くなっていた。

「何があつたの？」

動揺する嶺の様子に、美央は、心配した。こんな嶺は、見た事がなかった。

「どうしたの？嶺。教えてよ・・・。」

「そんな・・・。」

同じ言葉を繰り返すだけだった。嶺は、動けなくなっていた。車は、ハザードを出したまま、いつまでも、その場所に、停車していた。

その日。

莉音は、少し、元気を取り戻していた。天気の良いかもしれない。朝から、気持ちよく、晴れていた。会社に出てくると、つい、嶺が、出社しているか、チェックしてしまう。

・・・休みか・・・

嶺の姿は、なかった。今日は、どうしても、サンプルを業者に届けなければ、ならなかった。いつもは、嶺が、自ら、届けてくれたのだが、この週末は、休みをとって、不在だった。

「顔を合わせなくて、済むし・・・。気が楽かも。」

莉音は、嶺の顔を見なくて、済むことに、少しだけ、安心した。今、嶺の顔を見ることは、辛い。彼と顔をあわせると、どうしたら、いいか。判らなくなってしまう。

「とにかく、いい方に、考えないと・・・。」

まずは、目前の問題は、仕事だ。嶺が、休みとなると、誰かが、行かなければならなかった。運転は、あまり、得意では、ない。

「美沙行けない？」

「ダメです。こつちも、間に合わないんです。」

誰にも、頼めなかった。

「まいったな・・・。」

先方からは、納期を急ぐなら、サンプルを急ぐようにとの、電話が入っていた。

「今日は、みんな会議か・・・。」

回収品の、臨時会議が、あって、課長以上が、いなかった。

「ちよつと、がんばりますか・・・。」

仕事を、頑張れば、嶺の事を、考えなくて済む。莉音は、事務所に

行くと、車のキーを借りてきた。

「英！大丈夫なのか？」

現場の、人間が、声をかけてきた。

「平気！」

手を、振って、エンジンをかけた。そう、莉音は、自ら、運転し、納期に間に合わせる為、サンプルを乗せ、山道へむかった。よく晴れた、気持ちのいい、午前中であつた。この所、嶺との事が原因で、すっかり痩せてしまった。食欲もあまり、でない。何かを食べたいとは、思えなかった。夜もあまり眠れない。気がつくと、以前、嶺からきたメールを遡り、読んでいる。

・・・もう、消さなきゃ・・・

毎日、嶺のメルアドを消そうと思っていた。でも、出来なかった。いつか、嶺から、メールが、くるかもしれないと、思っていた。嶺が、別れると言ったのは、きっと、何か理由があつたのに、違いな。そう、何か、理由があるはず、きっと、待っていれば、何か、連絡をくれるはず。

「待っているよ。」

そう、無理に忘れる事は、必要ない。思うのは、自由だ。運転していると、車から、音楽が、流れてきた。嶺と、一緒に、旅行に行つた時に、聞いた曲だつた。

「この歌・・・」

聞いていると、嶺を思い出す。優しい彼。自分を、見つめる目。指先。何一つ、彼の事を、忘れてなんかない。大好きな彼。このまま、嶺への思いを持ったまま、死んでしまってもいいかもしれない。

「そうだよ・・・」

心が、嶺を、求めている。嶺に逢いたい。

「逢いたいよ。」

嶺は、週末、何処で、何をしているのだろう・・・いや、想像するのは、止めよう。きっと、彼は・・・

「逢わせて、ほしい。」

・・・と。携帯がなかった。いや、なったような気がした。

「嶺？」

嶺かもしれない。ふと、バッグの中の携帯を、片手で探った。バッグの底に、携帯は、あるはず。

「何処だっけ？」

上り坂が、幾つも続いていく。器用に、ハンドルを、きりながら、携帯を探した。

「ああ。」

手が、滑って携帯を落としてしまった。

「全く、こおいう所が、駄目なんだ。」

片手で、拾おうと、屈んだ瞬間だった。目の前に、カーブを、下ってくる車の前方が、迫っていた。

「！！！」

瞬間、きつと、その名を、叫んでいたのだろう。心から。その声は、嶺に届かなかった。

「莉音が・・・。」

搾り出す声。嶺は、運転する気力を失っていた。

ようやく、口を開いた嶺は、会社の同僚が、事故に合った事を、美央に告げていた。

「会社の同僚なの？」

同僚と、いうわりに、嶺の、動揺は、激しいものだった。

「莉音が、事故に。」

「莉音さんというのね。」

嶺の、動揺が、激しい為、美央は、運転を、代わっていた。この嶺の、様子は、明らかに、莉音という女性が、嶺の、同僚以上の存在である事を、物語っていた。

「事故なの？」

「詳しい事は、判らないけど、事故だと、言っていた」

嶺は、拳を噛んだ。

「とにかく、戻らないと。会社へ……。いや、病院へ行かないと」
嶺は、あせっていた。

「落ち着いて。嶺。」

こんな状態の嶺は、見たことがない。美央まで、少し、動揺していた。

・・・きつと・・・

美央は、思った。

・・・この事故は、嶺の・・・

そう。自分より、嶺が選んだ人が、何か事故に合ってしまった。美央は、真っ直ぐ正面を見据えた。

「嶺。しっかりして。」

今、自分が、この人を、支えなければ。美央は、とにかく急ぐ事にした。一緒に、嶺の住む街へと、車を走らせていた。

そこは、冷たい空間だった。ただ、無限に白く、長い廊下。突き当たりに、紅く光る表示灯が見えた。長椅子に、線の細い優しい男性が、うなだれ座っていた。そこまで、どうやって、たどり着いたか、判らない。美央が、途中まで、運転してくれた。そう、駅まで。彼女も、遠距離を運転するのは、自分の体調から、無理と考え、新幹線を乗り継いで、向かうことを、提案した。車を預け、美央と嶺は、取り急ぎ、莉音の運ばれた救急病院へとたどり着いていた。

・・・一目、見てみたい・・・

美央の気持ちだった。こんなに、嶺を失望させ、苦しませるのは、ただの同僚でない事を察しさせていた。自分から、嶺の心を奪い、今も、占領し続ける女の顔を見たいと思っていた。だが、その人は、今、生死の境をさまよっていた。

「嶺？」

血の気を失いたちすくむ、嶺の前に、力を落とし、長椅子に腰掛け、立ち上がった。先に、着いていた会社の上司と職場の

何人かが、挨拶を繰り返して、一人が、嶺に近づいてきた。

「七藤。英さんのご主人だ。」

嶺の目が、見開いた。ようやく、目の前にいる莉音の夫の存在に気づいたようだった。

「ああ。初めまして……。」

嶺は、ぎこちなかった。いろいろ次々と起こる事に対処出来なかった。目の前にいるのが、恋焦がれていた莉音の夫なのか……。こんな形で、巡り合う事になるなんて。でも、一番の、問題は、いまだ、手術の終わらない莉音の様子だった。

「トラックが、センターラインを超えてきたらしく……。レスキューくるまで、ずっと、ハンドルの間に挟まれてたみたいで。」

莉音の夫が、か細い声でいった。

「かなり、がんばっていたんですが。」

後は、涙になって、聞き取れなかった。その様子から、今、莉音のおかれている状態が、手にとるように、わかった。あまり、よくない。

「英は。」

その後を、莉音の上司が続けた。

「頭を、打つたらしく。今、頭の中の手術に入ってる。かなり、厳しいらしいな。胸も強打しているそうだ。」

「万が一、命が助かったとしても……。」

夫が続けた。

「心臓に、問題があるらしく。子供は、もう、望めないだろうと……ああ。神様……。」

人は、こういう時、神と呼ぶのだろうか。嶺は、後悔していた。何故、自分は、一緒にいてやれなかったんだろう。別れを選んでしまったんだろう。繋いだ手は、二度と繋がらない。莉音の手を離れた時に、彼女は、さらわれてしまった。もしかしたら、二度と、逢えないかもしれない。もう、二度と、莉音の、あの瞳をみる事は、ない。あの声を聞く事もない。そして、あの体温を感じる事もない。

莉音の魂は、今、離れようとしている。

・・・莉音、逝かないで、ほしい・・・

嶺は、人目もはばからず、嗚咽を漏らした。耐え難く、涙がこぼれてくる。悟られては、まずい。あわてて、その場をさるうと、背を向けると、美央が、後ろから、声をかけた。

「嶺。その人なんでしょう？あなたの好きになった人」

嶺は、美央にふりかえった。口を手で、覆っていたが、その目が、真実を物語っていた。

「美央」

動揺した瞳が告げていた。美央のいう通り、莉音が、その人である。

「嶺」

美央も悲しかった。絶望の悲しみが、嶺の瞳に満ちていた。嶺の、瞳は、涙をうかべ、美央に全てを告白していた。

・・・この人は、彼女を愛してる。そう、私よりも・・・

悲しかった。自分より、彼女を深く愛している事を、目のあたりにしたから。今、彼は、目の前に、いる自分より、中にいる彼女の命を案じ、苦しんでいる。彼の悲しみが、悲しかった。嶺は、今、一人で、苦しんでいる。

「そうなのね。」

思わず、美央は、駆け寄り、嶺を、抱きしめた。

「美央」

悲しみは、同じだった。嶺は、美央を抱きしめ、泣き出した。声を殺し、美央の横顔に、うなだれて・・・。

外は、雨が、降り出していた。まるで、莉音の涙のように。地に振りそいた雨は、次の雨を呼んだ。次から、次へと、雨は、地面に降り注ぎ、大きなクレッシェンドへ。次第に、季節外れの雷雨へと、変っていった。雷鳴は、鳴り響き、雨を、地面に叩きつけた。今、莉音は、この世を、去ろうとしていた。

「莉音」

この名を、後、何度よぶ事が、出来るのだろうか。切ない祈りだけが、続けられていた。

季節は、莉音だけを、残して巡っていった。嶺の周りは、少しずつ、日常の生活に、戻っていき、莉音だけが、まだ、時間の流れの外にいた。

莉音の魂は、まだ、この世に留まっていた。抜け殻のような体に、かろうじて、結びついている。彼女の時間は、嶺と別れてしまったあの時間の、中で、止まっていた。

雨が、あがり、屋上から見渡す眼下は、ピンクの海が広がっていた。桜が、満開だった。周りへと、広がる景色は、どこも、ピンクの小さい山々が、広がり、なんともいえない景色が、続いていた。ピンクの濃淡。遠く、所々に、黄色いじゅうたんが広がり、陽の暖かさに、甘い、香りが、立ち上っていた。

「判るか？莉音？」

莉音の瞳は、開かれたまま、遠い景色を映し出していた。色素の薄い両目には、通りすぎる新幹線が、反射してみえた。だが、莉音の瞳は、光をおう事は、なく、意識もなく、見開かれたまま、そこにあった。点滴のチューブが、日の光を反射している。

「桜。咲いたんだよ……。一緒に見に行きたいって、言ってたよね」

とりあえず、命は、とりとめたものの、莉音の意識は、戻らなかった。目をあけ、時折、眠ったりは、するが、発言はなく、立ち上がり、歩く事もなかった。ただ、そこには、莉音の顔をした人形がいるのと変らなかった。

「一人で、無理するなよ。」

「.....」

「何で、何も、言わないんだよ。」

嶺は、莉音の手に触れてみた。体温は、温かいのに、何も、言おう

としてくれない。

「それでも・・・」

この世に命を、とどめて欲しいと、祈った。どんな莉音でも、受け止める。だから、魂だけでも、結び付けて欲しい。それが、叶ってなのか、莉音は、残った。そう、器だけの形で。

あの日、手術は、長時間に、及んだ。嶺は、莉音の夫と、美央と3人で、夜を明かそうとしたが、長時間の運転と、緊張状態とで、美央の体を、気遣い嶺は、一旦、マンションに帰っていった。夫への、気遣いもあったのだが、翌日、美央と、嶺が、病院で、目にしたのは、ICUで、いくつ物、チューブに？がれた変わり果てた莉音の姿だった。

「会社の方ですか？」

何度も、心配して現れる嶺に、そう言った。美央と一緒にいるので、深く探られる事は、なかったが、後で、何も言わなくなる美央の、様子が気がかりだった。

「結婚は、しばらく、お預けね。」

寂しそうに、美央は、言った。そう、言われても、答える気力もなかった。

「そうだね。」

嶺は、答えた。今は、莉音の、事しか考えられない。

「とり合えず、帰るから。」

美央は、送らせる事もせず、すぐ、帰っていった。

「メール待つてるから。」

最後に、そう言った。風が冷たくなってきたので、嶺は、カーデiganを莉音にはおらせた。遠くから、桜の花びらが、風に乗ってくる。

「桜、咲いたよ。」

莉音は、何も答えない。

「桜か・・・」

遠くを、見下ろした。何かを、振りきるように嶺は、車椅子を押し、

部屋に戻ろうした。・・・と、後ろから、そつと、近寄る影があった。莉音の夫であった。

「こんにちは」

逆光で、まぶしいのか、莉音の夫、陸斗は、目を細めた。

「七藤さんですね？」

「はい。」

嶺は、きた。と、思った。畏れていた瞬間。陸斗は、そばにあるベ
ンチに座るよう、嶺をうながした。

「どうぞ・・・」

「すみません。」

「あなたは、あの時も、来てくれていたんですね。」

「はい。」

「莉音は。彼女は、あなたが、来るのは、判るみたいなんです」

「ええ？」

嶺は、陸斗の顔をみた。それは、莉音と嶺の間を知っているという
ように、聞こえたからだ。

「すみません。あなたが・・・あの時のあなたを見た時に、僕は、
気づいてしまつて。」

優しい莉音の夫。持っていた、嶺に渡そうとしていたのか、缶コヒ
ーを、手の甲が、白くなるまで、握り締めていた。

「莉音の思っていた人は、あなただったんですね？」

真つ直ぐな目で、嶺を見つめていた。

「莉音さんは、何かいいましたか？」

呼び捨てになりそうなのを、あわてて、さん付けに直した。

「いえ。何も、言わなかったんですけど。一緒にいるとわかるん
で。心の中に、僕じゃない。誰かがいるって事が。」

嶺をじつと、陸斗は、見つめ続けていた。嶺が、なんて、答えるか、
身構えているかのように。

「すみません。」

嶺は、まず、そういった。

「彼女を愛しています。」

「ふっ……。」

陸斗は、笑った。

「今の状況でなかったら、殴ったかもしれませんね。」

莉音の車椅子を、押す手が、嶺から、陸斗にかわった。

「でも、僕が、話しかけても、何もかわらないのに……。七藤さんが、話かけると、表情が、和らぐんです。あなたは、気づいてましたか？」

愛おしそうに、陸斗の手は、莉音の頬を撫でていた。

「悔しいですね。僕が、夫なのに。」

何て、哀しい顔をするんだろう……。嶺は、胸が痛くなった。この2人を、自分が、苦しめているのは、自分なのだ。

「この人の、心の奥に届いているのは、七藤さん。あなたの、声だけなんです。」

「そうですか……。」

嶺の目から、涙がこぼれた。自分だって、莉音の声が聞きたい、そこにある、両目で、自分を見つめて欲しい。それなのに、こんなに、傍ににいるのに、莉音には、自分の声が、届かない。

「あなたが、莉音を愛しているのは、わかります。でも、僕も……。」

陸斗は、寂しそうに、笑った。

「悔しいけど……。彼女を譲る事は、出来ないんです。」

「わかってます。でも、柴崎さん！」

嶺は、遮った。

「お願いです。せめてもの、お詫びに……。彼女の意識が戻るまで……。面倒を見させてもらえないでしょうか？」

「それは、無理です」

当たり前だと思っ。それでも、嶺は、陸斗に、食下がった。

「お願いです。」

頭を下げた。

「どうして……。彼女が、事故になったか。考えてみたんです。」
陸斗は、続けた。

「携帯に気をとられたようなんです。彼女の膝の上に、落ちてて……。救急隊員が駆けつけた時、何て言っていたか、聞きたいですか？」

その声は、裁判の判決を言い渡す調子にも、似てた。冷静で、感情を殺した声。

「何回も、呟いていたって……。僕の事じゃないんです。嶺の電話に出なきゃって。」

それを、聞いて、嶺は、息がとまりそうになった。

「履歴にも、ないのに。ずーと、あなたから、電話がかかってくるのを、待っていたんですよ！」

ああ……。莉音は、自分を待っていた。判っていたけど。別れるって決めたあの時から、連絡はしないって。決めていたのだ……。自分だって、莉音に逢いたかった。声が、聞きたかった。

「……。だから。すいません」

陸斗は、怒っていた。嶺の手をはらいのけ、陸斗は、車椅子を押し始めた。

「好きだから、愛しているからって、幸せに出来なければ、何の意味があるんです？ 莉音を、あなたは、幸せに出来るんですか？」

そうだ。どんなに、切なく思い焦がれたとしても、相手を不幸にしては、いけない。幸せにできるのは、自分でないかもしれない。現に、自分は、今、他の女性と、結婚しようとしているではないか。

。何も、言えない。黙って、陸斗に、押されていく車椅子の莉音を、後ろ姿を、見送るしかなかった。こんなに、莉音を愛している。莉音も、きつと。でも、もう、これで、本当に、逢えなくなるのか……。せめて、命が助かった事だけを、喜べばいいのか……。

「莉音。遅かったんだね。」

遠く、桜の花が、儂く、しらじんでみえた。

温か空気の中に、自分は、いた。胎内の様な安心感があつた。周りは、優しいピンクに包まれ、それは、満開の桜のようでもあつた。体をゆっくりと動かす……。指先の感触を確かめるように、手の平を開き、また、こぶしを握ったりしてみた。誰かが、自分を呼んでいる……。懐かしい声。両脚を抱き、両膝に頬を摺り寄せた。

……。誰だろう……。

莉音は、声のする方を、見上げようとしたが、何も、見えなかった。というより、体が、動かなかつた。遠い声を、思い出せと、心が叫んでいた。思い出さなければ、いけない。大切な人。誰かが、自分を待っている。

「誰？」

その声は、とても、懐かしい声をしていた。

切ない夢だつた。美央は、明け方、目が覚めた。入社するには、まだ、早い。時計を見やりながら、ノンカフェインのコーヒーを入れ始めた。携帯の、メールのチェックした。嶺からは、特にない。あれ以来、嶺は、心が、壊れてしまったかのようだった。ささやかな、式を挙げる予定だったが、嶺のあんな様子で、すっかり、遅れてしまっている。少しずつ、大きくなってくるお腹を、気にしつつも、嶺の心に、自分の入りこむ隙もない事も、この子の事を、心配してくれる事もないのを感じ取っていた。自分は、本当に、嶺を愛しているのだろうか……。これは、愛では、なく。執着では、ないのか。このお腹の子さえ、いれば、三人幸せになれると思っていたのは、間違いなのか。今の嶺は、魂の抜け殻だ……。あの、莉音は、嶺の意識まで、一緒に、記憶の奥底に沈めてしまった。

「どうしてよ。嶺。」

美央は、泣き出した。このままでは、自分は、幸せになれない。嶺と、一緒にいたい。そう、思っていた。だが、今の嶺は、自分の知っている人ではなかつた。

「もう、戻れないんだよ」

美央は、嶺に、メールを打ち始めた。

嶺も、切ない夢を見ていた。あれから、自分の時間が、すっかり止まっていた。手術室に、駆けつけた嶺が、思わず、泣いてしまった。会社側は、何も、気づかなかったが、莉音の夫、陸斗には、すっかり悟られてしまった。あの、屋上であった日を最後に、莉音には、逢えてなかった。もう、別れると、決めたあの日に、莉音の思い出の物は、全て、処分してしまったから、何一つ、莉音の思い出の物は、なかった。莉音のあの、笑顔を思い出そうとしても、目に浮かぶのは、人形の瞳をした、表情のない莉音だった。

「莉音」

夢の中に、莉音は、いた。長い髪をまとめ上げ、浴衣を着たあの日の、莉音のままだった。顔がよく見えない。

「莉音！」

声をかけようとしたが、莉音は、ずっと、消えていなくなってしまった。声をあげて、泣いてしまいたい。哀しくて、哀しくて。莉音を自分の傍に置こうと、出来なかった自分の非力さをのろった。

「莉音」

声が、漏れた。誰の声かと思ったが、自分の声だった。目をあけると、目尻から、温かいものが、零れ落ちるのが、わかった。涙だった。

・・・いつも、この夢をみる・・・

心が、莉音を求めていた。起きて、窓を開けてみた。冷気が、入り込んできた。春とは、いえ、まだ、朝は、寒かった。

・・・と、携帯が、メールを告げた。美央から、だった。

・・・今日、時間があいてる？・・・

美央と、逢っていても、心は、虚ろだった。一度は、一緒に生きようと考えていたが、もう、心が、折れてしまった。今は、莉音に殉じたい。

・・・逢えない・・・

・・・これからの、事を考えて！・・・
・・・こんな気持ちのまま、先には、進めない。こんな俺で、気にならないの・・・

・・・それでも、この子には、生きる資格は、あるでしょ？・・・
・・・わかつてるよ。どうしたいの・・・

そうだ。先に進まなくては、ならないだろう。自分の気持ちも。
莉音への気持ちも。置いたまま、時間は、流れていく。自分の、気持ちも、もう、莉音と一緒に、どこかへ、消えてしまった。こんな抜け殻のような男を、必要として、生まれてくる子が、いるのか。
・・・美央。君の意思にまかせるよ。全ては、君のままに・・・
「逢って！」

嶺は、美央と逢うため、仕事を今日も休む事にした。

莉音は、眠っていた。ずーと、あれから、ほとんど、眠っている。意識をとりだしたような、目を開けるのは、一日のうちの、ほんの僅かな時間だった。それは、嶺のくる時間。何故か、嶺の来る少し前になると、待っていたかのように、目を覚ますのだった。だが、最近。嶺の訪問を陸斗が、断ってから、その時間も、少なくなっていた。気のせいかな、どんどん莉音は、痩せ衰えていった。

「莉音」

陸斗は、懸命に、莉音の看病をしていたが、結果は、余りいいものではない。で、なかった。

「俺じゃ、ダメなのか・・・。莉音」

莉音の、目は、閉じられたままであった。どんなに、陸斗が、尽くしても、状態は、代わらない。

その日、美央と、嶺は、逢う・・・はずであった。・・・が、嶺の向かったのは、莉音のいる病院の、喫茶室であった。真向かいにいるのは、紛れもない莉音の夫。陸斗である。

「もう、逢いに来て欲しくないって、いった筈ですよ」

陸斗は、静かに、迫力のある声で、言った。

「何を、言われても、覚悟する気持ちで来ました。」

嶺は、しっかりと、陸斗を見据えた。

「間違っていると、思っています。あなたに、これをお願いするのは、でも、それでも、僕は、気持ちを伝えたい。そう、思っ、僕は、今日、来ました。」

嶺は、椅子をひいた。

「何を言い出すつもりだ？」

「莉音さんを、僕に下さい。」

嶺は、額を、テーブルにこすりつけ。何度も、頭を下げる。

「はあ？冗談だろう！何を言い出すつもりだ？」

嶺は、陸斗に、土下座しようと、していた。

「馬鹿を、言っているのは、わかります。でも、莉音の傍にさせてください」

「ふざけるな！」

気がつく、陸斗は、嶺の胸ぐらを掴みあげていた。

「何を言ってるんだ！あまり、怒らせないでくれ！」

「本気です。」

嶺も、負けていなかった。喫茶室は、さほど、人がいなかったが、2人のただならぬ、雰囲気になわりが、ざわつき始めていた。

「莉音と一緒に居たいんです。」

嶺は、陸斗の手を振りほどいた。

「莉音と別れてほしいんです。」

「ふざけるな！」

「あきらめません。ようやく、わかったんです。遅すぎたのかも、しれない。だけど、今、決心しなければ、後悔する」

嶺と陸斗は、激しく睨み合った。

「僕は、莉音を選びたい。何よりも、そうしたい。あなたから、莉音を奪いたいんです。」

「許さない。俺は。こんな事、あつては、いけないんだ。」

「今日は、これで、失礼します。だけど、莉音は、僕を待っていると、

思います。」

「・・・」

陸斗は、言葉を失った。嶺は、陸斗に軽く、一礼をすると、伝票を、掴み上げ、喫茶室を出て行った。

これで、いいんだ。何を迷う必要がある。美央の事は、解決しなければ、いけない。だが、今、一番、自分が、守らなくては、いけないのは・・・。後悔する訳にいかないのは、莉音の事だった。あの日、初めて、強く、思った。失いたくないと・・・。どんな形であれ、莉音を手に入れたいと・・・。今、動かなければ、後悔する。莉音と一緒に生きよう。その為に、誰かを傷つける事になるかもしれない。けれど、大切な人を傷つける訳には、いかない。・・・そう、決めた。嶺に、迷いは、なかった。自分が、周りを、傷つけまいとしたばかりに、莉音を傷つけてしまった。本当に、遠回りをしてしまったが、結論は、でた。莉音と生きる。美央に、そう告げよう。彼女の、心も体も傷つけるだろう。だが、もう、迷いは、許されない。

嶺は、新幹線に乗り、美央の待つ街へ、向かった。美央は、待っていた。嶺が、自分に逢いに来てくれるのを・・・。2人よく行った駅ビルの、最上階。街並みが、よく見えるラウンジで、嶺が来るのを、待っていた。

最初は、少し遅れるとメールがあった。1時間くらい？と思っていたが、時間は、段々遅れ、午後になっていった。雨が降り出し、少し、温度が下がってきた。妊娠している美央に、同じ姿勢で、待ち続けるのは、辛かった。

「今日、届けを出そう。」

そう。答えを出そう。莉音の件で、遅れてしまったが、ここまで、きた以上、嶺と一緒にいるのが、一番いいのだろう。莉音には、そんなに素敵な夫が、いる。それは、嶺もわかっただろう。そして、莉音と別れる気はない。もう、嶺は、魂を抜かれた状態で、もしかしたら、もう、自分の事を、振り向いてくれないかもしれない。それでも、美央には、嶺に傍にいて欲しかった。

・・・何か、あったのかな？・・・

バッグには、婚姻届を入れてきた。自分のサインは、してある。嶺と、そのまま、届けに向かうのだ。携帯がなった。

「はい」

嶺から、だった。

「遅くなつて、ごめん。今、エレベーターで、向かつてる。見えるよ。」

嶺からは、携帯に、むかつて話す美央の姿が、見えていた。

「良かった。待ってるから。いつもの所だか・・・」

言いかけた。エスカレーターを、振り返り、嶺が、上ってくるのを、確認しようと、振りかえろうとした。・・・その時。

「あつ！」

美央が、叫んだ。柱から、幼稚園児くらいの子供が、2人競い合いながら、飛び出し、美央の、お腹にあたり、いきなり、あたったのだ。子供は、跳ね返り、臀部から床に、落ちた。

「だ・・・？大丈夫？」

美央は、駆け寄り、子供を抱き起こそうとした。

「っ・・・！」

激痛が、下腹部を襲った。

・・・え？・・・

恐る恐る美央が、自分の、下腹部を見下ろすと、何かが、流れていく感触が、あった。暖かいもの。美央は、手でまさぐりながら、見た。それは・・・

「大丈夫ですか！」

子供の、母親とおぼしき女が、叫びながら、美央に駆け寄った。美央の、脚の間から、赤いものが、流れ落ちていたのだ。

「す・・・すみません」

あわてて、子供を抱き起こしながら、美央を、みやった。

「大変！」

その母親は、美央を、見上げた。

・・・痛い！・・・

美央は、思わずしゃがみ込んだ。

「誰か！救急車！」

叫ぶ人達の中に、嶺の姿をようやく、みつける美央だった。

「眩しい・・・」

否応なしに、瞼に、オレンジの光が、入ってきた。目を開けられない。うつすらと、ほんの少し目を開けると、覗き込んでいる姿が見えた。嶺だった。

「嶺」

もう、逢えないかもしれない。と、不安が、よぎっていた。時間に遅れない嶺が、遅れてくる。それだけで、もう、自分への、思いは、減ってきていると感じていた。が、自分の意識が遠のくなか、しつかりと、自分を抱きかかえていたのは、他でもない、嶺だった。

「嶺。居てくれたの。」

傍にいてくれるだけで、嬉しい。

「ずーと。」

嶺は、美央の手に、そつと、触れた。

「ここに居たよ」

以前と、変わらない声。そして、その瞳。

「そう」

美央は、ゆっくり微笑んだ。

「昔みたいね」

そう。大学の時と変わらない。嶺は、自分だけを見つめてくれている。昔と変わらない。じつと、自分をみつめ、今、傍に居てくれる嶺は、大学時代と、何一つ変らなかつた。

「そうだね」

嶺も、笑った。

・・・でも・・・

美央は、思った。変ってしまった。ここに、嶺は、居てくれる。で

も、嶺の心は、あの人の心と、闇に沈んだまま。遠い意識の海へ、今も、一緒に、沈んでいる。それは、いつ、戻るかも判らない。嶺の心を、捕らえ、離さず、共にある。自分の、傍にいる嶺は、抜け殻でしかない。それでも、一緒に居たいと、願う自分が、悲しかった。こんな男忘れたかった。自分を愛し、自分だけを、見つめてくれた、この男は、もう、変ってしまった。もう、あの自分だけを、見つめてくれた嶺では、ない。心が、なくても、自分は、いてほしいと思うのか……。惨めでは、ないか。傍に、嶺が、居てくれればいい。取り上げられたおもちゃを取り戻すかごとく、計った妊娠で、あつたが、嶺の心が、最早、自分のものにならないと、思い知るだけの結果になっていた。もう、止めようか……。もう、この人を、縛りたくない。心配し、抱き寄せてくれた、あの時に、感じた。この人は、こういう人だ。だから、自分は、愛した。もう、自由にしてあげよう。あの人の、海にこの人を、還してあげよう。それが、自分が、嶺という男を愛した証だ。

そう、思うと涙が、あふれて来た。とまらない。目尻を次から、次へと、塗らす涙で溢れていた。

「どうしたの？」

変わらない声で、嶺が、聞いた。

「あのね……。嶺」

嶺をみつめた。涙が止まらない。初めて、素直になれた気がしていた。

「泣くの？美央。」

嶺が、美央の涙を、ぬぐった。

「ずーっと、寝顔見て、考えてたんだ。結婚しようか……。」

昼ごはんの、メニューを選ぶかのように、ごく自然に、簡単に。美央の長年待っていたその台詞は、突然、飛び出した。嶺は、言った。「君が、受け入れてくれるなら……。一緒に、その子を育てようか。」

「嶺」

嬉しい。ずっと、待っていたその言葉。でも、もうすこし、前なら、もっと、嬉しく感じられた。でも、今は、その言葉の影に、莉音が、ちらついていた。

「嶺。」

意外と、冷静な声が出た。嶺は、美央は、受け入れるだろうと、思っていた。・・・が。

「もう。いいから。あの人の所に行つて。」

美央は、首をふった。心に反した答えだった。

「この子は、あたしが、育てる。ここに、気持ちのない嶺に居てもらつても、嬉しくない」

その通りだ。美央は、思った。嶺の中に、莉音が、すんでいる。これから、嶺をとおして、彼女の姿を、感じていくのだ。それは、耐えられない。

「美央。」

美央の、態度は、意外でもあり、ほんの少し、ほつともした。

「あたしを、見てくれない嶺にいられても、辛いだけなの。」
「そうなんだ。と、嶺は、目を伏せた。」

「美央。ごめん。」

否定は、できない。本当の事だ。

「今の俺には、時間が、必要だと、思う。・・・けど。」

「子供の事？」

嶺は、辛そうだった。辛そうに、自分のお腹の子を心配する嶺に、美央は、腹が立った。

「あたしが、育てるの。愛してくれない人に、居てもらつても、嬉しくないって、言つてるでしょう!」

言い様のない怒りが、渦巻いていた。その訴えは、裏返すと、嶺に、愛して欲しいと、聞こえた。嶺には、美央の、気持ちが、痛いほど、わかつていた。

「美央。すまない」

「何を、謝つてばかり!」

「すまない。」

「あたしが、言って欲しいのは、そんな言葉じゃない。義理で結婚してもらっても、嬉しくない。あたしが、欲しいのは、嶺の心なの！」

一度に、感情が、爆発した。涙も止まらない。悔しいけど、鼻水まです、出てしまった。思わず、傍にある枕を投げつけてしまい。枕は、傍にあった花瓶にあたり、騒々しい音をたてて、花瓶は、床に落ちていった。

「嶺。それでも。心が、無いと、判っていても……。あたしは、嶺と居たいと思ったりするの。どうして、どうして。こんなに、嶺が、好きなのに……。判ってくれないの……。」

美央は、両手で、顔を、覆い嗚咽を漏らし激しく泣き出した。こんなに、美央を苦しめている。かつて、愛した人。この人を、自分は愛おしく思った日もあったのに。今、自分は、苦しめている。

「美央。少しだけ……。待つてほしい。少しだけ。時間が、あれば、君を思うようになる。」

嶺は、美央の両手に、自分の右手を重ねた。

「少しだけなんだ。」

美央は、涙に、濡れた顔を出し、嶺に、そつと、キスを求めた。

莉音は、ずーとベッドに、座り続けていた。何を見る訳でも、なく、時折、瞬きをする瞳には、誰を写す事もなく。その瞳は、淡い茶褐色に、輝き、半眼で、自分の心の淵を見ているようにも、見えた。

陸斗は、仕事が終わると真っ直ぐ、莉音の、いる病院に、向かっていた。何度きても、様子は、変わらず、どうにか、食事を、介助すれば、取れるまでには、なっていたが、自発的に、発言する事もなく、まるで、お人形さんのような様子へと、変っていた。

「俺じゃ、駄目なのか」

話しかけても、何の表情の変わりも無い。陸斗には、莉音が、誰を待っているのか、悔しいが、わかっていた。かといって、それを認

めてしまうのは、自分の莉音への愛情を否定されてしまうようで、認められないでいた。シヨックだった。友達の紹介で知り合い、ごく普通に結婚した。穏やかで、可愛い人だと、思っていた。料理好きで、一緒に、よく、料理をした。何度、思い返しても、自分の知っている莉音と、あの若い嶺という男の知っている莉音は、別の女性に思える。でも、本当の莉音は、あの若い男と一緒にいる莉音なのだろう。夫の直感だった。あんな、若い男に負けてしまう事も、プライドの高い陸斗には、耐えられない事だったが、そのプライドも、嶺と一緒にいる莉音を、見た時に、もろく崩れ果てた。

・・・この2人の間に、自分は、入れない・・・

陸斗が、感じた瞬間だった。莉音は、嶺という男を求めている。莉音の沈んだ意識が、覚醒する兆しを見せるのも、嶺という瞬間だけだった。今日、陸斗は、外から、莉音のいる病室の光をみつめ、そつと、帰る事にした。

「莉音。帰るよ。」

外から、莉音のいる部屋を見上げ、そつと呟いた。その、窓辺に、その嶺の影が、浮かび上がる事に気付く事なく・・・。

「莉音。来たよ」

嶺は、美央と、別れた後、真っ直ぐ、莉音の元に戻っていた。莉音に伝えたい事がある。

「報告しなければならんだ」

嶺は、何も言わない莉音の隣に座った。

「聞いて欲しい。」

嶺は、莉音の右肩に、そつと、腕を廻した。細くて、あの日よりも細くなりすぎた肩。長く伸びすぎた髪は、うねり、いつも、クセ毛を、嫌がっていた莉音の口癖が、懐かしい。

「莉音。一緒にいたいと、思う気持ちに変わりはない。ずっと、一緒にいたい。だけど・・・。莉音。」

莉音は、嶺が、自分に話しかけるのが、わかるのか、声のする方を

模索するかの様に、瞳を動かしていた。だが、嶺の姿を、上手く、捉える事は、出来ない。

「莉音。キスしてもいい？」

嶺は、莉音の、頭を、軽く抑え、髪を撫でた。久しぶりの、莉音との、キス。乾いた莉音の唇だったが、嶺の、唇で、少しだけ、潤った。一度、唇を離れた。が、また、唇を合わせたいという衝動にかられた。最初は、軽いキスのつもりだったが、嶺は、貪る様に、今までの、時間を埋めるかのように、莉音の唇を食った。先ほど、美央と、重ねたキスとは、違う。莉音を求めるキス。

「莉音……。」

嶺は、莉音の額に、自分の額を押し当てた。

「莉音。あと、少ししか、時間がない。俺達、いつかは、別れなきや。別れなきやって言ってたよね。本当は、その時は、別れなくて良かったんだよ。」

莉音が、愛おしい。

「少しでも、一緒にいたかった。莉音。」

莉音の傍にいたい。願わくば、この心だけでも、傍に置いて欲しい。

「俺の我がままなんだ。莉音。俺さ……。」

もう、一度、莉音にキスした。

「美央と結婚する事にした。」

鼻先を、莉音に押し付けた。ひんやりとする莉音の鼻先。本当に、お人形さんに、なってしまったんだろうか。

「守らなければ、いけない事が、出来たんだ。莉音。判ってくれるね？」

嶺は、莉音をみつめた。莉音の、瞳が、少しだけ、潤んだように、見えた。それは、睫をぬらし、やがて、あふれ出て、目尻をぬらし、頬へと零れ落ちていった。

「莉音？」

嶺は、両手で、莉音の、両目を凝視した。

「判るのか？わかるのか？莉音……。」

嶺は、莉音の両目を、覗き込み、莉音の、名前を何度も、叫んだ。次から、次へと、涙は、あふれるのだが、その瞳に、嶺の姿をはつきり捉えることは、なかった。その涙は、単なる偶然だろうか……。

「莉音……。頼む。戻ってきてくれ！時間が、ないんだ……。」「頬を押さえ、瞳を、覗きこむ。この、どこかに、あの英 莉音がいる。嶺は、願いを込め、莉音の意思が、そこにあるかのように、話しかけようとしたその時

「また。おまえか！」

振り返ると、かえった筈の、陸斗が、恐ろしい形相で立っていた。

「莉音は、渡さないって、言った筈だよな……。」「

見ると、陸斗が、持っていた紙袋から、小さな果物ナイフを取り出していた。

「ずーと。考えていた。莉音の事を。どうしても、心が……。お前の、所から戻らないなら、どうしたら、いいかを……。」「

嶺は、じっと、陸斗のこれから、起そうとしてる行動を、模索した。

「莉音の、心が、私の所に、戻らない。それなら……。私は！」

陸斗が、刃先を、振り落とそうとしたのは、莉音にむけてだった。

恋は、人を狂気に駆り立てる。陸斗は、そんなつもりは、無かったと思う。あのまま、帰ろうと、思った道の途中で、オレンジをみかけ、オレンジの好きな莉音に届けてやろうと、オレンジと果物ナイフを買い、病院に向かった。病室まで、来て、莉音と嶺のキスシーンを見てしまったものだから、逆上してしまった。前回、嶺に、莉音が、欲しいと言われた日から、その思いは、首をもたげていたのかもしれない……。いつその事、自分の物にならないのなら、この手で、奪ってしまおうと……。紙袋から、抜き取られた、光る果物ナイフは、真っ直ぐ、莉音へ、突き立てられようとしていた。

「莉音！」

黙って、莉音が、刺されるのを、見ている訳では、なかった。果物ナイフが、しっかりと刺していたのは、嶺の左肩だった。

「つう……。」

嶺は、苦痛に顔をゆがめた。が、尚も、陸斗は、手を緩めなかった。莉音を庇い、抱き寄せる嶺の腕を、振りほどき、莉音の首を絞めようと、執拗に、陸斗が、襲う。

「ナースコール！」

嶺が、手を伸ばし、コールした時に、不覚にも、バランスを崩し、嶺は、莉音をかばう形で、床に、落ちてしまった。

「大丈夫ですか？」

騒ぎを、聞きつけた隣の病室の、見舞い客が、顔を覗かせた。

「うわっ！」

見るなり、あわてて、先生と叫びながら、廊下へ、駆け出した。嶺の左肩が、変な形で、着地し、果物ナイフが、突き刺さったままだった。莉音の頭を庇いながら、ベッドから、落ちたせいか、嶺の胸に、しっかりと、莉音の体は、無事にあつた。・・・が、おびたらしい血が、床を染め、噴出した血液が、莉音の、顔といわず、体を染めていた。ナイフが、刺さったまま、落ちたせいで、傷が、縦に裂けていた。

「どうしました？」

ようやく、看護師が、顔を覗かせたのは、呼びつけられた医師が、来る、ほんの、少し前だった。騒ぎを、恐れ、陸斗は、姿をくらませていた。

「ちよつと、手を滑らせてしまつて……。」

「手を滑らせたようには、見えないな」

嶺は、少しだけ、起きようとした。ものすごい、血の臭いだ……。人々の騒ぎだとか、痛みだとか、その時の、彼は、感じなかった。莉音が、少し、表情を変えたのが、気になっていた。

「莉音？」

嶺は、莉音に、向き合った。莉音が、この騒ぎで、何かを感じ、意識を、取り戻そうとしているのか。

「莉音！」

ゆつくりと、唇が、何かを、言っている。たどたどしく、何か、記憶を一つ一つ、まさぐるように。

「れ……い……?」

目は、見開かれたままだったが、しつかりと、そう呟いた。

「莉音!」

じつと、見開く瞳は、遠い世界を見ていた。

「莉音。」

嶺は、真っ直ぐ、莉音の、顔をみた。痛みを忘れ、久しぶりに見る愛しい莉音の顔だった。

「待ってた。」

「俺も。」

「あたし……。」

莉音は、言いかけたが、すぐ、駆けつけた医師達に、引き離されてしまった。嶺は、応急処置をする為、処置室へ。莉音は、診察をする為、ベッドの、周りをカーテンで、覆われてしまった。

「莉音が……。還ってきた……。」

嶺から、長く、深いため息が、溢れ出ていった。永く、永遠とも思われた深い記憶の、海から、莉音は、戻ってきた。嶺の、魂を、握り締め、今、莉音は、ようやく、嶺と、向き合う事になるだろう。

「それで、お前、相手訴えなかったの?」

慶介が、憤慨して言った。嶺の部屋からは、真っ直ぐショッピングセンターの灯りが見える。

る。遠く見える山のでっぺんに、何棟もの、テレビ塔が、見える。その端からは、いくつもの、ネオンが見え、様々な、光を呈している。何度、この部屋で、莉音と、この景色をみた事か……。

「うん。人の事、言えないと思ってさ……。」

嶺は、コーヒーをカップに分け、慶介に差し出した。怪我したのは、左肩ですんだので、コーヒーを分けるのは、何なかった。が、少し、痛んだ。

「本気で、考えなきゃ。なんだ。」

「お姫様が、目を覚ましたしな。」

「そうなんだ。」

「お前としては、どうなの？」

嶺は、カップに、唇をあてたまま、遠い目をした。

「まず、莉音は、あの旦那の所へは、帰せないと思っている」

莉音は、まだ、しばらくは、入院が、必要らしい。その後の事を、考えると、嶺は、思い悩むのだった。

「それに、美央に、結婚を申し込んだ」

思い出して、慶介に、報告した。

「はあ！」

慶介は、呆れた。

「そこまで、責任とるのか？お前の、一緒に居たいのって、莉音じやなかったか？」

「そうだよ。それは、変わらない」

「じゃあ、一緒にいろよ」

「居たいさ」

「お前の中途半端な、優しさが、周りを傷つけんだよ。中途半端なんだよ。美央に対しても。莉音に対しても。お前の本当の気持ちを伝えて、行動にうつす。誰も、傷つけないなんて、出来る訳がない。傷つけた分、幸せになるしかないんだよ。」

嶺は、答えなかった。ベランダに出ると、夜気が、気持ちよかった。もう、季節は、晩夏にうつりはじまっていた。

「結婚すれば、気持ちは、変れるのか？」

慶介は、静かにきいた。

「俺には、二人共、不幸になるしか、思えない。嶺？莉音は、知っているのか？お前の子供が、生まれるって、話。残酷な、話だと思わないのか？」

言いそびれた、一番大切な話。莉音との、時間は、あの日止まったまま……。嶺と美央の、時間から、遠く隔たったままなのである。

今、居る二人の、位置を、莉音が、知ったら・・・。

「様子を見て、話そうかと思っている。それで、莉音の気持ちを確認したいと、思っている。」

携帯が、美央からの、メールの着信を知らせた。

・・・おやすみなさい。・・・

美央からの、お休みメールだった。

美央は、莉音の事を知っている。莉音は、まだ、美央の状況に、気付いていない。誰か、周りから、知らされる前に、嶺は、話す必要があった。

「なるべく、早いうちに話すよ。」

嶺は、携帯を、キッチンのカウンターに、放り出した。莉音には、自分から話す。何とは無く、嫌な予感がしていた。莉音の目覚めが、また、止まっていた歯車を動かし始めていた。

部屋、一杯に、イチゴの甘い匂いが、広がっていた。誰もが好きな赤いイチゴ。大粒のイチゴが、箱一杯に並んでいた。

「へえー！奮発したねえ？」

所々に、赤いリボンが、飾り付けられている。

「もう、退院なんだけどね。」

どうにか、お腹の赤ちゃんには、異常もなく、退院の運びとなっていた。

「なんか、いい匂い！」

美央は、イチゴを、一つ摘むよ、口に放り込んだ。

「よく、ここが、わかったわね！」

「うん。拓斗から、メールもらったんだ」

美羽は、ベッドの脇に腰掛けた。

「あいつ。今でも、美央の事、忘れられないのかなー。なんて、思っちゃうんだけど」

拓斗とは、嶺の大学からの友人で、もう、1児の父親でもある、年上の同級生である。美央の事が、好きだったが、あっさり、美央に

振られて終わっていた。

「まさか。」

美央は、打ち消した。

「やっぱさー。あたしが、言ったじゃん。拓兄と、一緒のほうが、美央は、幸せになれるって。どうして、嶺が、好きだったりするの。」

真似て、美羽も、イチゴをつまんだ。ショートヘアの美羽の髪が、陽を受けて、キラキラ輝いている。

・・・そんな事、言って。自分だって、嶺の事が、好きだったクセに・・・

思ったが、美央は、口に出さなかった。

「明日。退院する」

「親は、どうするの？おばさん。どうしてた？」

「うん。嶺が、話してくれてたけど。」

「それは、結婚するって事？」

いぶかしげに、美羽は、聞いた。

「嶺は、近いうちって、言ってた。」

「良かったじゃん。」

「全然。」

美央の意外な反応に、美羽は、面食らった。

「嬉しくない。」

美央は、言った。

「前は、それが、良いと思っていた。嶺さえ、傍に居てくれれば、結婚できなくてもいい。でも、本当に、あの人。あたしの事なんて、これっぽちも、思っていないって事に気付いたの。」

不思議なくらい涙は、出ない。

「どうして、だろうね？この子が、大きくなれば、大きくなる程、がんばれて、声を掛けられてくるみたいで・・・」

美央は、お腹の子が、愛おしいようだった。

「傍に居てくれるなら、あたしを見て欲しいって、思ったの。気持

ちが無いなら、居てくれなくてもいい。」

「そうなの？美央。あなた……。強く、なったわね」

よく、嶺につれなくされると、落ち込んで、周りに慰められてた美央。母は、強いというが、いつの間にか、美央は、たくましくなっていた。

「そうじゃないんだ。かなわないって。思ったの。あの事故の日に」
莉音が、運ばれたあの日。嶺は、泣き崩れていた。あの、周りを気にせず、泣き崩れる嶺をみて、悟ってしまった……。自分は、莉音にかなわない。叶わない恋は、不幸だと。

「でもね。この子に、父親は、必要なの。だから、一時だけはね。夫婦で、いないと」

「そんなの！」

美羽は、言いかけて、辞めた。自分は、今、恐ろしいことを、口に出そうとしていた。

「……。判ってる。でもね。できないよ。」

察して、美央は、応えた。子供をなくすなんて。

「だって、好きな人の子供だよ。嶺は、あたしの物にならなかったけど。この子は、あたしの子……。」

美央は、愛おしそうに、お腹を、撫でていた。バカげている。一人で、子供を育てると、いうのか……。出産の時だけ、籍を入れて置き、その後、抜こうとしているのだ。美羽は、言い出せずにいた。美央の、母親から、相談を受け、子供をおろすよう、説得するように、頼まれていたことを。

「美央。本当にいいの？」

「そう。最初から、そのつもりで、いたんだもの」

「バカだよ。美央は。」

美羽は、拓斗が、美央を、忘れずにいる。そんな理由が、判る気がしていた。どうして、嶺は、美央と別れてしまったのだろう。

「イチゴ食べすぎだよ……。」

美羽は、優しく、微笑んだ。

ずーと、時は、とまっていた。嶺と別れた時から、季節は、止っていた。心は、死んでいたと思う。あの、瞬間から。メールの無い時間が、耐えられなかった。絶え間なく、続いたメールは、別れた瞬間から、止まったままだった。あんまり、辛いから、受信メールの内容も、散々悩んで、消去した。それでも、メールが、届くサインが出ると、嶺かと思ってしまうので、紛らわしいお店の、メールとかは、着信拒否を設定したり、していた。こんなに、嶺のメールに、縛られているとは、思ってたなかった。だから、仕事に専念しよう、思っていた。夫は、優しい。限りなく。かといって、今更、夫を愛するなんて、都合のいい事は、莉音には、出来なかった。殉死という言葉があるなら、自分は、嶺への愛に殉死したい……。そう、思っていた。そこへ。あの事故だった。嶺からの、メールを待つ心が、事故をよんだ。

「ずーと、意識が、無かったんですよ。でも、あの、ほら。背の高い。素敵な彼が来た時だけ、表情が変わっていうか……。」

うつすらと、事情をしている顔馴染みになっている掃除のおばさんが、莉音に笑いかけた。

「いい男だもんね。」

「そんな……。」

ほんの、少しだけ、照れてしまった。莉音は、多少の会話が、出来るまでには、回復してきていた。何とか、記憶をたどる。なんとも鮮明なのは、嶺への刹那的な思い。そして、今だに、理解できないのは、夫の嶺への行動。認めたくない思いが強く、理解できない。夫が、嶺を刺した？ いや……。誰も、そんな事は、言っていない。気が付くと、嶺の腕に、自分は、居て……。腕からは、おびただしい血。鼻をつく匂い……。嶺は、何も言っていない。自分で、怪我しただけだと……。誰も何も、言っていない。でも、自分の、勘が、叫んでいた。あれは、夫の仕業だと……。莉音は、夫が、自分では、なく、嶺を、狙って、刺したと、思っていた。もし、そうだと

したら、自分のせい？夫を、あの、穏やかな、あの人を追い詰めたのは、自分。

「うつ……。」

莉音は、吐き気が、した。自分の、嶺への思いの陰で、苦しんでいる人がある……。やっぱり、幸せになんて、なれる訳がない。ゴールのある恋じゃない。何度も、嶺の別れを告げられたとき、そう、思い込ませようと、した。いや……。現実には目を向けようとしていた。……が、好きという感情に邪魔され、目を向けられないうでいた。彼への、思いに溺れ、周りを、見失っていた。あのまま、自分が、死んでいたら、夫は、馬鹿な事をしないで、すんだのではないか……。嶺への、思いを、胸に、死んでしまうのも、良かったのかもしれない……。でも、本当に、このまま、死んでしまつて良かったのか？

莉音の、瞳の奥で、桜が、咲き誇っていた。あの、2人で、抜け出して、見にいって城下街の桜が……。満開の桜が、横に流れていく……。もう、一度、逢いたいと、誰かが、呼んでいた。声が聞きたいと言っていた。桜が、何度も、咲いては、散り、流れていく中で、懐かしい声が、叫んでいた。

「莉音……。戻れ！」

「誰？」

目を凝らしてみても、誰も、居ない。それでも、心は、叫ぶ。

……。逢いたい……。逢いたい。

そう、嶺に逢いたい。

莉音に、逢いたい。

お互い、逢いたかったのでは、ないか……。もう、一度、逢いたいと、そう思つて、戻ってきたのでは、ないか。この恋で、誰かが、血を流そうと、もう、止められないのでは、ないか……。もし、傷つく人が、いるのなら、尚更、成就させなければ、ならないのでは、ないか……。莉音。この、戻ってきた命。嶺に捧げるべきだ……。

「何があっても、嶺と一緒になろう。」

周りが、傷つく？そんなの関係ない。嶺と、幸せになろうよ。莉音の心の中で、黒い感情が、頭を、もたげ始めていた。今まで、抑えてきた欲求が、渦巻いていた。

「嶺と、幸せになりたい。」

「もう、落ち着いたかしら？」

突然、莉音の、前に現れたのは、幾分か、お腹のふつくらとした、美央。その人だった。

「初めまして……。なのかな？」

美央は、莉音に、微笑んで見せた。体調も整い、あの後、しばらくすると、すぐ、退院できた。嶺が、迎えに、来ると、いうのを、断り、美央は、真っ直ぐ、莉音の所に来ていた。今日しかない。嶺が、美央の、行動を、予想できないのは、今日だけだ。何としても、莉音に逢いたい。逢って、話がしたかった。嶺の心を、捕らえて離さない、この女性の事を、もう一度、見たかった。今まで、何度、夢の中であっただろう。どんな顔をし、どんな声で、話をし……。その唇は、嶺を、受け入れたのだろうか。その細い体は、嶺に抱きしめられたのだろうか……。莉音に逢い、確認したかった。

「あなたは……。？」

莉音は、最初、不思議そうな顔で、美央を、見ていたが、すぐ、美央が、誰かは、悟ったようだった。

「もしかして……。？」

莉音の、視線が、ゆつくりと、美央のお腹へと、下りていった。

「お腹が……。？」

「そうなの。」

美央は、自慢げに、お腹を、撫でていた。

「大好きな人の子なんです」

「嶺の？」

莉音の顔が、こわばった。

「そうなんです。」

莉音は、もしかしたら、事故の影響で、子供が、できないかもしれない。という事は、面会に来た母親から、涙ながらに聞かせられていた。

「美央さん。なんですね。」

莉音の、心は、勿論、穏やかでは、なかった。

「お腹の子は、確かに、嶺に子です。でも……。」

美央は、こわばった顔の、莉音に続けた。

「莉音さん。でもね。」

美央の、目は、真っ直ぐに、莉音を、みつめていた。莉音の、落胆ぶりが、辛い程、わかる。かと言って、莉音に、勝ったとか、そんなつまらない感情は、なかった。子供を、持てた幸せは、たしかにある。嶺を、誰か、知らない女から、繋ぎとめる為の、計画だったが、事故の時の、嶺の、落胆ぶりを、みて、思いしつた。自分へは、戻らない莉音への嶺の、気持ち。諦めていたが、もう一度、嶺と、やり直したいとも思った、倒れた時に、感じた嶺の、腕の温かさ……。傍に、いても、嶺の心が、戻らなければ、意味がない。このまま、嶺と一緒になれないとしても、莉音の気持ちを、確認しておきたかった。

「嶺と結婚する話がでたの。」

「そう……ですか。」

湧き上る感情を押さえ、莉音は、平静を装った。

「でもね……。」

耐える莉音を、横目に、莉音は、続けた。

「あたし……。結婚したいと、思わなくなったの。」

「ええ？」

サラリと言いのける美央が、意外だった。

「お腹の子供の責任を、とる為だけの、結婚なんだもん。あたしの事なんて、ほんの少しも、思っただけだったの。」

両手を、オーバーに開いて見せた。

「あなたに、渡したくないから、結婚する為なら、どんな手でも、

使いたかったんだけどね。」

美央は、意地悪く笑った。

「でも、心までは、縛れないのね。」

「あなたの妊娠を知って……。嶺は？」

「そう。結婚しようかって。でも、言い出したのは、あたしなんだけど。」

ああ……。やっぱり。あの別れの、原因は、彼女だったのか。嶺は、子供が出来てしまい、自分と別れた。もともと、一緒になんて、なれる筈がないのだ。自分は、夫。そう、家庭のある人妻。自分のしている事は、世間でいう、浮気。もとい、不倫なのだ。どんなに、嶺に、愛していると囁かれようと、甘い思い出があろうと、嶺を責める事は、出来ない。気持ちの裏切りが、あったとしても、嶺は、元々、自分とは、違う世界の人間だったのだから。この美央って、人は、自分と違って、嶺を愛し、愛される資格がある。なんて、羨ましい事か……。

「どうして？子供に、父親は、必要でしょ？」

莉音の声は、かすれた。思わず、手が、震えていた。

「嶺の心は、あなたで、一杯だから」

美央は、自分で言ってる、哀しかった。お腹の子は、判るのか、お腹が、時折、ぐっと、苦しくなった。

「最初は、それでも、良いと思ったの。一緒に居てさえくれれば……。でもね。」

嶺に、思われている莉音が、うらやましい。

「心が、あなたの所にいつてるの。それを、傍で、感じてると……。哀しいの」

「それは……。」

莉音は、なんて、言っていないか判らなかった。どんな事をしても、嶺が、欲しいと思ったばかりなのに。

「あなたの気持ち、知りたい。嶺の気持ちが、戻らないなら、この子と二人だけで、暮らしたいの。ただ生まれてくる子供に、父親

が、居ないのは、可愛そうなので、その時だけ、嶺を貸して欲しい。」

「そこまで……。」

莉音は絶句した。普通は、どんな事をしても、別れてくれって、言う筈なのに、美央は、莉音に、嶺を、貸して欲しいと、言っ来ていてる。

「美央さんでしたっけ？」

莉音は、視線を落とした。

「いいんです。私、夫が、家で、待っていてくれるんです。もう、終わらなきゃ、いけない。」

何故か、涙が出そうになる。でも、こらえなきゃ……。

「彼に、伝えてください。」

意識が、戻る前から、嶺は、莉音を求めているのに。今、意識が、戻り、初めて、伝える。

「あたしは、大丈夫だと。家に帰るからと。」

搾り出す言葉は、詰まってしまう。ここで、終らせよう。現実に戻ろうか。

「莉音さん。それで、いいの？あたしだって、無理して、決めてきたのに。」

「しつかり、お子さんを、育ててください。」

「そんな事言わせるために、来たんじゃないの。」

美央は、泣いていた。莉音の心が、わかったから。

「あたしは、あなたが……。嶺の好きになった人が、どんな人が、知リたかったただけなのに。」

「もう、逢う事は、ないと思います。誰にも……。」

泣いている美央を、見るのが辛かった。そして、お腹のふつくらとした美央を、見るのが、もっと、辛かった。それでも、莉音は、堪えた。

「あたしは、一人でも、大丈夫です。嶺とも……。夫とも、もう、逢うつもりは、ありませんから。」

紅く泣きはらした目は、美央を、見据えていた。その瞳は、深い悲しみに、みち溢れていた。美央も、その目を、見るのが、辛くなっていた。

「じゃあ。」

もう、帰ろう。美央は、軽く、会釈をすると、莉音の、病室を、出て行った。

「はい。」

笑顔で、見送ろう。ベッドから。自分でも、いい笑顔だったと思う。感情を高ぶらせる事もなかったし……。美央に、優しく言えた。美央は、驚いた表情だったが、最後に、安心した表情を見せた。綺麗な、女性だと、思った。自分と、同じラインに、この人は、立っていた。もう、年下の女性と、比べられるなんて、たくさんだ……。莉音は、小さく笑った。もう、女として、比べられなくて済む。

「楽になれる……。もう、苦しい恋は、終わり」

莉音は、ベッドに、ゆっくり、横になった。

嶺が、それを、知ったのは、間もなくだった。よく晴れた日の午後だった。嶺は、莉音の好きな白いミニ薔薇とかすみ草を、腕いっぱい抱え、莉音の部屋と向かった。

……。もう、少しで、退院できる……。

そう、聞いていた。事故や怪我の騒ぎで、仕事が、片付かず、なかなか、逢いに来るタイミングが、なかった。メールも、病院にいるせいか、通じない。ようやく、仕事の合間をぬって、時間を作り、病室に向かっていた。

「あれっ……」

廊下で、すれちがった看護師が、怪訝な顔をした。

「英さんなら、もう、退院しましたよ。」

「えっ！」

嶺は、立ち止まった。

「何度も、先生が、お引止めしたんですけど、どうしてもって。」

「いつですか。」

「そうねえ。一昨日だったかしら。」

あわてて、嶺は、莉音のいた病室へと、駆けていった。ミニ薔薇が、腕から、こぼれ落ちていく。廊下には、無残にも、いくつもの、カスミ草が、落ちていった。

「ない。」

莉音は、いなかった。誰もいない部屋は、以外と広く、ガランとしていた。糊のきいたシャツが、真新しく、白くまぶしかった。

「どうして……。」

聞いてない。何一つ。

「聞いてなかつたんですか？」

先ほどの、看護師が、ついてきていた。

「意識が、戻ったのも、あなたの、お蔭だろうって、噂してたのに。」

「話せるように、なつてたんですか？」

「かなり……。よく、なつてたって。」

「そうですか。」

嶺は、落胆した。居なくなるなんて、予想してなかった。いつも、自分を、待つてるとばかり、思っていた。自分と、少しだけでも、一緒に居たいって、言っていたのではないか。これからのはずだろう？ 黙って、居なくなるなんて、終らせるつもりなんだ。こんな簡単に、自分だけ、納得して、終止符を、打つなんて……。

嶺は、あわてて、病院から出ると、莉音の携帯にかけた。コール音は、するも、何度かけても、出なかった。もしかしたら……。と思い、メールを送ってみたが、すぐ、宛先不明で、戻ってきてしまった。莉音は、自分から、去ろうとしている……。諦めが、悪いと思いつつ、嶺は、会社の、莉音の上司に、電話してみた。

「田舎に、戻るとかで……。速達で、退職願いが送られてきたよ。」

上司も、驚きを隠せないようだった。

「田舎？自宅では、ないんですか？」

「もう、旦那さんの所へは、戻らないようだ。」

莉音は、一人で生きていこうとしているのか。

「ところで……。」

「また。それは……。」

話し、続けようとする上司の言葉を遮り、嶺は、電話を切った。せっかく、取り戻した莉音は、自分から、離れて行ってしまった……。事故の時とは、違う絶望が、嶺を、襲っていた。

「何処いったんだ。莉音」

脱力する嶺の、携帯がなった。

「はい。」

あわてて、出ると。美央だった。

「嶺？これから、そちらに、行こうと思っているんだけど。」

「ああ……。」

嶺の声が、沈んでいた。

「何か、あったの？」

嶺の、落胆ぶりに、美央は、気付いた。

「嶺？」

伺うような美央の声に、嶺は、思わず……。

「莉音が、いなくなつた。」

震える声で、告げた。

「莉音さんが？」

美央も、驚いた。この間の事は、まだ、嶺に言っていない。どうしようか……。しばらくの沈黙の後、美央は、嶺に、告げる事にした。

「ごめんなさい」

美央は、最初、謝った。

「言っていない事があるの。」

美央は、嶺が、怒るのでは、ないかと心配しながら、この間、莉音に逢いに行った事。二人の間で、話した事。莉音が、別れると、告げた事を、嶺に告げた。自分の、感情をコントロールできただけで

も、凄いと、心の中で、思いながら。

「別れるって、言ったのか？」

自分には、何一つ、言っていない。

「言えなかったんじゃないかな」

美央は、言った。どうして、ここで、自分が、嶺への莉音の気持ち
を伝えなきゃならないんだろうと、思いながら。

「莉音さんは、嶺。あなたの事を、本当に、あなたの事を、思っ
ているのね。」

深いため息が、出て行った。莉音には、かなわない。しっかり、嶺
の心を、捕らえてしまっている。

「嶺。行って、いいのよ。莉音さんに、あいにく。」

美央は、嶺に言った。

「ご主人とも、別れるって、言ってた。あなたに、それを、告げ
たら、もう、私の元には、戻らないって、思ってたんだけど。」

いいの。行ってあげて。」

涙声になっていた。

「莉音さんの、所に。」

「だめなんだ。」

嶺は言った。

「行けない。」

「どうして……。」

「莉音が、どこにいるか、わからない。」

哀しく、辛い嶺の声だった。

「携帯が、全て、？がないんだ……。」

白いミニ薔薇も、カスミ草も、全て、散ってしまっていた。

「急に、帰ってきたと思ったら……。お姉ちゃん。少しは、元
気でたの？」

莉音は、妹の、家に居た。

「事故の時も、行けなくて。ごめんね。子供を見てくれる人もいな

くて」

莉音のあしもとで、まだ、1才にも、満たない幼子が、遊んでいた。
「うん。いいの。」

「こんな時、親が、居てくれたらって、思っただけど。」

妹の、来夏は、幼子を、抱き上げた。

「お姉ちゃん。離婚するの？何回も、義兄さんから、電話があつた。速達で、離婚届けが、送られてきたって。」

「うん」

「また。生返事……。ちゃんと、話しあつた方が、いいんじゃないの？電話にも、出ないんじゃないし、具合だつて、よくないんでしょう？」

莉音が、突然、夜中に、尋ねて来た時は、驚いた。どうやって、ここまで、来たのだらうと、思うほど、具合も悪く、タクシーの女性ドライバーに支えられながら、立っていた。事故で、重症を負い、入院したと聞いて、病院に、何度か、行こうとしていたが、幼稚園の子供と幼子を抱え、単身赴任の夫を持つ来夏には、身動きとれないで、いた。早くに、両親をなくし、頼れるのは、互いの姉妹だけだったが、実際の所、なかなか、会えずに居た。だからこそ、何かあつたら、力になりたいと、思っていたのだが、突然、現れた莉音は、あまり、語らず、夫からの、電話で、無理に退院した事。離婚しようとしてきたこと。そして、その原因が、莉音の夫が、何か、事件を起した引き金になった事に、結びついた事であると、気付かされていた。

「病院。無理に退院してきたんでしょう？」

「・・・」

莉音は、ずっと、上の空だった。早く、嶺の前から、姿を消したいと思い。行動にでた。もう、傷付きたくなかった。嶺の事を、愛せば愛する程、傷が、深くなる。よく切れる刃物を、素手で、掴んでいるような危ない恋。全て、忘れてしまおう。そうすれば、楽になれる。嶺の事も。夫の事も。今更、やり直しても、お互い、過去に

縛られ、傷つくだけ。全て、ゼロにして、新しく、生きていこう。そう決めたのに、心の奥に、染みついている記憶。

・・・もう少しだけ・・・

いつも、そう思っていた。もう、少しだけ。一緒に居る時間を、貪っていたあの日々。嶺を、忘れなきや。そう、思えば、思うほど、忘れられなくなる。いつその事、憎んでしまえば、楽になれるのに、思い出すのは、明らかに、自分を、愛してくれた嶺の、輝いた目だった。嶺と、一緒にいた美央。美央の事も、最初は、憎んだ。でも、ルールを、破ったのは、自分。自分が、嶺と、結ばれなければ、一緒にいるのは、美央に決まっていた。でも、人を好きになるのに、ルールなんて、あるのだろうか・・・。

いや・・・。だめだ。美央のお腹には、嶺の子供が、いる。その子供を、悲しませる事が、出来るのだろうか。どんな形であれ、子供を巻き込んで、いけない。親のいない悲しみは、自分達姉妹が、一番よく知っている筈では、ないか。

「聞いている？」

来夏だったあまり、莉音の顔色も、良くなく、食欲も落ち、痩せていく、姉を心配すると、どうしても、口やかましく、なってしまう。「病院行つてね。ほんと、お姉ちゃん。無謀なんだから」

素人目に見ても、莉音の、体調が、よくないのは、明らかだった。いつそ、莉音の、夫に、お願いしようかと、思っていたが、辞めていた。姉が、離婚したいのには、最もな、理由があるのだろう。どうみても、姉には、思っている人が、いる。何度も、鳴る携帯には、出ようとせず、かといって、着信拒否する訳でなく、時折、携帯の着信履歴を、見ている様子から、みて、誰かを、待っているようにも、見える。だが、連絡できない人なのだ。遠くから、来夏は、姉の、苦しんでる様子が、見えていた。

「ごめんね。少しは、貯金があるから。仕事が、見つかるまで、置いてほしいの。そしたら、出て行くから」

来夏の元にいる日が、何日も、過ぎていた。

「何、言ってるの。うちは、旦那が居ない分、お姉ちゃんが居てくれると、助かるから。お姉ちゃん。あと少しすると、幼稚園バスが、くるから、外の空気吸いがてら、お迎えに行ってくれる。階下だから、病み上がりでも、大丈夫でしょ？階段にでも、座って、日向ぼっこしてなよ」

来夏は、少しでも、気分転換できるよう、薦めた。

「ここにいては、ダメなの？」

あまり、動きたくないようだ。

「お迎えくらい手伝って、ほしいな。」

何としても、莉音を、外に出したかった。

「そうね。そうする」

莉音は、立ち上がった。

「行ってくる」

「お願いね」

来夏は、莉音を、外へと促した。嶺は、何もしなかった訳では、ない。携帯も、通じない中、とにかく、莉音を探した。莉音の、実家を、会社の書類で、調べ上げ、直接、尋ねてみたが、両親は、とうに、亡くなっているとかで、家は、荒れたままに、なっていた。思い切って、莉音の、夫を、尋ねようかと、思ったが、それは、案の定、難しく、人つてに、莉音が、離婚したと、聞いただけだった。莉音が、離婚したと聞いた時、心が、震えた。もしかしたら・・・と、いう思いもあったが、美央の、お腹だけは、待ってくれなかった。月が、満ちてきてる。ようやく、自分達は、一緒になれるかもしれない。と、いう思いとは、裏腹に、嶺は、美央と、入籍する日が、近づいていた。

・・・こんな思いのまま、入籍するのか・・・

莉音は、もう、自分の力では、探し出せなくなっている。この思いを、心の奥に沈めよう。いつか、古い傷のように、疼くかもしれない。あんなに、恋焦がれた人だもの、忘れられる訳がない。自分は、莉音を、生涯忘れる事は、ないだろう。いや、まだ、諦めた訳

ではない。逢えば、時間は、逆戻り、莉音を求め、一緒にいたいと思うだろう。逢えなくとも、心の、奥底に、莉音への、熱い思いが、染み付いていた。きっと、生まれてくる子供を、愛する事は、出来るだろう。でも、莉音より、深く、美央の事を、愛する事は、生涯できない。

「入籍しような。」

嶺は、美央に、笑いかけた。

時間だけが、流れていった。家を出、一人暮らししようと、する莉音を、妹の来夏は、自分の子供の子守を、理由に引き止めていた。日に日に、姉の、莉音は、痩せていき、憔悴しきっているのが、わかっていった。理由も、何かは、わかっていった。それを、余計な、お節介とばかり、手出していいのか、わからなかった。近くの、雑貨屋に、働きに、行くようになって、少しは、表情も、戻ってきたが、相変わらず、通院は、続いていた。

「今日も、仕事なの？」

元氣のない姉を、誘って、近くの公園で、開催されているフリマに行こうとしていた来夏は、不満の声を上げた。

「ごめん。休みの予定だったんだけど。急に、出てくれって、言われて……。」

「なんだ。仕方がないなー」

来夏は、お弁当を、莉音に渡した。

「しかり、食べてね。お姉ちゃん。そんなに、痩せて、見た目、悪いよ」

「そお？じゃ。時間だから」

莉音は、お弁当を受け取ると、あわてて、外へ、飛び出していった。「あつ！おねえちゃん」

携帯忘れてるよ！言おうとしたが、はっと、思い当たり、追いかけるのを、やめた。携帯を、手にとって見た。何度も、着信が入っていても、出なかった。莉音の携帯。着信拒否でもなく、番号を変え

るわけでもなく、鳴るままに、させておく、携帯。来夏は、携帯を開いた。オートロックされている訳でも、なく、すぐ、画面が見えた、着信履歴を、見ると、同じ名前での、着信が、ずーっと、続いていた。

・・・嶺・・・

最近は何日かに、1度の割合のようだが、何日も、前は、日に何度も、かかってきていた。

・・・ああ・・・この人だ・・・

来夏は、嶺の、番号を、自分の携帯に、控えると、発信した。後で、履歴は、消すつもりで。

美央は、幸せだった。ようやく、手に入れた嶺との、生活。引越しも、業者に頼んだから、楽だったし、片付けも、嶺が、まめに手伝ってくれたから、何とか、形になってきた。式も、終え、新婚旅行とやらは、子供が、生まれてから、落ち着いてからと、いう事になり、国内の2泊の旅行で、すませた。今まで、考えられなかった。嶺との、望んだ幸せであった。嶺の、朝食を、用意するのも、妊娠中の、辛い体では、あったが、大好きな人との、望んだ暮らしなので、がんばって、用意し、嶺を、送りだした。嶺も、美央の、作る朝食を、美味しいと言って、食べ、仕事へと、向かっていた。何事も無く、平和に続く日が、明日もあると、信じていた。そう、この日。来夏からの、電話が、嶺にくるまで、嶺と、美央は、普通の夫婦と、何一つかわらなかった。突然、嶺の携帯が、鳴ったのは、会社に着いて、間もない時間だった。着信名を、見て、嶺は、我が目を、疑った。

「莉音？」

心臓が、高鳴った。忘れもしない人の名前。どんなに、忘れようとしても、忘れた事のない人への、思いが、胸の奥から、湧き上がった。手が、震え、危うく、携帯を落としそうになった。

「莉音。」

・・・だが、携帯から、聞こえてきた声は、莉音に、似てこそ、いたが、全く、知らない女の声だった。

「嶺さん？」

「はい・・・。」

「私、莉音の、妹、来夏です。」

「妹さん？」

莉音に、妹が、いるのは、初めて聞いた。

「莉音は、何処です？」

嶺は、思わず、大声になった。周りに、人々が、振り返り、嶺の顔を、みやった。嶺は、今まで、自分が、どんなに、莉音を、探し続けてたかを、電話口に、話した。今、かかってきた電話を切ってしまつたら、二度と、莉音に逢えなくなる。そんな気がしていた。

「たぶん・・・。」

来夏は、言っているのか、言葉を呑んだ。

「助けが必要なんです。」

この電話の相手が、莉音を、助け出す人であろう。来夏は、直感していた。姉の恋するのは、この人であろうと。

「あなたにしか、頼めないと思います。」

来夏は、告げた。

「あなたに、逢いたいんです。無理して、抑えてるんです。姉に逢って、ください。」

「俺も。同じ思いです。」

振り絞る嶺の声だった。

「一目、逢いたいです。思っていました。」

何を、おいても、莉音に逢いたい。どうして、居なくなったのか。自分と連絡をとらなくなったのは、何故なのか、聞きたかった。想像はつく。だが、言葉で、しつかり、聞きたい。

「今の住所を、教えてください。」

嶺は、来夏の、住所を聞くと、ここに、電話した事を、口止めし、すぐ、莉音の、いる街に向かう事にした。今すぐ、有給をとり、彼

女のいるに、向かいたい。

来夏の家に、戻るには、長い坂を、上りきって、細い路地裏に入らなければ、ならない。夕焼けが、綺麗だった。厚い入道雲に、オレンジの夕陽が、反射していた。たくさん、お店の、パンを、お土産に、買った。

「今日は、無理に出てもらったから、早めに、あがつて」

思いがけず、早く、帰れる事になった。早く、帰れたから、焼肉でも、食べに行こうかと、来夏に、電話しようとして、携帯を、忘れた事に、気づいた。帰ってから、出掛けても、いいと思い、来夏の子供達の為に、お店の、格安パンを、買いこんでしまった。子供達は、パン好きだ。ついでに、自分の好きなイチゴジャムや果物のシロップ漬けも、買った。

もう、すぐ、陽が暮れる。以前、余りにも、夕陽が、綺麗だったの
で、嶺に、写メを、送った事が、あった。

・・・嶺・・・

忘れようと、しても、心の、奥底に、住んでいる人。忘れようと、すれば、するほど、彼の色が、濃く残っていく。

・・・逢いたい・・・

正直に、言えば、嶺に逢いたい。当てしまえば、余計に辛くなるし、今までの、忘れようとした努力が、無駄になると、自分に、言い聞かせ、ここまでできた。一緒に、住める世界の、人で、ないと、何度も、自分に言い聞かせた。・・・けど、心が、彼を、求めている。

・・・無理なのに・・・

莉音は、ため息をついた。

・・・と。

手が、滑り、別に、持っていたシロップ漬けが、転がり落ちた。

・・・あぁっ！・・・

拾おうとして、地面に、つまずき、思わず、転倒してしまった。

・・・まったく・・・

そそっかしい。よく、嶺に、笑われたっけ。莉音は、一人、失笑した。

「相変わらず、だよな？」

目の前に、手が差し出され、体が、浮いた。聞き覚えのある声。顔。そして、匂い。

「嶺」

反射的に、嶺から、逃げようとした。

「だめだよ！嶺」

いけない。この人には、あの人が、いる。若く、綺麗な、あの人が。ダメなのは、莉音だよ」

嶺は、逃げようとする莉音を、後ろから、抱きしめた。

「もう、居なくならないで」

力強い嶺の、腕の力だった。忘れようとしても、忘れる事は、出来なかった。何度、抱きしめて欲しいと、願った事が……。肩の、力が抜けていくのが、わかる。嶺の息が、肩越しに伝わってきた。「どうして、黙って、いなくなったの。」

「消えたかったから。」

「どうして。」

「あなたとの事は、なかった事にしたかったから。」

「忘れろって、言うの？」

莉音は、頷いた。

「もう、居なくなるなよ……」

嶺が、泣き出しそうだった。

「探したんだ。ずっと。ずっと、探し続けるつもりだった。生きていてくれれば、それでいいと、思った。だけど、逢えないのは、辛い」

本当にやっと、逢えたんだ。そう、思うと、腕の力が、強くなる。

「もう、離れたくない。」

嶺の、気持ち。

「嶺。嬉しい。けど。」

莉音は、嶺の、腕を、そつと、離した。

「その為に、泣かせる人が、いちゃ、いけないよ」

美央の、事だ。莉音は、美央が、嶺の子供を、妊娠している事を、知っている。辛くても、生まれてくる子供から、父親を、奪うわけには、いけない。哀しい決断をし、嶺の、前から、姿を、けしたのだ。

「知ってるの。」

「美央から、聞いた」

嶺は、美央から、莉音が、姿を、消す前に、あつたやり取りを聞いた事を、告げた。

「俺の、子供の事で、いなくなつたんだよね？」

莉音は、嶺の、目を、見つめると、うるんだ瞳で、頷いた。

「子供から、あなたを、奪う事は、出来ないから・・・。」

嶺の、そばに、行きたい。夫と、別れた今なら、それが出来る。でも、生まれてくる子供に、いったいどんな罪が、あるというのだろうか・・・。嶺なら、きっと、いい父親になれる。自分は、その傍らに、いる事は、出来ないけど、遠くからでも、嶺の、良き父親の、姿を、見る事は、出来るだろう。報われなくても、いい。そういう愛し方が、あつても、いいはずだ。

「・・・だから。嶺。ここで、お別れしましょう。逢えて、嬉しかった。あたし達、もう、昔とは、違うの」

莉音は、落としてしまった荷物を、拾い集めた。

「周りを、傷つけすぎるよ。あたしが、悪いんだけど」

精一杯、嶺に、笑顔を、作った。

「今なら、引き返せる。嶺。これ以上、周りを傷つけるのも、あたし達自身を、傷つけるのも、止めよう。もう、連絡とるのも、やめましょう」

「できない」

「嶺！」

せつかく、ついた決心を、揺るがされなくなかった。どうして、嶺

が、ここに、いるのか？

「美央を、愛する事は、できない……。だめなんだ。莉音」

「聞えない。」

嶺は、去ろうとする、莉音の手ひき、引き止めた。

「一番、傷ついてるのは、莉音。君じゃないか。もう、これ以上、傷つけたくない。俺と一緒に、帰って、欲しい。」

「そんな簡単な事じゃ。ないでしょう？」

莉音は、泣いていた。本当は、嶺に、ついていきたい。でも、それは、もう、一人の、女を、

子供を不幸にする。

「あなたは、わからないの？」

「わからない。判りたくないんだ。俺のわがままなんだ。でも、この我儘を、通して、ほしい。莉音。」

「通せない！」

嘘だ。莉音は、自分で、いいながら、思った。自分は、嶺に、強く受け止めて欲しいと思っている。でも、本当の、事は、言えない。

「莉音。一緒に、帰ろう。」

嶺は、莉音の、腕を、強くつかむと、歩き出した。

「帰るんだよ。莉音。俺の所へ」

嶺の、力は、強かった。迷いもなく、莉音の、手をひいていた。離して！と、莉音は、言いたかったが、いつにない、嶺の力強さに、戸惑いながら、莉音は、ついていった。嶺が、タクシーを、拾うべく、足取りは、強かった。

秋花火を君と・・・

「それでさ。落ち着いたの？」

優しい声だった。体を、心配し、メールだけでなく、何度も、電話を、くれる。

「うん。大丈夫。いつも、ありがとう。」

彼は、優しい。限りなく。不安な時、いつも、癒してくれるのは、拓斗だった。美央の、体を心配し、いつからか、定期的。いや・・・。一日に、何度も、連絡を、くれるようになっていた。あの時、拓斗の、告白を、受け入れ、付き合っていたら、幸せになれただろうか・・・。いや、自分が、愛さなければ、意味は、ない。自分が、拓斗を、愛していたら・・・と、いう事になる。彼と、一緒にいたら、幸せで、平凡な、生活が、出来たかもしれない。

「何か、あつたら、いつでも、連絡しれくれよ」

拓斗は、そう言つと、電話を切つた。

「そうね・・・。」

何も、無い方がいい。余りにも、いろいろありすぎた・・・。嶺と、静かに暮らし、お腹の子を、育てたい。普通に、優しく、微笑んでくれる嶺が、傍にいれくれれば、何も、いらぬ。再び、携帯が、なつた。

「はい？」

嶺から、だつた。

「美央？話したい事が、あるんだ」

「話？帰つてきてからでも、いいのよ。今日は、遅いの？」

「いや・・・。帰つてからでは、遅いんだ。」

嫌な予感がした。

「やつぱり。俺達。きちんと話す事が、必要だと思つ」

「俺達？」

それは、自分と、嶺だけでは、ない気がした。

「莉音を、みつけた」

「！」

美央は、めまいを、覚えた。携帯を持つ手が、震えた。

「一緒なの？」

「一緒にいる」

「そう・・・。」

美央は、携帯を、みつめた。沈黙だけが、続いた。

「美央。俺。自分の、気持ちに、正直になりたい。子供を、産んで、欲しいと思っている。だけど・・・」

「だめ。そこから先は、言わないで！」

聞かなくても、わかつている。最初、自分は、子供を、産むときだけ、籍があれば、いいと思っていた。でも、それは、一緒に暮らすうちに、代わっていった。

「このまま、ずーっと、この幸せが、続きますように」

そう、毎日、思わずには、いられなかった。それなのに、今頃、突然、何を言うのか？

「美央。君と、何を話したら、いいかわからない日を、続けるのは、辛い。美央は、言ったよね？心が、ないのに、傍に居られても、辛いだけだって。美央。君を、愛し、幸せにできる男は、俺じゃないんだ。」

「違う」

美央は、叫んだ。嶺の隣。電話の、向こうでも、言い争う声が、聞こえた。

「そこに、いるんでしょう？莉音さんを、だして！」

「だめだよ。美央。莉音は、自分は、また、どこかへ、行くつもりなんだ」

「嶺」

あたしと、莉音さんと、どちらが大切なの？と、言いたかったが、答えは、判っていたので、言えなかった。嶺が、愛しているのは、莉音なのだ。自分を、愛してくれた嶺は、過去の、嶺なのだ。今、

ここで、話している男は、自分が、恋焦がれた男では、ない。

「ひどいよ……。どうして、こんな事を……。」

激しく、嗚咽がこみ上げてきた。

「あたしは、無理に、嶺と結婚した訳じゃない！どうして、今頃、何を言い出すの？」

「お互い、考えすぎたんだ。」

「もう、戻れないのに。」

携帯を、放り投げ、その場に、座り込んだ。どうして、こんな酷い目に、自分を、あわせるのだ。嶺に、対する怒り、悲しみが、こみ上げてくる。

「嶺のばか！わかってない。」

美央は、裸足のまま、家を、飛び出していた。

「どうして……。嶺。それは、ひどすぎる」

莉音までもが、涙目になって、携帯で、話終える嶺に、詰め寄った。人は、どうして、本当の、愛を追求しようとする、周りを傷つける事になるんだろうか。嶺の、自分への、気持ちは、物凄く、嬉しい。だけど、今の、美央の体の事や、嶺から受けた言葉を、考えると、自分の事のように、辛かった。恋しくても、手に入らない辛さは、自分も、よく知っている。好きだからこそ、最後の心の力を、振り絞って、別れたのだ。美央を、傷つける気持ちなんて、毛頭もない。

「美央さんは、あたしの事を、考えてくれてたの。居なくなっただけは、あたしでいいよ、彼女が、関係ないの。」

美央が、可哀想すぎる。こんな結果を、のぞんではない。

「もう、静かに、暮らしたかったの。嶺。あたしは、もう、いいの。何度も、莉音は、言った。そして、車を、停めてほしい。自分を、帰してほしいと、嶺に告げたが、嶺は、莉音に、切ない顔をするだけで、車を、停めてくれる事は、なかった。」

「莉音。俺が悪いんだ。君への最初の、思いを貫けばよかった。迷

いがあつたんだ。迷っている間に、傷が、どんどん深くなる。莉音。運命って、あると思う。俺は、莉音と添いたいと、思っている。その気持ちを、貫くのも、今まで、傷つけた人に、報いるためだよ」

嶺は、タクシーの、後部席で、すっかり莉音に、向き合った。莉音。もう、二人だけの問題じゃないんだ。一緒に、生きて行きたい。しっかりと、三人で、話しあまなきゃ、ダメだ。」

嶺は、莉音を、抱きしめた。

「もう、だめなんだ。また、居なくなるんじゃないかと思って・・・。不安で。不安で。この気持ちのまま、生きて行く事は、出来ない。」

莉音の手が、嶺の腕に、触れた。

「約束どうり、秋花火の頃には、一緒にいよう。もう、少しだよ・・・。莉音。俺は、一緒にいるだけで、いいんだ・・・。」

莉音は、答える代わりに、嶺の、肩に、そつと、頭を、のせた。

「だから・・・。莉音。美央を、幸せにする為にも、このままじゃ、ダメなんだ。判ってくれるね？」

「嶺。私・・・。美央さんは、大切にしたい。」

「俺も、同じだよ」

車は、橋を、渡り切ろうとしていた。水面に、街の、イルミネーションが、綺麗に、入り乱れて反射していた。

いつの間にか、美央は、拓斗の、マンションの前にいた。もう、夜遅く、近くの公園で、遊ぶ子供達の声もない。12階建ての、マンションは、闇夜に、つめたく、白く反射して見えた。

「体、冷えてるよ・・・。」

拓斗は、エントランスから、出てくると、奥さんの物らしき、カーディガンを、美央に、はおらせた。突然訪れ、インターホン越しに、聞いた拓斗の声は、どんなに、驚くかと、思ったが、意外に、冷静で、むしろ、美央が、訪れた事を、喜んでるようにも、みえた。

「ごめんなさい。突然。奥様に、迷惑よね？」

「うちのやつ。今、実家なんだ。」

拓斗は、笑いかけた。

「何が、あったかは、聞かないけど……。あまり、いい話じゃ、なさそうだな」

拓斗は、美央が、裸足で、薄着しているのを、みながら言った。

「とにかく、妊婦さんには、早く、中に、入ってもらおうかな」

美央の、背中を、そつと、押しながら、言った。

「結局、嶺じゃ。だめなんだよ。美央」

美央は、俯いた。

「どんなに、好き合った時が、あったとしても、その時期が、過ぎてしまうと、もう、戻れないんだ。この、運命だけは、変えられない。嶺は、だめだよ」

声を、押し殺して、泣いているのが、判った。

「俺もさ……。嶺を、何度も、説得したの。だけど。こういう事なんだ。」

エレベーターの、スイッチを押し、美央の、肩を、抱いた。

「俺も、昔。見ていた事が、あったんだけどね」

深いため息が、拓斗から漏れた。

「俺なら、幸せに、する自身があっただけど……。」

小さく拓斗は、呟いた。美央に、聞かれないように。

「いない。」

嶺が、マンションに着いて、ドアを開けるなり、呟いた。玄関で、美央の、履物を、調べると、履いていたらしき靴の、見当は、つかず、どうやら、裸足で、飛び出していったらしい。

「これ……。」

部屋の、奥から、美央の物らしき携帯を、莉音が、見つけてきた。

「美央さんの携帯よね。」

「そう。」

嶺は、手にとった。クリスタルのベアのついた紅い携帯が、開かれ

たまま、投げ捨てられてあった。

「だから、言ったのに。」

莉音は、深くため息をついた。

「美央さん。赤ちゃんが、いるのに。」

莉音は、もう、泣きそうになっていた。

「こんなの嫌。もう、辛い思いするのも、させるのも、嫌なの」

何よりも、辛いのは、二人の生活の、痕跡を、ここで、目にするのが、辛かった。色の無かった部屋は、明るい色で、統一されていた。グレーだった、タペストリーは、クリーム色のカーテンになり、グリーンのリボンで、縁取りされていた。観葉植物が、幾つも並び、よく手入れされていた。そして、オープンキッチンには、食器が、二つずつ並び、洗面所には、ハブラシが、2本ならんであった。そして、何より、ショックだったのは、ベッドに、枕が、二つ並んでいた事だった。見ないふりを、していたが、ここには、美央と嶺の、生活の、匂いがあった。

「何より、美央さんの体が、心配だわ。」

それでも、莉音は、美央の体を気遣った。

「嶺。美央さんの行き先に、心あたりは、ないの？」

嶺は、黙って、キッチンに立ち、コーヒーを、入れ始めていた。そんな嶺の態度に、イラつとしながら、莉音は、詰め寄った。

「嶺？」

最初は、なかなか、答えようとしなかったが、莉音が、コーヒーを淹れる手を抑えると、複雑な顔をしながら、答えた。

「あるよ・・・」

カップに注いだコーヒーを、莉音に差し出した。

「それは、言っている事かどうか、俺は、判らないんだけど」

コーヒーを、一口、すすった。

「どういう事なの？」

渡されたカップを、両手で、包みながら、莉音は聞いた。

「美央の、俺に対する思いは、今、進行している思いなんかじゃな

いんだ。きっと。あいつが、好きなのは、昔の、俺だと思う・・・。

深くため息を、つき、遠く、思いを馳せた顔をした。

「ただ・・・俺に、対する執着だと思う。あいつは、そんなに、俺を、思っちゃない。」

莉音を、真っ直ぐに、みつめた。感情のない瞳だった。

「莉音の存在を知って、変わったんだ。それに・・・。」

嶺は、言うかどうか、迷っているようだ。

「なあに？嶺。」

莉音は、嶺の口元を、見つめた。

「うん・・・。まだ、はっきりは、言えない。あくまでも、推測だから。」

嶺は、カップを、置いた。

「莉音聞いてほしい。」

莉音の両肩に手を置いた。

「俺は、君を、裏切ってはいない。」

いつの間に、こんなに、莉音は、痩せてしまったんだろう・・・。

嶺は、莉音の肩に触れて、そう、思った。こんなに、自分が、知らない間に、痩せてしまった。莉音を、苦しめている自分の、非力さをのろった。

「美央さ・・・。きっと、考えたんだ。」

何を言い出すのかと、莉音は、聞いていた。嶺の発する言葉は、莉音の驚く内容だった。

「妊娠すれば、俺を繋ぎとめると、思ったんだろうか・・・。」

「それって？」

莉音は、聞き返した。

「とにかく、妊娠すればいいって、考えたって、事？」

嶺は、目を伏せた。

「馬鹿だよな・・・。どうしても、子供が、欲しいからって。」

「嶺の子じゃないの？」

莉音は、体を硬くした。

「たぶん。」

自分は、嶺と美央の子供の将来を考えていた。子供にとって、実の両親と暮らした方が幸せだと、何回も言い聞かせていた。

「それは……。嶺」

「そこまで、させた。」

嶺の、何よりも、暗く沈んだ哀しい声だった。

「そこまでして？」

何とも言えない悲しみが、込み上げてくるのを、莉音は、感じた。

「そうなんだ。そこまでして……。あいつは。」

「嶺の子供じゃないの？じゃあ、今、美央さんがいるのは。」

「……。そこ。かもしれない。」

探そうとも、せず、落ち着いているのは、美央の行く先を、知っているせいだった。

「まさか。そんな事……。お願い。それは、あくまでも、推測でしょ？」

莉音には、そう思えなかった。美央は、嶺を思っている事に間違いはなかった。

「他の人との子供なんて、考えられない。とにかく、探しましょう。」

莉音が、玄関に、向かおうとすると、嶺が、莉音の、腕を、後ろから、つかんだ。

「いいんだよ。」

嶺の携帯が、着信を、知らせていた。

「ほら……。来た。」

莉音を、見つめながら、嶺は、携帯を、耳にあてていた。

「はい？」

莉音には、みせた事のない。冷たい嶺の、横顔だった。

窓の外には、限りなく夜景が広がっていた。色とりどりの夜景。暖

かく見える筈の夜景も、今の美央には、どうしても、よかった。

「三人で、話したいって。嶺が、言うの……。」

立って、いられなくなり、美央は、ソファーに、尻餅をつくように、座り込んだ。

「二人を、みるのが、辛いの。」

辛そうに、拓斗を見た。

「嶺や莉音さん。一人だけで、話をする事は、できるけど。二人並んで、話をするのは、嫌なの。あの、二人の間に、私は、入れないと思う。」

拓斗は、美央の隣に、当たり前のように、腰かけ、熱いお茶を、渡した。

「少し、落ち着いたら？」

「怖い。」

美央は、両手で、顔を覆った。

「やっと、落ち着いて、生活が、できる様に、なったのに……。」
一旦、諦めていた。嶺との生活を、手にいれた今、今更、手放せなくなっていた。

「ここまで、きたら、別れるしかないって、判ってる。」

もう、この生活と別れる事は、出来なくなっていた。莉音の前で、一人でも、子供を育てると言った美央では、なくなっていた。

「でも、この秘密だけは、嶺に知られたくない」

「バカな事をするから……。」

拓斗は、美央の髪を撫でた。

「だから……。俺と一緒になれば、よかったのに……。美央。俺は、君が嶺を、好きだから、諦めたのに……。こんな辛い思いするんだったら……。」

美央は、顔をゆっくりと、あげた。

「ごめんなさい。拓斗。」

「今、君は、幸せじゃないんだ……。」

「拓斗。」

拓斗が、たまらず、唇を重ねようとしたが、美央は、ゆっくり、顔を、はずした。

「ごめん。拓斗。」

美央は、ちいさく謝った。

「嶺を忘れられない。」

「いいよ……。俺には、十分な絆が、あるから。」

拓斗が、美央のお腹に、触ろうとするのを、美央は、片手で、押し戻した。

「拓斗。駄目。」

「美央。」

「二人の秘密にして」

拓斗は、ため息をついた。

「わかってるよ。とにかく、ここに、ずっと、居る訳にも、いかな
いだろう？俺も、話しに、加わるから。みんな、話しようか？」

「いてくれるの？」

美央が、安堵を浮かべた。

「嶺。あいつが、許すなら。」

「そうね。」

美央は、決心していた。

「それに、いつかは、話さなきゃ。だよな？」

「話すって？」

「本当の事。」

「嫌よ。」

「いつか、ばれる。」

「美央。君が嶺を、いつまでも、思うように……。俺だって。」

「拓斗！」

美央には、拓斗の思いが、わかっていた。拓斗の気持ちを利用し、
嶺の心を？ぎとめようとしていた。

「待ってるよ。美央。いつまでも。」

きつと、美央は、拓斗と、一緒になったほうが、幸せになれるのだ。

どうして、思われる事より、思う方を選んでしまっただろうか。美央の幸せは、本当は、目の前にあるというのに。

「何も、心配しないでいい。俺が、いるから。」

拓斗の美央への愛情は、誰よりも、深かった。そして、彼は、携帯を、棚から、とりだすと、美央に、軽く、うなずき、かけはじめた。

「嶺？俺だけど。話があるんだ」

窓の外には、とおい街並みが、広がっていた。

莉音は、ありあわせのもので、食事を作っていた。本当は、持ち帰る筈だった、フルーツの、シロップ煮とかで、サンドイッチを、作った。

「何か、食べないと・・・。」

差し出したものを、美央は、首をふった。

「あまり・・・。食べたくないの」

「でも・・・。食べないと。」

莉音は、美央の身を案じていた。

「母親が、食欲なくてもお腹の子供は、必要な養分は、とっていくんだよ。」

拓斗が、言った。

「じゃあ・・・。ハーブティにするわ。」

莉音は、買い物袋を、ひっくり返した。

「いろいろ、出てくるな・・・。」

嶺は、笑った。

「何か、アニメの、ポケットみたいだな。」

「なるべくね・・・。」

莉音は、言った。

「自然なものを、食べようと、思ってたの。あまり・・・。調子よくなかったし・・・。」

最後は、ちいさな声になっていた。

「来夏の子供達にも・・・。体にいいものを、食べさせたいと思って

いて。」

ローズティーに、ハチミツを、入れた。

「勝手に、キッチンを、いじって、ごめんなさい。」

拓斗に、謝った。今……。嶺と莉音は、拓斗のマンションにいた。

あの後、嶺の携帯に拓斗から、連絡があつて、美央を、迎えにきたのである。正確に言うと、話をしにきたのである。

「話さなくちゃ……。いけない事がたくさんある。」

嶺が、口火をきった。

「そうだな……。」

拓斗は、じつと、嶺を見据えていた。

「これから……。どうするかだ。」

そう、拓斗は、言った。

「嶺。俺は言つたよな。止めた筈だよな。」

「拓斗。本当の事を、話そうよ。」

「本当の事？」

「誰がどうしたいかだよ。拓……。お前には、俺に言えない秘密がないか？」

美央が、顔を上げた。

「その答えは、美央。判っているよね？」

嶺が、優しく語りかけた。

「美央。もしかして……。なんだけど。」

付け加える。本当の事を、匂わせながら。

「その子は……。？」

「やめて！」

たまらず、莉音が、叫んだ。

「美央さんの気持ちを考えて。今、話さなくちゃ、いけないのは、そんな事でないでしょ？」

美央は、目を伏せていた。心配そうな表情を、向ける拓斗。その様子が、全てを、語っていた。

「美央さん。嶺と一緒にいたいんでしょう？いて、いいの。あたし

は、もう、十分なの。」

莉音は、美央に語りかけた。

「きつと、あたしは、あなたには、勝てない。そこまで、嶺を、思うなんて。」

買った物してきた食材を、テーブルに並べると、持ってきた袋を、小さく畳み始めた。

「嶺。やっぱり、嶺は、今まで、どおり、美央さんと、暮らすのよ。。。」

脳裏には、嶺と美緒の生活の場が、浮かんでいた。

「何もかも、元に戻す。それで、いいと思う。」

バッグを手にとった。

「拓斗さん？本当に、美央さんの事が、好きなら、きちんとすべきだわ。まだ、間に合う。それから、話をして。どうすれば、いいか。」

莉音は、もう、帰るつもりだった。

「嶺。あたし、帰る。」

「ダメだよ。莉音。俺は。。。。」

「嶺。もう、答えは、出てる。とにかく、美央さんと、家に帰って、話をするの。一番は、生まれてくる子供の事を、考えてあげて。。。。」

莉音は、3人の顔を見た。

「どうすれば、一番、いい環境を与えてあげられるか。。。それを、考えましょう。」

もう、自分は、帰るつもりだった。バッグの中、お財布には、帰りのタクシー代が、入っているのだろうか？それが、気になった。

「莉音。待つて。」

嶺が、引き止めた。

「もう、終ろうよ。嶺。」

寂しい微笑を浮かべた。

「十分だったよ。ここまで、来れたのも。嶺の気持ちは、判ったし。」

すごく、嬉しかった。でもね・・・」

美央との、生活を、見てしまった。胸の奥が、チクリと痛んだ。自分の知らない美央との生活。

「もう、現実見ないと。」

嶺との事は、しばらく、ひきずる事になるだろう。どんな事があっても、一緒にいたいと思ったが、現実が、それを、許してくれそうに、なかった。

「連絡をとらないなんて、事はしないから。気が向いたら、メールの返信くらいは、するから。」

玄関で、靴を、履きながら言った。

「ここで、さよならさせて。」

「莉音。行くな！」

嶺は、追った。

「別れの話をするのに、連れ戻しに行ったんじゃない！」

追う嶺の姿を、美央は、見ていた。

「時間を、取り戻したかった。事故にあった時、後悔したんだ。やっぱり、離れるなんて、できないって。」

莉音の手をとった。

「ずっと、後悔してきた。あの日から・・・君が、いなくなつて、思わなかった日は、ない」

たぶん。嶺には、今、莉音の姿しか、見えてなかった。

「美央。許して欲しい。」

嶺は、振り返り、美央に謝ろうとした。その時、美央と拓斗が、驚きの表情を浮かべたのを、嶺は、見た。掴んだ嶺の手が、莉音に、引っ張られた感じが、した。

「莉音？」

莉音は、判っていたんだと思う。自分が、ここで、嶺を、引き止める理由がないという事を。自分の体に、何が起きようとしているのかを・・・。

「莉音！」

片手だけでは、支えられなかった。莉音は、膝から、後ろへと、崩れ落ちていったのである。

「どうして？」

果然と、嶺は、倒れる莉音を、抱えているだけであつた。

「今まで、何度も、こんな症状が、あつた筈です。」

硬い表情で、嶺は、告げられた。急遽、よびだされた莉音の、妹も、説明に付き添つて、いたが、あまりにも、子供達がぐずるので、廊下で待つ事になった。以前の事故の事。妹宅に、身をよせてる時も、あまり病院に、行こうとしなかった事や、時々、具合の悪い事が、あつた事を、妹から、聞かされ、ようやく、嶺は、事の、重大さに、気づいた。もう、莉音の、時間が、そこに、せまっていた。

「もう、心臓が、持たないかもしれない。」

医師の、説明を聞き終え、面談室から、出てきた嶺は、悲痛な、面持ちで、妹の来夏の、隣に、体を、投げるように、腰かけた。

「移植できれば、希望は、持てるが、秋まで、ドナーが、みつからなければ……。」

こんな事、ある筈が無い。ようやく、莉音と、一緒に生きていこうとしていたのに。これから、二人で、生活していけるとばかり、信じていたのに。今、自分達に、おきている、事実を、受け入れる事が、できないで、いた。莉音の、心臓は、もう限界が来ていた。

「また、莉音が、いなくなるなんて……。信じられない。」

「嶺さん。姉は、あの事故で、助かつたのだつて、奇跡なんです。

今、こうして、生きていられたのだつて……。」

「希望が、持てたんだ……。もっと、生きていなきゃ。」

生きなきゃ……。後は、言葉にならなかった。湧き上がる言葉は、反省と、悔しさ。恨めしさ。いろんな感情が、湧き上がるが、嶺は、言葉にする事もできず、黙つて、唇を、噛み締めていた。来夏と、肩を並べて、すわる暗い廊下に、子供達の、寝息だけが、聞こえていた。

嶺が、莉音と面会を、許されたのは、それから、1週間ほどしてからで、あった。その間の嶺は、莉音の病室を、窓の外から、見上げるだけの日々が、続いた。美央は、莉音が倒れた日から、実家に帰り、嶺とは、近況報告の電話をするだけで、お互いに、今後について、話す事は、なかった。そのうち、美央から、電話があった。

「嶺。聞いたわ。莉音さんの事。」

「直接、会って、話そうと思っていたんだ。やっぱり、結論を出さなければ、いけないと思ってる。」

「あんな事があると、そうよね。」

「お願いだから……。美央。俺、みつともないかもしれない……。」

「何度も、繰り返すのよね。その話……。」

「時間がないんだ。」

「嶺。……。」

美央は、黙った。

「もう、後悔ばかりだ。もっと、早く、言えばよかった。莉音という時が、一番、安心するんだ。」

美央は、笑った。

「何を言っても、ダメみたいね？」

「ごめん。美央には、こう、応えられない。」

「あたしは、昔のあなたが好きだったみたい。今は、もう、違う人なのね。」

独り言のように、呟いた。

「あなたと、もっと、暮らしたかったな……。」

「それは……。」

「いいの。」

美央は、深いため息をついた。そして、

「嶺。もう、自由にしてあげる。」

自分にも、プライドがある。

「離婚届は、サインして、送るわ。」

嶺が、言い出すかわりに、自分から、言い出した。

「あたしにも、プライドがあるの。親には、適当に言っておく。この子は、あたしが、育てるから……。」

嶺が、返事をしようと、する間もなく、携帯は、切れていた。

「美央……。」

美央が、好きだった。いつも、一生懸命で。長い年月は、愛情の形を変えてしまっていた。間もなく、一通の、封筒が、届いた頃、面会の許可があり、莉音と、久しぶりの逢瀬という事になった。

「待つてた」

病室の戸を開けると、そう、あの日と、同じように、莉音は、窓際の、ベッドに、上半身をおこし、こちらを、みつめながら、笑みを、浮かべていた。

「足音で、すぐ、嶺だとわかったの」

あの夜の事なんて、忘れたかのように、莉音は、話かけた。

「嶺に、言わなきゃならない事、たくさんあつて……。」

莉音自身隠していた、病気の事。もう、医師から聴いて、知っていると嶺は、笑って見せた。

「ばれちゃった？」

「うん。全部。」

嶺は、莉音の、隣に、腰かけた。

「もう、嘘は、ない？」

嶺は、莉音に聞いた。

「あるかもしれない。」

じつと、嶺の瞳をみつめていた。

「何？」

嶺は、莉音に尋ねた。

「ずーっと、一緒に居るって、嘘」

莉音は、答えた。目が、潤んでいた。

「一緒に、いようよ。」

「いたいけど・・・でも。」

莉音の答えを遮るように、嶺は、莉音の、手を、とると、ポケットから、小さい箱を取り出した。

「まださ・・・。高いのとか、買えないんだけど・・・。」

照れながら、莉音の、薬指に、はめた。小さいダイヤの入った指輪だった。

「俺。決めたんだ。ずーっと、一緒にいるのは、莉音しかないって。」

「だけど。あたしは・・・。」

生きられないよ・・・。そう言いたかった。

「いいんだ。やっと、なんだ。やっと、一緒になれるんだ。ほんの、すこしでも、時間を、共有したい」

嶺は、莉音を、そっと、抱きしめた。壊れ物を、抱くように・・・。いつの間にか、細くなった莉音の体だった。こんなに、彼女は、細かっただろうか・・・？

「結婚できるよ。莉音。俺達、堂々と、街を歩けるんだ。二人。祝福してもらえるんだ。」

誰からも、認めてもらえる。もう、隣の街まで、行ってデートする事も、隠れて、車に、乗る事もない。

「そうなのね。」

穏やかな笑顔だった。

「やっとだよ・・・。莉音。」

莉音の、薬指に、小さな指輪が、気高い光を放っていた。

季節が、变ろうとしていた。莉音の体調は、嶺と入籍できた嬉しさもあって、すこぶるよかった。何度か、病室を、内緒で、抜け出し、看護士に、叱られる程、元気になっていたが、やはり、時々不調を、訴える事もあった。最大の心配事でもあったが、幸せだった。周りに、祝福される事。何より幸せなのは、どこでも、嶺と、一緒に居

れる事だった。

「ねえ！」

莉音は、イタズラしたい気持ちでいっぱいだった。

「また、ぬけだしちゃいましょう？」

「また？」

「そう。今晚。」

「どこに？」

「お向かいの、教会で、今晚。お式があるの。」

莉音は、嶺を、みつめた。キラキラした綺麗な目だった。

「それでね」

莉音は、照れてた。

「見にいかない？」

病院の、反対側にある教会で、今晚結婚式があるという。莉音は、それを、見たいというのだ。

「ああ・・・。」

嶺は、思った。入籍を、済ませたものの。まだ、式らしい。式は、済ませていなかった。心移植が、落ち着いてからか・・・。体調が、落ち着いてからとは、考えていたのだ。

・・・本当は、ドレスが、着たいのか・・・

「最近。体調いいみたいだし。」

莉音は、言った。元気な特別な笑顔だ。

「花嫁さん。見たーい。見たいでーす！」

莉音は、ふざけて、両手を挙げた。

「はいはい。」

嶺は、苦笑いした。ベッドの上で、莉音は、ピョンピョン跳ねそうになり、嶺は、あわてて、制した。

「まったく。連れて行くから・・・。」

「あのね。たくさん。したい事があるの。ドレスも着たいし。」
早口で、まくしたてる。

「それと、そう・・・。8月の、花火も、行きたいの。それが、無

理なら、嶺の言つてた秋花火！秋花火を、見てみたい！」

まだ、とまらない。

「それと……。えつと……。子供も、たくさん。ほしい！」

「えーっ」

話は、急にとんだ。

「照れないの」

考えれば、考える程、嶺と一緒に、経験したい事が、たくさんあった。

「はいはい。お姫様」

両手で、莉音を、抱きしめながら、嶺は、ある考えが、閃いていた。

「それで、これなの？」

莉音は、うれしそうな声をあげた。しばらく、買い物に行つて、戻つてきた嶺は、莉音に、お土産と言いながら、紙袋を手渡した。おそろおそろ開けてみると、そこには、シンプルな白いワンピースが入っていた。

「サイズも好みも、良くわからないから。妹さんに、聞いたんだ。シンプルなワンピースなら、いいかと思つて。それで」

嶺は、思いつきり照れていた。こんな顔は、始めて、莉音に見せた。「一応、これも、用意したんだ」

そーつと、出したのは、ベールと白いバラのブーケだった。

「結構、恥ずかしかったんだよ」

照れながら、莉音に、渡した。

「これを、探してくれたの？」

「うん。」

「ありがとう……。」

莉音は、そつと、ブーケに顔を埋めた。

「今夜。行こうよ。遠くから、みながら、二人だけで、こっそり、式を挙げよう」

「うん」

莉音は、頷いた。じんわりと、目が、潤んでいた。そして、嶺は、莉音の、額にかかるキスをした。夜までの時間が、楽しみになった一瞬だった。

夕方から、シヨボシヨボと、冷たい雨が、降り出した。窓を、濡らし始め、事もあるうか、莉音の体調が、崩れ始めた。昼間、ハシヤギすぎたのか、ベッドに伏せて、起き上がれないくらい体調が悪くなっていた。

「無理しすぎたかな・・・。」

息が、苦しい。胸も・・・。苦しい息の中、莉音は、反省の言葉を、口に、恨めしそうに、空を見上げていた。

「今日の、お式の人達は、大変ね。」

見知らないカップルに、同情し、そう呟くと、うとうとと、眠りについた。この日から、莉音の体調は、日増しに悪くなっていた。白いドレスも、頭上に、飾られたままになっていく。夏は、そこまで迫っているのに、このままでは、楽しみにしていた花火大会も、病室の、窓から、見る羽目になりそうだった。

「もう、少ししたら、夏も、終わるのね」

哀しそうに、莉音は、言った。再び、少しずつ、痩せていき、長い髪と色の白さが、莉音の、美しさを、はかなく映し出していた。

「もう・・・。」

嶺は、莉音の、いない病院の、屋上で、何度、悲しみを、こらえたか・・・。

「もう。時間が、ないのか・・・。」

時間が、そこまで、せまっていた、体が、良くなる兆しは、何処にも、なく、ついこの間まで、響いていた莉音の笑い声も、全く聞えなく、なっていた。あるのは、苦しい息の、莉音の息だけだった。

「莉音・・・。」

嶺が、眠りにつくときに、頬に触れると

「ねえ。嶺」

莉音は、うつすらと、目を開けた。そして、嶺を見上げた。最近は、起きる事が、めつきり、減っていた。

「お願いがあるの」

「何？」

「一緒に、花火を見たいの」

「この夏のは、無理だよ」

「だめ？」

「だめ。ごめん。この体調じゃ。無理させたくない」

「遠くからも？」

「無理させたくないんだ」

莉音の、瞳が、残念がった。

「じゃあ！秋花火。頭上で、見たい。」

・・・無理だよ・・・と、嶺は、言いたかったが、言葉を、飲み込んだ。

「うーん。体調が、戻ったらね。」

嶺は、嘘をついた。

「約束」

「うん。約束」

莉音は、少しだけ、元気な、ふりをした。

「お願いがあるの。花火の時。ね？」

嶺の、腕を、握り締めた。

「お願い。その、服着て、行きたい」

莉音は、頭上のドレスを、指差した。

「だな。ブーケは、無理。恥ずかしい。」

「わかってるよ。」

「本当に、わかってるのかな？」

嶺は、笑った。秋花火まで、莉音は、持たないかもしれない。そう。不安な気持ちは、心の奥に隠したまま、莉音に、微笑みかけるのだ。った。

・・・本当に、莉音。君が、一緒に、見たいというのなら。叶えて

あげよう・・・

嶺は、莉音の、願いを、叶えたいと思い始めていた。

・・・それまで、莉音。生きていてほしい・・・。

思えば、僕は、君との時間を、少しでも大切にすれば良かったのかもしれない。一緒に居る時間を大切に、大切に。逢っている間は、楽しくて、そんな事、感じる事さえ、なかった。何よりも、一番は、君を傷つけてしまった事。周りを、傷つけてしまふのを恐れ、僕は、一番大切にしなければ、ならない君を、傷つけてしまった。僕らの、恋の始まりは、世間という不倫から、始まった。不倫と言っても、君は、花嫁になりたてだったから・・・。いや、やはり、そうなのかな。人の物だからね。（笑）

君と出逢わなければ、君は、普通にあの人と、生活が続ける事が、出来たのだろうか？僕は、美央と結婚し、子供をもつけ、新たに恋する事もなく、平和に生活したのだろうか・・・。結婚してしまえば、恋をする事なんて、ないのだろうか・・・。僕らは、あの瞬間に、恋をしてしまった。出逢わなければ、良かったのか？それは、わからない。でも、僕は、莉音に逢えて、良かったと思う。それが、君も、同じく思つかは、わからないが。君への思いは、僕に力をくれた。今までに無い、エネルギーとなつて、僕を支えてくれた。人を、傷つけない恋なんて、あるのだろうか・・・。

莉音。僕は、君に逢えてよかったと思うよ。後悔するとしたら、もっと、全力で、君を愛し抜けなかった事。もっと、自分の気持ちに、正直に、君への思いを貫けばよかったと後悔している。周りを、傷つけずに、愛しぬくなんて、出来る訳が無いよね。あの時、もっとはやく、君を、奪えばよかった。君だけへの、気持ちで、行動するには、若さが、ほしかったよね。

やっぱり、夏の終わりの、花火は、みれなかったね。どうしても、秋花火を莉音は、見たいといって聞かなかった。時間が、せまっていた。ドナーが、現れていたとしても、心臓は、手術に耐えられな

いところまで来ていた。それでも、秋花火を、見たいと言ったんだ。秋の終わりに見る花火なんだ。当然。山から、来る風は、冷たく、弱っていた君の体を痛めつける。莉音は、あの白いワンピースを着ると言って、きかなかった。寒いかもしれないと言って、来夏さんの用意したカーディガンを、羽織って、病院を、抜け出した。このまま、居ても、もう、二度と、花火を見れないと思ったんだ。莉音は、嬉しそうだった。また、前の元気な頃の、莉音に、戻っていた。秋花火を見るんだ。君と。いつか、約束した秋空に散る哀しい花火を。

「来年は、何してると思う？」

莉音は、僕の腕の中で、空を、見上げていた。音とともに、縦に横に花火が、散っていた。遠く山々からの、風は、冷たく晩秋を、知らせていた。

「来年も、一緒に居ると思う」

ふっと。莉音は、笑った。

「そうだよね」

「やっと。一緒になれたんだ。ずーっと、いっしょにいると思う」

莉音の、白い顔が、花火の明りで、はつきりと見えた。ああ・・・

僕の好きになった人の顔だ。よく、見ておこう。この瞳が、僕をよく、見つめていた。忘れる事は、ないだろう。この人と、出会って、僕は、本当に、人を、愛する事を知ったんだと思う。莉音。今、君は、何を、思っているんだい？僕と出逢って、君は、幸せだったんだろうか。

「嶺と、逢えて、良かった。」

僕の気持ちだが、届いたのか、莉音は、そう答えた。

「哀しい事も。嬉しいことも、全て、嶺からだった。でも。嶺が、あたしに、生きていく楽しさを、教えてくれたの。」

莉音の、瞳が、僕の姿を映していた。

「嶺。」

かすかに、睫が、震えていた。

「ねえ……。」

莉音が、甘えた声を出した。

「なんか……。疲れたみたい。寝てもいい？」

「いいよ。」

莉音の、目尻から、涙が、あふれていた。

「起きるまで、傍にいてね」

「わかってるよ。莉音。傍にいるよ。ずっと」

莉音は、目を閉じていた。目尻から、細く涙が、伝い落ちる。莉音の、僕に、触れている手が、少しずつ、冷たくなっていった。

「莉音」

白いワンピースが、まるで、花嫁衣裳のように見えた。

「綺麗だよ。莉音」

冷たくなっていく莉音の頬に、僕は、頬寄せた。花火の時期は、もう終るだろう。

莉音。僕は、君を、忘れる事は、できないだろう。花嫁姿の君に恋し、はじまった恋。君を愛する事は、とめられなかった……。

莉音。

君を永遠に愛し続ける……。永遠に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5401m/>

秋花火を君と・・・。（完全版）

2010年10月9日18時38分発行